部報

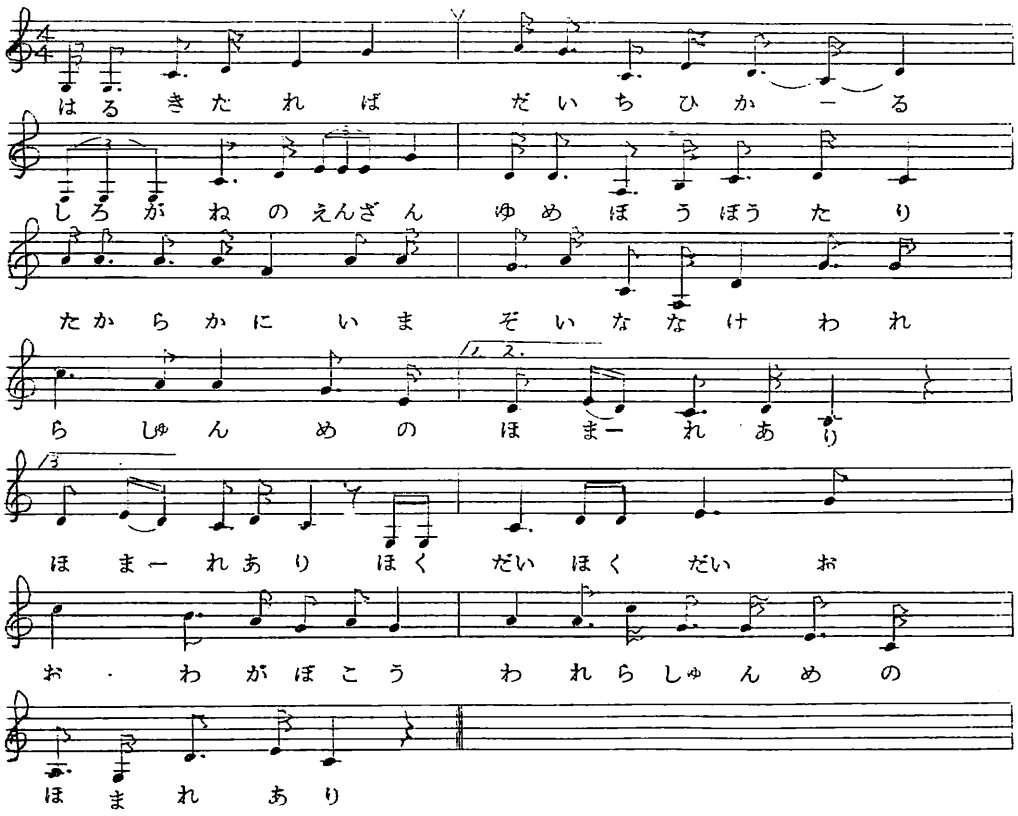
昭和四十二年度

北海道大学体育会馬術部

偉大なれ雄大なれ
　山のごとく
厳しくあれ
　冬山のごとく
技術を高めろ
　頂のごとく
荒々しくあれ
　吹雪くがごとく
沈着・冷静なれ
　眠れる湖のごとく
親愛なれ
　太陽のごとし
いざゆかん
そして見つけん
　新ルート
我等北大馬術部
　発展のために

北大馬術部讃歌

作詩　三浦　清一郎
作曲　滝沢　南海雄



北大馬術部讃歌

一、
春来たれば、大地光る
銀の遠山、夢茫々たり
高らかに　今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

二、
時来たれば　旗をかざせ
青雲の旅路に　意気軒昂たり
高らかに　今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

三、
雲流れて　旅路遙か
青春の孤杖　泥濘はばめど
凛然と　進みて行かむ
駿馬のほまれあるかぎり

北大！　北大！　おゝ我が母校
われら駿馬のほまれあり

目次

巻頭言　部長　半沢道郎　3
御挨拶　主務　春田恭彦　5
年頭所感　監督　岡田光夫　8
戦績及び行事報告　記録　寺崎弘恭　9
会計報告　会計　遠藤裕子　13
マネージャーより　主務　田中力　14
各馬調教報告
北翔号　三年目　春田恭彦　16
北瓔と思い出話　三年目　村井弘一　17
北彗号　三年目　田中力　20
お手紙　三年目　斉藤勝雄　21
北顒号　三年目　寺崎弘恭　22
デコ（北秀号）について　三年目　村井弘一　23
サロン
自己紹介　北凛子　25
卒業生のプロフィル　四年目　山本紘明　28
答辞　27
部報に寄せて　四年目　仙波和子　31

我・馬ヨリ自然ヲ愛ス　四年目　降旗正忠……32
フランスだより　昭三四年卒　千葉幹夫……34
お手紙……36
随想　同好会幹事　佐合義弘……37
孫の弁　二年目　本田徹……40
戒　一年目　中寺清久……42
無題　一年目　村田節子……42
馬　二年目　加藤公敏……43

◇

北飄号特集
北飄とのこと　昭三九年卒　恩田正臣……50
北飄号調教記録　昭四〇年卒　野田行文……52
ずいそう　昭四二年卒　近藤喜十郎……55
K・Iへ　医学部四年目　田中倬……56
四年間　四年目　池田統洋……57
北飄号　三年目　田中力……60
永遠の名馬〝北飄号に送る歌〟　三年目　田中力……62
馬……62

巻頭言

部長　半沢道郎

今年も正月二日の初乗りを部員諸君と一緒に北海道神宮に詣で、開道百年の記念すべき新年を祝うことができた。本道の開拓に力を入れられるようになつてから一世紀が過ぎ、更にこれから新しい百年に向つて、輝やかしい北海道を築こうというので、北海道に在住する者にとつては正に一劃を区切つて、先人の遺業を偲び、決意を新たにして将来に臨む好機であると思う。日新月歩の時代に徒に古い昔を顧るのでは無く、温故知新の語のように現在自分の置かれている社会の歴史的な経過を知り、自分の立場をよく理解して、先人の辛苦の蹟を偲び乍ら、その逞しい努力の基礎の上に更に立派なものを樹てようとする前進のための回顧であることが、百年祭の持つ意義であると思う。

さて北大馬術部の歴史も乗馬会の時代から数えると四五年、馬術部になつてからでも、そろそろ四〇年に近づいて、既に決して新しいものではなく、この間に先輩諸兄の遺された苦心が積み重ねられて、善きにつけ悪きにつけ簡単には拭い落すことのできない部の伝統が築かれていて、現部員諸君はその伝統の中にあつてそれを護り、その基盤の上により良い新しいものを築いて後輩に残すべく日夜努力をし精進をしているのであると信ずる。部の歴史については既に北大馬術部十年誌と三十年史に詳しく書き遺されているから、新しい部員諸君は是非一読して頂き、部の育い立ちや、血と汗の滲んだ先輩の労苦を偲んで一層の困苦に堪えてより善き伝統を築く決意を持つて頂き度い。

部員諸君の努力と、大学当局の方々や先輩諸兄の温かい援助によつて、苦しかつた財政面も次第に好転し、幸に数頭の乗馬の繁養を続けることができたが、数十名の部員の練習にはなお不充分であることは否めないことであると考えられるので、この点についてもなお一層の努力が必要である。少ない頭数での練習に苦慮している時に愛馬北飆を失つた事は誠に残念であり、彼女の育成調教に心血を注がれた先輩諸兄には本当に申訳け無いことであつた。然し些細な不注意が影響の大きい悲惨な事故に連がることの高価な教訓であつて、部員諸君は真に身に浸みて教えられたのであつて、事故が起きてから馬場の一隅に手厚く埋葬するまでに示された部員諸君の悲痛な、しかも温かい心情と行動は非常に貴いもので、北飆の死は決して大きい損害だけではなく、精神的に部に大きな貢献をしたのであつて、この教訓も永く部の歴史と共に伝えられるであろう。

ポプラ並木の傍に手稲連峰を望む北大一の風光に恵まれ、大正時代から畜産学科の学生馬術の練習場として、また畜産学科に乗馬の課目が無くなつてからは、専ら馬術部の練習場として本道の馬術の発展にも貢献して来た、あの先輩の血と汗の滲みこんだ思い出深い第一農場の馬場も、牛舎の一角に十四年間住み慣れた部室も、みすぼらしくて懐かしい厩舎も、第一農場の改築移転に伴つて、おそらく今年一ぱいでお別れすることになり、多分綜合グランドの中に移転することになるのは誠に名残り惜しく寂しいことであるが、学生部や施設課で非常に厚意を以て善処する計画が練られているので、近い将来に整つた施設が作られることを期待している。この際に部員諸君は先輩から受け継いだ旺盛な開拓精神を発揮し、北海道の新しい時代への発足と共に、新しい馬術部を造る為めに、輝かしい将来の発展を期待して一層の団結と努力をもつて、諸君が受け持たされたこの一大転期にその責任を立派に果して、益々優秀な団体として頂くことを切に願うものである。

明年は国立七大学の定期戦の当番校であるので新しい馬場を優勝で飾り度いものと望んでいる。

御挨拶

主将　春田恭彦

数年来の懸案であつた赤字問題は後援会及び学生部の御協力、又部員によるアルバイトなどで昨年春をもつて解消し、更に学生部の積極的御協力及び農場の好意により新たに健全財政となり、一時は五頭にまで減つた馬匹数がようやく七頭にまでこぎつけることができましたが、まだ練習に馬匹が不足して支障をきたしていますが、財政面では支障なく活動できるようになりましたことに深く感謝致します。

赤字解消の内訳は後援会報でお知らせしたとおりでございますので省略致しますが、今後共我々の活動に多大の御協力、御指導の程よろしくお願い致します。

一、馬術部に対する個人的見解

我々は何のために馬術部に入つているかを考えてみよう。

この現代社会の巨大な機構の中における一個人。何とちつぽけなものであろう。そういう中で我々のとる行動をみて知らず知らずうちに組織に動かされ自己を見失い、只々慢然と毎日を過しがちである。比較的めぐまれた大学という環境の中にあつてさえそのようなことを感じることはしばしばあるのではないだろうか。自主的・主体的行動とは人間の最も人間らしい点ではないだろうか。もちろん自主的・主体的行動といつても相互の理解・協力は欠くことのできない原則ではあるが。

北大馬術部、ちつぽけな集団ではあるが、友人との協力・理解・最も大切な自主的・主体的行動を充分とり得るところであると確信する。

どんなちつぽけな社会でも規律と秩序はなくてはならない。封建社会に於けるそれは一人の専制君主が独裁的に強いたものであつた、しかし我々のそれはそうではない。諸先輩が一年目から出発し卒業するまでに得た数々の成功と失敗が生みだした財産である。そして我々も又その重要な担手である。部員たるべき者このことをしつかり認識し自主的・積極的に練習に諸活動に励んでもらいたい。

二、栄光への脱出

昨年度をふり返つてみると、全国大会における成績こそ芳しくなかつたが、北大馬術部の自馬体制が迂余曲折しながらも着々と形づくられていつた。自馬体制への過渡期だという弁解はもはや通用しなくなつてきていることが痛感される。そしてそれは合宿・強化練習あるいは試合のたびに部全体からもり上つてきているのである。

我々は一人で馬術に励んでいるのではなく部全体が一体となつて一つの目標に向つて進んでゆかなくてはならない。全ての馬が、全ての部員が一丸となつて、練習においては指導者の指示に従い、

調教においては一つの目標に向つて血みどろの努力を傾けてこそ北大馬術部にいることのよろこび、勝利の感激、青春をかけて悔いのないことを実感として味わえるのではないだろうか。

数年来唱えられているように我々の目標は総合馬を作ることである。この目標がある限りイタリー式は永遠に北大馬術部から消え去ることはない。我々は今まで伊式を誤解してはいなかつたか。たとえばその大原則である無理・困難・束縛を排せと信ずるあまり知らず知らずうちに馬の放埒を許してしまつたとか、大勒は全く害のあるものであるとか、頭を下げさせるということに関しても、鞭によつて下がるのを期待し、かんじんの脚と拳を忘れているとかいうように。我々のしようとしている綜合の馬場は馬が騎座・脚・拳等諸扶助に対して従順でさえあればできるものである。岩坪氏が言うように馬の従順性と馴致はきつてもきれないものであり両者共根本的なことである。このことをしつかり理解し障碍を数多くとぶことにのみ終始せず、又漫然と野外を歩くことに終らずに道路に横たわる棒きれ一つに、あるいは水たまり、起伏等全てのものを障害にみたて通過させることにより何者にも動ぜず敢然と飛越に指向する馬にしてゆかなければならない。そしてそれと同時に行なわれる扶助調教は馴致によつてその効果を高め、又反対に馴致は扶助調教によつて養なわれた馬の従順性によつて更に効果を高めるのである。要するに馬に飛越の要領をおぼえさせ、諸扶助に順従とし、物事に動じないようにする事を一つの太い柱として、それらを平行して調教してゆかなければならない。

個々の部馬について、その現状と今後の方向をのべる。

北翔 すでにできつつあつた北翔は昨年までの五十嵐兄の努力により完成の域に近づきつつある。騎手の微妙な扶助の適否により大きく成績に影響するので、これに乗るものは自己の技術の練磨に努めることに尽力しなければならない。

北瓔 試合用馬である。年齢的にみても体力的にみても今後どうこうするという馬ではないが彼女の持つ素質を殺さないよう、ふだんの練習に使い、且つ弱い馬であるだけに事故などのないよう大切にもつてゆきたい。

北駅 四十二年八月二十七日入厩・　・十四歳。試合用馬として期待するのは酷であるかも知れないが、練習馬・試合用馬とはつきり分けるべきでなく試合用馬の調教が進めば練習にも正常に使えるようでなければならず、又そのような練習をしてゆかなければならないという考え方にたてば北駅とても試合用馬といいうるようにしなければならない。年齢的能力的な限界はあるがまだまだ伸びる余地がある。

北晨 現在の部馬の中で最も能力があり、大障害への可能性を秘めている。しかし現状は決して良好な状態ではなく、じつくりと基本にのつとつて調教してゆかなければならない。又彼女の持つ軽快な歩様、体の柔軟性等を生かして、より従順ならしめ夏までには総合の馬場を間違いなくやれるようやつてゆく。

北彗 北晨と同様北翔・北瓔に代わる馬として成長させてゆかなければいけないのであるが、まだまだ新馬の域から脱していないのが現状であり、人間に対する従順性・安定した衝受を養うことを第一目標とする。彼の飛越態勢をみると豪快そのもので有り非常に合理的な飛びをこわすこと、又体が硬いことなどから考えて不得手な馬場運動にこだわることなく障碍を伸ばしてゆきたい。

北凛　北秀については二年後にデビューするくらいの気持ちで馬の基本的な調教をあせらずにやつてゆく。

現在の部馬はこの七頭でありますが、このうち北凛は池内先輩及び出羽氏の御好意により函館競馬場から寄贈していただいた馬であり、北秀は北大で生産し（父北彗・母北凛）昨年八月まで鎌田先輩の牧場にあずかつてもらつていたのをひきとつたもの。又北凛は昨年夏の中央競馬の池内先輩が来札し、小川厩舎所属の故障馬であつたのを寄贈していただいたものです。池内先輩・鎌田先輩他御協力下さつた方々に深く感謝致します。なお、今年春には何としても更に一頭の入厩を考えており、実現できるよう努力致します。又加藤正昭先輩の馬でありますが、権兵衛号が家族の一員として同居しており部員からも可愛がられております。

次に今年度の競技会及び行事についておおよその予定を述べる。春、雪が融け、五月のはじめに対酪農戦を行なう。ねがわくば、酪農大にこちらから出向いてやりたい。これは複合（B馬場）であるが、北晨・北彗についてはこれまでにB馬場の総合競技までに綜合の馬場を困難なくふめるよう各調教責任者は心得えておいてもらいたい。夏休みの一年目の合宿につづいて北日本大会のための合宿及び記録会を行ない、北日本・道大に備える。これら一連の試合の前は下級生を乗せる時間があまりなくなつてしまうかもしれないが、その分冬に乗つて実力をつけてもらいたい。又馬場が使える時は月に一度位の割に二年目以上対象の記録会を行ないたい。

いかなる理論を述べたててもそれが机上の空論に終つてしまつたならば全く価値がない。勝利の陰にはたゆまざる練習の研究があることを念じ練習に励んでもらいたい。

三、厩舎・馬場移転の問題

現在の馬場・厩舎がある所一帯は北大の綜合計画の一環として緑地になるということで、その周辺の建物は全て移転しなければならない。今の所見通しはついていないが、学生部や半沢先生と密接に連絡して部員の希望にそえるよう努力するつもりである。

最後に役員及び各馬責任者をお知らせして終りとします。

役　員（学年は四十三年四月現在）

主　将　春田恭彦（農畜四）
副　将　田中　力（獣四）
　　村井弘一（農畜四）
主　務　田中　力（獣四）
会計係　今井雅子（農化三）
飼育係　村井弘一（農畜四）
記録係　寺崎弘恭（教二）
備品係　山下邦康（医一）
馬具係　篠崎正樹（医一）
作業主任　斉藤勝雄（農工四）
体育委員　藤沼光雄（教二）

各馬責任者

北翔号　春田恭彦（農畜四）
北瑛号　加藤公敏（理化三）
北顕号　寺崎弘恭（教　二）
北晨号　斉藤勝雄（農工四）
北彗号　田中　力（獣四）
北凛号　田中　倬（医四）
北秀号　村井弘一（農畜四）

年頭所感

監督　岡田光夫

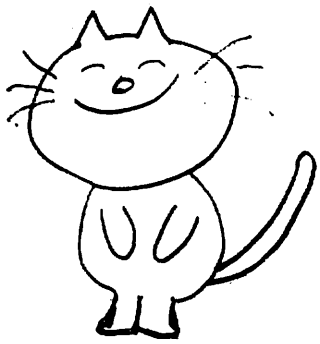
明けましておめでとうございます。皆様の本年度の御活躍を心から御祈り申し上げます。

今年は元旦早々騎乗神社参拝帰りの部員諸君の御年始を受け何か心の中にすがすがしいものが一瞬流れました。それと同時に恐らく私があまり馬場に顔を出さないので、気合をかけに見えたのではないかと思い、昨年それ程馬場に顔を出さなかつた事を深く反省させられました。

弁解めきますが私の仕事も一九七二年開催予定の冬季オリンピック準備のためますます多忙を極め仲々部の御世話まで出来かねるのが実情であります。しかし、元旦に受けました部員諸君の来訪を機に今年は出来るだけ部の御世話をしようと決心して居ります。

実は馬術部の本年度新年宴会の折、札幌乗馬倶楽部の庄内先生から「お前が競技会に出て壮年組で半沢先生と勝ちを分け合つたり、優勝したりしたところで何になる。部員の練習に一言何か指導してやる事が今の北大馬術にとつて絶対必要だ。」と言われ頭をぐわんとなぐられた思いがしました。私は今まで自分でやつてみせる事が出来なければ指導など出来ないと思い込んで居り、率直に申し上げれば口ほどに馬に乗れなくなつた体力の不足、技術の低下が自分で分れば分る程部員諸君の指導という事から遠ざかつてきたと気がついたわけです。

今年は心気一転大いに口で馬に乗ろうと決心している次第です。



戦績及び行事報告

（４２年４月～４３年２月）記録係

４月１７～２１日　講習会

４月２７日　新入生歓迎コンパ

５月　３日　第２回対酪農大定期戦（北大馬場）

優勝（五十嵐、池田、村井）

６月１１～１２日　東日本馬術大会（浦和市）

入賞者無

６月１７～１８日　七帝績（於：東北大）

	北　大	東　北	九　州
北　大		×	○
東　北	○		×
九　州	×	○	

優勝　名古屋大学

４位　北大

７月　９～１６日　１年目対象合宿

７月１７～２３日　北日本向け合宿

８月　５～　８日　北日本馬術大会（於：帯畜大馬場）

○一般総合馬術			北大出場者
１位	帯畜大	畠　山（柏鷹）	山　本（北殿）
２位	酪農大	杉　山（シーザーライト）	五十嵐（北翔）
３位	帯畜大	須　藤（春洋）	池　田（北彗）

○一般標準中障			北大出場者
１位	岩　大	金　井（扇滑）	五十嵐（北翔）
２位	帯畜大	須　藤（春洋）	池　田（北彗、北飄）
３位	酪農大	塚　田（シーザーライト）	春　田（北璃）

○パルクール・ド・シヤス　　北大出場者

1位　帯畜大　山　下（勇勝）　五十嵐（北瓔）

2位　〃　須　藤（春洋）　山　本（北晟）

6位　北　大　五十嵐（北瓔）

○六段飛越　　北大出場者

1位　帯畜大　吉　田（柏雄）（140cm完飛）　五十嵐（北翔）

2位　〃　山　下（勇勝）　山　本（北晟）

3位　北　大　池　田（北飄）

○壮年障害飛越

1位　北大同好　半　沢（北瓔）

8月10～11日　北海道自馬大会

○標準中障　　北大出場者

1位　北　大　春　田（北晟）　春　田（北晟）

2位　酪農大　弘　島（シーザーライト）　寺　崎（北彗）

〃　帯畜大　福　山（神風）

○パルクール・ド・シヤス　　北大出場者

1位　帯畜大　尾　上（神風）　篠　崎（北瓔）

2位　酪農大　塚　田（シーザライト）　村　井（北翔）

3位　帯畜大　吉　本（雲霧）　春　田（北晟）

寺　崎（北彗）

○選抜中障　　北大出場者

1位　帯畜大　吉　本（雲霧）　五十嵐（北翔）

2位　〃　尾　上（神風）　春　田（北晟）

3位　北　大　五十嵐（北翔）

○六段飛越

1位　北　大　五十嵐（北翔）（140cm完飛）

8月18～23日　2年目対象強化練習

8月28日　北秀、北縣、入厩

9月9～10日　北海道馬術大会兼埼玉国体予選（於：北大）

○複合馬術

1位　北大同好会　鎌　田（北飆）

2位　酪　農　大　杉　山（シーザーライト）

3位　北　　大　五十嵐（北翔）

○一般自馬中障

1位　帯　畜　大　畠　山（柏鷹）

2位　北大同好会　鎌　田（北飆）

〃　北　　大　村　井（北瓔）

4位　北　　大　五十嵐（北翔）

○婦人障碍　　北大出場者

1位　帯畜大　石　栗（雲霧）　佐　藤

2位　北　大　佐　藤（北瓔）　遠　藤

○壮年自馬中障碍

1位　帯　乗　笹　川（雲霧）

2位　北大同　岡　田（北翔）

○自馬六段飛越

1位　北大同　鎌　田（北飆）（140cm完飛）

2位　北　大　五十嵐（北翔）

○選抜中障碍　　北大出場者

3位　北　大　五十嵐（北翔）　五十嵐、山本、村井

寺崎、佐藤、遠藤

本大会の成績により埼玉国体北海道代表選手の一人として五十嵐選出さる。

9月17日　ネルソン（北凛号）入厩

10月22～26日　埼玉国体（於：大宮）

五十嵐（北翔号）

11月　8～　9日　全日本学生王座決定戦（於：馬事公苑）

○バルクール・ド・シヤス　　北大出場者

16位　北瓔　村　井　五十嵐（北翔）

村　井（北瓔）

１１月１１～１３日　　全日本学生自馬大会

２２位　　北翔　　五十嵐

１１月１３日　　北飆号　左後肢脛骨複雑骨折のため薬殺さる。

１１月２５日　　第１３回関東北女子学生馬術大会（於：福島）

初戦で敗る　　出場　佐藤(2)　村田(1)　松永(1)

１１月２６日　　部内競技会

１１月２７～１２月１１日　　アルバイト

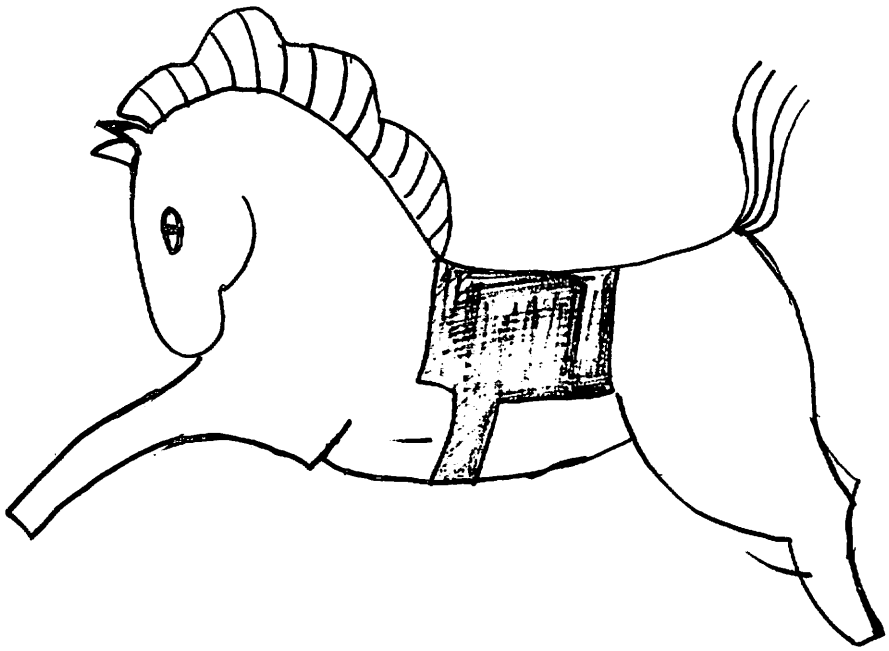
１２月１４～２１日　　１年目強化練習

４３年

１月　１～　２日　　初　乗　り

１月１６～２０日　　２年目強化練習

２月２９日　　追　コ　ン



会　計　報　告

3年目　遠藤裕子

	収入	支出								
		飼育費	備品	馬具	鉄代	遠征費	マネージャー関係	記録	特別費	支出総計
8月	16,035	0	0	0	0	500	3,170	0	0	3,670
9	149,300	12,140	925	0	42,300	24,000	4,265	1,000	22,265	106,895
10	153,620	7,245	4,592	0	0	72,220	675	0	0	84,732
11	17,438	0	540	0	0	0	40	0	10,872	11,452
12	246,328	2,810	5,217	0	32,420	3,190	3,096	0	31,450	78,183
1	7,700	11,000	2,430	0	0	0	0	0	1,000	14,430
2	15,725	4,000	320	0	0	0	3,161	1,000	0	8,481
3	48,095	66,120	2,425	0	21,100	0	0	9,700	10,700	110,045
計	654,241	103,315	16,449	0	95,820	99,910	14,407	11,700	76,287	417,888

マネージャーより

主務　田中　力

序

北海道大学馬術部。これほど、誇と名誉と伝統と、苦しさと、楽しさと、悲しさと愛情と批判と信頼とその他諸々のものを兼ねそなえているところはそれほどないだろう。外からは、期待、羨望の眼で見られ、暖かい援助をいただく。部内にあつては、多数の諸先輩方の地味な努力が結実しはじめ、自馬調教の面でも、飼育管理の面でも、技術面でも、我北馬の本筋ができかけてきた。それでは部員は、楽になつたかというとそうではない。乾草を買う金がないので、一年目の合宿は乾草作業となる。これは冬の大事な食糧だから愛馬達の死活にも影響するかもしれない。二年目以上になると、練習は半強制となる。そして冬になれば、寒く雪が多く、馬場は使用不能となる。しかし日本は南北に長いから関東以南では雪がふらない。そしてきたるべき相手はそこで練習と調教を続ける。それに打ち勝つため部員は必死になる。アルバイトと遠征のため、欠席できる日数を計算する。だから彼等は「馬狂」と呼ばれる。馬狂のため、情深いマネージャー達は少しでも楽をさせようと苦労しているのに、彼等はそうはとらないのである。まあそんなことはどうでも良い。

第一部　顔

まず、トップバッター。北大に馬が五頭しかいなかつたとき、酪農大学の杉山さんをして「北大六頭目の馬」と言わしめた男。加藤公敏。お父さんが北大の応援団O・Bだけあつて（？）ひげがめつぽう濃い。本人はそれを苦にしてか、我々の如く無精ひげを生さない。しかも、飼育係の連中のようなむさ苦しいみなりはしない。彼はおそらく、馬術部にあつてはかなりの紳士であろう。しかし、今は違う。三年目の部報を出していない誰かさんは、こともあろうに、このお人好しの「カトちゃん」をつかまえて「鬼」呼ばわりする。いつの時代も、部報小委員会委員長は三・四年目に恨まれるものである。化学科二年。東京出身。主に財政面担当。

次は橋口庸。医進二年。福岡出身。例えば練習終了後、部室に何か食べ物があつたとする。ほとんどの部員は「わー」とばかりによつてたかつて、それをたいらげるが彼は一人超然とそれを眺め、皆がけげんそうな顔で見ると、一言「はしたない」とのたまうとニタニタと笑い出す。そこで皆も笑う。まつたくもつておかしな趣味である。雑用係。

もう一人気障な男。小野正則。倉敷出身。大学では大いに楽しむべしとの哲学のもとに林学科に入つた。女の子にもてそうでもてそうもない男。マージャンではチャンタがお得意のよう。主に後援会関係。

紅一点は、遠藤裕子女史。その穏和な顔に似合わず、部費の取り立ては厳しく金の払いは慎重。良き財布の紐かな。彼女の亭主はどんな人か。いいかげんな金の勘定をするマネージャー部にあつて安心して金をわたせる人だ。会計係。

そしてチーフマネージャーは男前でフェミニストで勉強家で馬

術がうまくて、スマートだと、自分だけ思つている男。私。獣医三年目。学業が忙しいとの理由のもとに、仕事が来ると、極力サブの方へまわしていたが、部報の原稿だけはそうはゆかないので筆を執つた次第。

以上のメンバーで、役員交替以来、仕事をして来たのですが、大体うまく行つているのでどうということはありませんでした。これからの大きな仕事としては馬場移転問題と北飆の代の馬を手に入れることぐらいです。昨年の混乱期を過ぎ、これからは部をレールの上に乗せるのが仕事のようです。そして、我々はそれに甘んじることなく、前進しなければならないと思います。

第二部　報告

一、赤字解消問題

前号の後援会報のとおり解決できました。新めて心からお礼を申し上げます。このことでは半沢部長・岡田先輩・山村・片寄両先輩・春田兄などが最後の締括りにあたられたので、紙面をお借りしてお礼を申し上げます。

一、学生部

前年度の五十嵐主将・山本主務のおかげと、学生部の御理解により、いまのところ五頭分の飼料として六十万円分が下りることになつていますが、馬を生かすだけでなく、使用するという立場で考えると、これに蹄鉄代を加えて欲しいのですが、予算の枠もあり、なかなかうまくゆきませんが、これを何とか納得してもらつて鉄代（五頭分）十万円をプラスしてもらおうと思つています。

一、厩舎・馬場の移転

工学部のある講座で、現在馬場になつている所が欲しいとのこと。また近い将来現在厩舎のある所がとりこわされローンとなる構想があることなどを考えあわせ、昨年、学生部にこちら側としての希望を伝えました。現在の馬場より広いと思つています。

一、飼料及び鉄代

五頭分飼料として学生部から来ることになつておりますが、他の収入（アルバイト・部費など）で七ないし八頭分の燕麦・フスマをまかなえるので、乾草・寝ワラを何とかすると八頭まで飼えることになります。寝ワラはたいした額でもないし、入手できるあてがいくつかあるので、問題は乾草です。夏の合宿のとき構内の青草を刈つて乾草を作ることに決めました。もし購入すると二十数万円以上ですから、部員の皆さん頑張つて下さい。鉄代も案外ばかにならないのですが、いまのところ部の負担になつています。

一、後援会

おかげさまで赤字の解決ができましたし、これからは正常の後援をお願いいたします。会員二百十数名。会費が全部集まりますと、雑費を差引いても二十万円ぐらいになると思います。しかし実際にはそうはいかないので、帰省などの折、また札幌などでは暇をみつけて、部員を伺わせるようにいたしますので、その節にはよろしくお願いいたします。また御忠告などもお願いいたします。

一、アルバイト

競馬場のアルバイトだが、昨年度部報の山本主務のとおりで今年も予定している。それと同時に乾草作りがあるが、ただの作業

と思わずアルバイトとして張切つてやつて下さい。重ねてお願いします。

各馬調教報告

北翔号

二年目　春田恭彦

部報の編集委員から矢のような催促でどうしても書かなくてはならないはめにおちいつた。もとより文才などひとかけらも持ち合せない小生にとつてはこのたつた数ページ（数行）の原稿を書くことがこの上ない苦痛であることを読者諸君まず察していただきたい。前から書こうと思つて机に向うや小生の頭に去来することはヒラリヒラリと障碍を飛ぶチビの姿なのである。そんなに甘いものではない。ヒラリヒラリなんという副詞を使える程人馬一体になるのはまだまだとは知りながらやはりヒラリヒラリなんだから文章にならないのは当然である。

昨年の北翔の成績などをふり返つてみて今後の指標にしたい。春雪が溶け第一回目の試合は酪農大定期戦であつた。前年からの五十嵐兄の努力が結実したのがこの時であつた。小生もこの際、小障に出してもらつたのだが（北翔での初めての経路であつた）、バラージュで全く人間の過失である落下（というより体当り）で惜敗した。

次の六月の東日本大会（於埼玉）まで順調に調整が進められたかにみえた。しかし貨車積の直前に〝座石〟をひき馬中の事だつた。かなりひどい跛行が認められたが、棄権を覚悟で埼玉へ積んだ。試合当日、局部麻酔をかけて出場。準備運動全くやらず、更にその前一週間以上休ませておいて実力が出し切れるはずはなかつた。失権こそまぬがれたが、頭を高く上げての反抗、逃避、チビの普段隠されていた悪癖が現れた。これはその後北日本大会の時も大きな敗因となつた。

八月には帯広畜産大学で北日本大会が行なわれた。チビにとつては二度目の綜合であつた。五十嵐兄の言われる事が今になつて、身にしみて感じるようになつた。それは耐久競技における速度感覚の養成である。今年の全日本学生綜合大会は七キロメートルであり、将来は十五キロメートルにまでもつてゆくということであるが、この段になつて体力訓練はもちろんのこと騎手の速度感覚の良否が大きく成績を左右することは自明である。結果は耐久においては誘導上の過失での減点二十点を喰い増点十点であつた。余力審査をはじめとして、この大会で馬場内における経路は全部失権した。前にも述べたようなこれら悪癖の原因は普段の練習中のほんのささいな事にあるのだろうが、今だに小生にはそれがわからない。又この後行なわれた道自馬大における六段一五〇完飛優勝は特筆すべきことである。六段には初出場であつた。馬格が小さく、器用な馬だけにこつを覚えたら、この方面にもある程度伸ばす事ができると思う。

九月の道大（国体予選）では北飄の活躍に続いてチビの活躍はめざましかつた。複合の馬場においては審判の庄内先生から「人

馬一体」とおほめの言葉をいただいた。

国体・王決・学生自馬大については「戦績」の項を参照していただきたい。

今北翔の責任者となつての大きな目標は綜合馬として、更に完成の域に近づけること。そのためには騎手がまず馬のレベルまで追いつくことが先決である。

現在のチビは部の要求する綜合の馬場はほぼ完璧に踏める。又馬場についてこれ以上のものを要求すべきでなく、その分障碍を伸ばすべきである。新馬が多い現今、北瓔とならんで下級生の練習にチビがどんどん使われなくてはならないのであるが、飛越練習については今の段階では害があるとは言えないまでも、その変則的なるが故に練習にならないといえる。又、欠点をのべれば、左のあばらが硬い、駈歩で銜につつかかる等たくさんあるが、北晨・北彗・北凛・北秀が大きく飛躍するため（北大馬術部の自馬制が確立せんがため）下級生の練習に供したい。

どこまでやれるかわからないが、今は亡き北飄の分もチビに活躍させたいと毎日の練習にはげんでゆく覚悟である。

やはりヒラリヒラリから脱しきれなかつた。三年位の馬歴では乗れば乗る程わからない事が多くなつてくるのが、若しも小生だけでないのなら、このヒラリの夢は自分を励ますための自己暗示なのかも知れない。

最後になりましたが、今まで長いことチビと小生を指導して下さつた五十嵐兄に感謝と尊敬の意を表します。

北瓔と思い出話

三年目　村井弘一

真白い雪に四方を囲まれたパドックにいる北瓔。僕が道のかなたから来るのに気がついたらしい。耳をピンと立てて期待と信頼に満ちた顔をする。可愛い奴よ。僕はポケットのニンジンをにぎりしめる。冬の冷気にひやされたつめたい口唇がニンジンにさわる時、この馬と住ごした熱い日々を思い出す。

北瓔号、それは日高の三石町で昭和三十年四月二十八日生れた鹿毛の馬である。昭和四十三年現在十四歳と数ケ月である。もうかなりの年である。父はコマオーというサラブレット、母は島舞という中半血で道営競場でサラ系として走つていたのを、昭和三十八年に入厩して八木先生が初めに調教された馬である。額刺も左前一白、右前左後二半白、左後小白、体高一六八cm、キ高よく発達して、スマートな体駆を持ついかにも馬らしい馬である。しかしながら四肢、心肺臓、消化器管弱く耐久力のない馬で、残念な事ですがこの馬をして総合には出場できない。

僕は最近とくに深く思考する事が嫌いになつた。哲学や社会など論じ合うものならすぐめんどくさくなりおしだまつてしまう。これは本当かどうか自分自身にも解らないのであるが今のところ恋愛も僕にとつてめんどくさいのである。こんなに僕を変えてしまつたのは馬術部なのです。そして北瓔が居たから僕が馬術部に存在していたのも確かな事実なのです。僕が北瓔を知り初めたの

は一年の三月頃からです。冬まで全然乗つていなかつたので、三月頃になりなんとか鞍数をふやそうとして毎日ブドウパンをかじりながら馬に乗ろうとした。その時右前肢を蹴られて休んでいた北瓔を手入れしていく内に、その喜怒愛楽のオーバーなところが非常に手入れのしがいがあつて楽しかつた。今でも感じるのですが北瓔は本当にオーバーな馬です。よく怪我をしてたのでそのたびなだめすかしごまかしして治療しなければならなかつた。痛い所がなおつてきてもその部分にさわろうとすると、ものすごく痛いような様子をします。三年間で僕は北瓔の怪我の治療技術だけは完全に自分のものにしたと自負しています。だから毛刈り鋏で傷の囲りを刈るのが一番楽しく、今年の王決の遠征の時ひまだつたので三時間かかつて傷の手入れをした。この時は本当に楽しかつた。とにかく北瓔はイヤな事は徹底的にイヤなんである。その反対に喜ぶ時は徹底的に喜ぶのです。ニンジンをやる時など耳を立てて細い目をできるだけ大きくして本当にうれしそうな顔をします。北瓔は非常に素直な馬なのです。

馬には自分の好きな毛色があり嫌いな毛色があるといわれますが、北瓔を見ているとそれがよくわかるような気がします。北瓔は鹿毛なので馬はみな自分と同じ鹿毛でなければならないと思つているようです。それで栗毛とか青毛は嫌いなのです。昔し北涼・北瓔などとは非常に仲が悪く今はデコと仲が悪いです。反対に山透とかアネツプとは仲がよかつたです。そうです僕が二年目の時大阪へ北瓔と旅した時山透もいつしよでした。大好きな山透が全日本出場のため途中で降りると、北瓔はブフフブフフと鳴きました。本当に北瓔はヒヒーンと鳴かないからおもしろいです。貨車が長いトンネルに入り、懐中電燈をつけると安心してブフフと鳴くのです。この大阪の和泉府中までの一週間の旅は体の弱い北瓔にとつて非常な冒険旅行だつたのです。しかし貨車に乗ると北瓔はおとなしく足が立ち腫れになるだけで、心配された下痢もせず快適な旅でした。

その年の十二月雪も積もりいよいよ冬の練習が始まる頃に、僕が北瓔のサブとなりました。加藤さんに教えを受けながら乗つていたこの頃が馬に乗る楽しみが一番解つていたのではないかと思います。自分が少しずつ北瓔を動かしていけるようになつていくのがものすごくうれしかつた。この頃はとにかく乗つて自分がうまくなればいいんだと考えていた。しかし四月になり北瓔の調教責任者となつてからは、その調教という言葉の持つ重さが僕を押しつけ、責任のある自分のあまりにも能力のなさが僕を何度も絶望させました。それを特に感じさせたのは六月十日の東日本大会です。この時北瓔の調子は最高でしたが僕の実力のなさが支離滅裂な試合となりました。

そうです。その頃になりやつと北瓔の大勒と水勒の椅受けの差などが解りかけてきました。水勒運動は北瓔は前下方へと出てきて、障碍飛越にとつて良好な体勢となります。大勒運動はそのままスツと頸をゆずつてくれればよいのですがなかなかそういかず、特に駈歩運動になるとすぐ巻き込んでしまいます。しかしながら馬が椅に出てくる時そのままにしておくとつかかつたまま運動しますので、輪乗り運動に入り軟い挙でもつて軽く受けてやると少し頸をゆずつてきます。この状態を続けさせる事は非常にむずかしい。下級生に大勒でB馬場など踏ませるとめちやくちやになつ

てしまいます。特に六歩後退駈歩発進がこの馬に反抗のチャンスを与える場所でこの部分をうまくやるには、人は反抗をおこさせないように繊細な脚挙を使用しなくてはなりません。この頃になりやつとそんな事が解りかけてきました。

九月の道大会はちようど試合前十日間僕は日高の実験牧場に実習に行かなければならず、出場をあきらめていたのですが、加藤さんに七日間お願いして自分はその間の技術の低下もかえりみずに出場してしまいました。その間加藤さんに軟い挙で緻密に乗つていただいた事は非常に感謝しています。試合の二日前に乗つて北瓔の嫌いな水濠をなんとか飛ばしたのですが、複合の障害で水濠バーで三拒止失権をくらい僕にとつて北瓔での失権は始めてで最大のショックとなりました。午後の中障碍は午前のショックで元気なく出場。第一障碍で止まりそうになり、びつくりして脚を使い一落下。その後なんだかわからずにめちやくちやに脚を使いました。最終三段の前で十三号を二・三回入れたととを今でも強く印象に残つています。そして気がついたら一落で二位となつていました。

十月三十日僕たちは再び貨車の人馬となつて、真夜中の桑園駅を出発した。貨車にはウイスキーの快い眠りに落ちている僕と酪農の鶴林さんと清水と、飼いおけに顔を入れて燕麦の夢でもみている北瓔・デーリー・緑崩がいた。台風のため出発を一日のばし五稜郭で一日止められ予定より二日遅れて到着、すぐ馬事公苑に入厩できず早稲田大学に世話になつたり、馬運車で長い道を運送されたりして、さらに悪いことに出発の前の夜左後肢を怪我し、貨車に乗るとすぐ張れ出した。函館でペニシリンを大量注射したりビールを飲ませたりして、元気のない北瓔も海を渡ると食い込みもよくなり前掻きをした時には本当に涙が出る程うれしかつた。

その日はさすがに僕は興奮していた。十一月九日、その日午前十時半よりの全日本学生馬術王座決定戦バルクール・ド・シャス出場のために、今までの部生活があつたような錯覚に落ち入りそうであつた。出場順番三一番。経路は非常にむずかしい。今まで僕の見た経路の中で一番むずかしいではないか。ゴールできるという確固たる自信を持つには何んと僕の経験技術が足りなすぎたことか。すでに僕の前の三分の一は失権しているようにみえた。その大半が第四障碍の変な色をぬつたトンネルで失権していた。入場。スタートの前で駈歩の輪乗り。第一障碍で失敗せぬように脚をおもいきり使う。こんな低いのはなんでもないやと思う。すぐちちにぶつけるように左回転。二・レンガ。三・ドラム平行。少し斜めに向けて飛ばす。ゴメンヨといつたのを憶えている。四・トンネル。ちよつとためらつた感じ。拍車を二・三度おもいきり使う。その次が問題。輪乗りしながら五・六・七・八と飛び中にある九のダブルを飛ぶのである。八でなめになりそうになり巻乗りする。僕自身自信があれば必要としなかつたところである。九の前ではどうしても巻乗は必要である。この二つの巻乗りで三十秒は損している。十・扇三段、十一・二段。十二・自然木。十三のスカシに行くのにS字乗か巻乗しなければならず不利な巻乗をしてしまう。十四・二段。向つた感じが大きい。十五が最終でダブル。aとbの距離が短かくbでかなりおくれて一落してしまう。十秒加算される。走行距離長すぎて結局一六六秒。試合が終つてぼんやり虚脱感を感じながら掲示板を見て十五位ということ

がわかる。北瓔にとつてはもつとやれた試合だつた。

十一月十三日総合で五十嵐さんの北翔が二十二位となる。来年は団体入賞してやろうなんて明るい希望を持つ。北海道よりの長距離電話。北飄の事故を知らせる。みんなの唖然とした信んじられぬという顔。覆馬場の灰色のコンクリートが印象的。

十五日、全日本女子戦に北瓔は借り上げられる。四鞍は北瓔にとつて重労働であつたが、四鞍とも一落もせずゴール。北瓔はいい馬なんだぞと誰にでも自慢したくなる。

本当に北瓔はいい馬です。君が北瓔をかわいがればかわいがる程北瓔は君の要求に答えてくれる馬なのです。だから僕はこれまで北瓔を愛させ馬術部員として三年間続けていくことができました。最後に北瓔に感謝すると共に、僕と北瓔をいつも指導してくださつた加藤正昭さんには深く感謝します。

北　彗　号

三年目　田　中　　力

彼について思うことはあまりなく、きかん坊でやだなと思つてただけだつたが、四月頃乗りたい馬といわれると北飄の次に希望したものだつた。何が私をして北彗にひきつけさしたのか今もつて分らないが、昨年度部報に出ている山村兄の飛越に見る北彗に感心したせいもあるかもしれない。ともあれ北瓔なき後主将より北彗号チーフと任命されたのであるが、まだ数えるほどしか乗つていず、ただ馬に追いつくだけでよくわからないので、山村コーチと相談して且つ指導をあおぎたいと考えている次第です。

ただ、私なりの勝手な考えはあり、いろいろなことをやつてみて、その中からいろいろなことを学び、そして教えていつてみようと思つています。

大目標は総合馬であり、自馬大で入賞或は優勝することであるのに変りはないのだが、同時に彼は北晟と共に基礎調教が伊式で行なわれ、今後の新馬もその線で行なわれるであろうから、北彗、北晟はこれからの北大の代表的総合馬の模範とならなければならないのであり、私としても、慎重且つ大胆に乗つてゆきたいと思つている。しかし、もともと野外馬であり、歩様も決して良くなく、障碍に重点を置くつもりだが、ただ重要なのは騎手への従順性である。そのためいままでよりこまかい、又彼にとつて少々きつい運動を課すかもしれない。しかし、愛情をもつて接すれば、人間に親しんでくるだろうし、事実彼は去勢後、山村兄、高倉兄、寺崎兄と責任者が変つてくるに従つて手入れもおとなしくなつて来て、最近では顔をすりよせることさえ覚えて来た。とにかく一日も早く、彼に追いつき、彼を追い越してひつぱつてゆかねばならない。そのためには北彗に負けぬだけの気迫と、たびたびの自己反省、そして馬体への細かな注意が必要である。前号の山村兄の内容とあわせて今後の戒めとしてゆきたい。

障碍としては一応の線まで近づいているのでそれを進めること。馬場は本格的にはほとんどやつていない（というよりそこ迄余裕がなかつた）が、五月まではB馬場、七月までに総合の馬場をふ

ませたいと思つている。時と次第によつては大勒を使用するかもしれないが、なるべく水勒一本でゆきたい。しかし、一番大事なのは障碍をいやがらずに通過することだと思うので馬場運動は二次的に考えている。

まず当面の目標では、東日本大会での上位入賞、その準備としての対酪農戦などである。そして、夏の北日本大会での自馬大予選通過。まずここ迄が第一段階。道大兼国体予選よりも、今年の最大の主力は自馬大におきたい。

しかし、北彗は私だけの馬ではない。北大馬術部の馬である。彼のあのクリクリツとした眼はいつたい何を望んでいるのか小生には全く見当がつかないが、皆で可愛がつて北彗をそだてていつて下さい。

今思つていることは、まず鞍を新調すること。髪田の発達が悪いので、毎日鞍傷に悩まされて乗るのはつらい。欲を言えば羊の毛皮のゼッケンも欲しい。

お手紙

三年目　斉藤勝雄

前略、新年を迎えて、現在の北晨に対ずる私なりの判断と、六月の東日本馬術大会（この大会が今年の我が部の最初のそして最も重視している大会の一つですが）への方針を報告致します。

先月の十三日から乗り出して一月、東日本まであと四ケ月ですが、今年の札幌は、暖冬異変で、恒例の一年目冬期強化練習も、どうも例年のきびしさが現れず、その為かどうか練習後の退部者零というめずらしい記録を作りました。毎年この冬の強化練習が一つのきつかけとなつて何人かの部員が馬への情熱そして青春そのものへの懐疑へと走るのですが……。

三十一日から一日にかけて二年目の女子の作つた雑煮を食べるのも三度目、大いに飲んでの朝の初詣で、馬上からの参拝も三年目一同心なしか例年より丁寧だつたのは、今年にかける気持の現れでしよう。

では北晨号の現在の状態を報告致します。騎乗後の感じがその日その日によつて異るのは相手が相手ですからいたしかた有りませんが、ここ一週間特にそれが著しく感ぜられます。それが良い方向への変化だとの確信を得られると良いのですが。

四ケ月のブランクの後北晨に乗つて一番驚いた事は、ハミに出ないということです。いわゆるハミを浮かせるという感じで、脚を使うとスピードは速くなるのですが全然手ごたえがないのには北晨の以前を知つているだけにイメージが違うどころかショックでした。この原因は脚に対して鈍感になつているどころか反抗的なところさえあるところを見ると、ハミ優先の騎乗が最大原因と思われます。

又、ハミに対して過敏になつているのではないかという不安によつてその疑いは一層強くなります。例えば、駈足でどんどん馬場から離れた時の、与えたか与えないか位の小さな指示での、待つてましたとばかりの急停止。交叉点等での、自分で判断して曲つているのではないかと思う様な回転等。あまりに立派？過ぎて

満足感からかえつて不安が起こるのが自分でも不思議です。何か有りそうな気がするのです。

正直いつてやはりあの〝膠着〟が最大の問題点だと思いました。〝あの反抗さえ直せば凡てが解決する〟これが私の北晨に対する乗馬感覚の凡てでした。それから四ケ月たつた今、問題はもつと深い様な気がします。何か、〝膠着〟そのものよりもつと深刻なものがその奥に有つて、〝膠着〟もその一端にすぎない、表面に現れた氷山の一角の様な気がします。

それはまだ断言は出来ませんが、北晨は障碍そのものを嫌がつている。嫌々と思いながら、飛ばないのは悪い事だという意識が新馬の時から今までの調教によつて北晨の脳裏にあつて（馬にこんなものが有るのかどうか知りませんが）それが北晨を、反抗的な回転をしながらも障碍に向けるとグッと向かつていかせる様な気がします。私はそのグッと向かつて行く馬の中に、どこかヤケな所が有る様な気がしてしようがありません。

北晨がずるくなつているのも見逃せません。乗り手の油断を今か今かとねらつている様な所が感ぜられます。これは乗り手が馬に緊張の持続した運動を要求しなかつたせいと思われます。

ざつと現在の北晨についての私自身の感想を書いてみました。欠点ばかりを指摘して絶望の真暗闇の中でもがいている様な文章になつてしまいましたが決してそんな事は有りません。ハミの問題もここ一週間程。何度かクク……と手ごたえを感じますし、膠着の問題も剛致との併用で何とか解決の糸口を見つけるつもりです。

それよりも私は北晨をたくましい馬にしたい。乗つてみておおらかな感じの馬に育てたいと思います。

必死の馬に、必死でまたがるというのはどうも私の生に合いません。北晨と一緒に〝なんだこんな障碍ヤツコラサ〟という感じで飛んでみたい。飛越そのものに味わいを感じながら飛びたい。第一目標の東日本までに間に合うかどうか分かりませんが。四年目の最後になつてでもいい。そんな感じを北晨と共に味わいたいというのが私の学生馬術部生活の夢です。

今年の新年会は十四日とやら、今は十人足らずが一人一頭二時間の練習に励んでいますが、その頃から部も、又冬休み前の賑やかさを取り戻すでしよう。これから新入生入部までを一つの区切りとして、思いついた事をどんどん実験してみるつもりです。それが結果として北晨に良い結果をもたらし、私に馬を知らしめん事を祈つて。

四十三年一月十日

北　驫　号

三年目　寺　崎　弘　恭

「北驫号」ＯＢ諸兄には聞いた事のない名前であろう。ホクゲンと読む。驫という字は「鹿毛の名馬」という意味だというのでつけたのだが、別の本で調べると「駄馬」とかいう意味だそうである。

昨年八月二十七日の道大の貸与馬に出す馬がいないというのと、前々から練習馬として競馬会から寄贈の話のあつたプレスミンボー号（旧名）を早くひきとらなければならないということであわてて北大へつれてきた次第です。

若いころ（今はおじいちゃん）こう着癖、人間を乗せているのにもかかわらず急にとまつてしまう、などの芸当が原因で競馬に出られず、以来十三年間函館競馬場で遊んでいたそうです。

入厩当初やはりそのくせは脱けきらず、外へ行つたら数メートル歩けばこう着するし、馬場の中ではつかれてくると急にとまつて前がきをはじめどうしたのかしらと思つているうちにゴロッとねてしまう等の諸芸当をみせてくれた。又、馬繋台の上に上るのがいやだといつて、うしろからロープで押し前から引つばつたら後趾ばかり前に進んで前跂は全く動かずついに四つの肢が一点にそろつてしまい、さながらサーカスの基盤乗りを演じる一コマもあつた。

又、頭脳明析で、練習のあとなど馬繋柱につないであるにもかかわらず寝るんだが、誰かが網をほどくまでは尻をつけたままでおる。この点調教には便利で、扶助もすぐ覚えてしまう。おく病であるが馴れてしまえばそばをダンプが通つてもピクともしない。

さてはいつた当時はよくハミを受け前へ出るが停止・回転が徹底的にへたであつた。障害も小さいのならよくとんだ。道大の小障では二反抗でゴールした。

そのころから練習時間が午前一鞍となり、午後は毎日市内へ常歩でくり出し馴致に当てるということになつた。北　も毎日北彗などの後についてのんびり歩かされたわけである。そのような常歩の街乗をはじめて一ケ月後の北　は全く変つてしまつた。こう着などということは全く忘れ、障害もたいていのものは飛ぶようになつていた。

しかし、飛越態勢がまだまだ下手である。障害上で首が伸びているはずなのに、ひつ込んでいる。そして着地の瞬間伸ばすのであるから、今にも馬転しそうである。この欠点を直そうと五・六十センチの障碍に中をつけて数多く飛ばしている。

「デコ（北秀号）について」

村井弘一

大好きな北瓔との王決の旅より帰つてきて、十二月より生意気にも僕がデコの調教責任者となりました。自分では、新馬調教などできるわけがないと思つていたのですから、この大役を引き受けた当時の心境が、今でも我ながら理解しかねます。

思えばデコが、北彗と北涼の仔として生まれたのは、僕が一年目の時、昭和四十年六月二日でした。生まれた子供は北彗や北涼と同じ美しい栗毛でした。そして、グレース（北涼）の乳を飲む馬房の中のデコ、グレースと一緒に横になり目をつぶつて日向ぼつこをするバドツクのデコ、黒沢兄や加藤兄の騎乗するグレースと一緒に駈け回る馬場の、そしてポプラ並木のデコ、そんなデコを見て僕は、将来俺に　の馬に乗るのかも知れない、なんて考え

てもみなかつたのである。其の頃、デコは他のどの馬よりも柔らかい毛と、細い肢を持つたまるで子鹿そのものでした。でも、手入れをして蹄を掘る時などは一人前に蹴り、その犠牲者が大勢でました。そうそう、幼名デコなる名も其の頃の部員総会で決めたのです。当時米沢寮に住んで居た、ボケという名の犬が自動車事故で死んで、米沢寮の住人高野兄、山村兄の推す第二ボケという名が有力でしたが、多数決の原理によりデコという名に決まりました。そしてポプラの葉が黄色になる秋、デコはもつと広い所で伸び伸びと、ということで小型トラックの後に乗せられて、社台の松木牧場へ武者修業に出かけました。夕方、デコの居ない事に気付いたグレースが鳴き続けていたのが今でも強く記憶に残つています。

其の後去年の冬、鎌田先輩の所へ移つたデコに会いに行つた時、北大にいた頃より、それほど大きくなつていないのに驚きました。人参をやると寄つて来るのですが、少し走らせてみようとして後から追うと速歩でトコトコと走り出したと思つたら、人に向つて蹴りに来たのでビックリした。其の頃から、一見したところ若さの感じられない、自分から動こうとしない馬だなあと感じました。しかし、去年の八月に北大に帰つて来てから、その何物にも動じないところが、かえつて変にガタガタしなくていいのではないかと思われました。

去年の九月中頃より十一月の終り頃迄、春田が乗つていたのですが、十二月より僕が責任者となつて一ケ月と数日経ちました。デコも今年で明四歳となるのですが、どうも体が未だ完全でなく非常に不調和です。体つきも北翔と同じ位いで、先輩諸氏の話ですと、体高はもう少し伸びても限度があり、前後、左右に大きくなつていくのではないかとのこと。今後ガバガバ食わせてやつて早く大きくなつて欲しものです。そのため、先ず冬の間は体作りを一つの目標として、円山まで行つて坂の登降や長時間常歩で歩き回るなどしています。また、同時に心肺鍛練として一～二分間程の思い切つた伸張駈歩を一週間に一度程行なつています。

三月迄は殆んど馬場が使えないので、兎に角外を歩き回り、デコが一寸躊躇する所へも行き、馴致を重ねていき馬の従順性を増していきたいと思います。デコに乗つていても常に父親の北彗の不従順さが頭に浮んできて、常に僕の最も怖れるところとなつています。デコはよく北彗に似ていて、手入れなどはおとなしいのですが、何か気にくわぬ事があると体を寄せて蹴ろうとしたり、乗つていて厩舎への反対方向の、特に右回転の時には、左へ逃げようとしたりして人間に対する反抗や馬の身勝手さ、放埒さなど、将来の北彗を思わせるところが稀にあり、僕をギクリとさせます。これが僕の思い過ぎであれば幸いと思います。兎に角、人間に対する信頼と絶対の従順性を増すように、人間自身が確固たる信念を持つて接つしていきたいと思つています。そのためにも部員は、デコに悪戯をしないであらゆる時にニンジンを与えてかわいがつてやつて欲しいです。

今の運動目標は、体を作る事と銜に支点を求めて三種の歩様をやる事です。馬も人を乗せての三種の歩様における平衡を、最初は速歩ではヨタヨタしていたのですが、次第に覚えてきてかなり銜に出てくるのですが、それは決つして安定したものでなく、首を高くしたり、左右上下に振つたりして銜から逃れようとする行

為があり、人間は常に柔い拳で乗つて、今の僕にとつて非常に難題なのですが、安定した御受けを作つていきたいと思います。最近デコも漸く前進だけの単一扶助を、少々鈍いのですが覚えてきましたので、徐々輪乗り運動に入つて左右の脚の使い分けを考えていきたいと思つています。四月になり馬場が使えるようになり、デコも伍ができてきたら、輪乗り運動、内方姿勢を要求していきたいと考えています。また、障碍飛越に関しては、馬がそれ自身生まれつき持つている飛越の喜びを増す程度にして、低障碍通過、キャバレッティー通過を主として、今のところデコの体を考えてみて強い要求の飛越はまだまだ先にしていくつもりです。

北大で生まれ、部員のアルバイト、諸先輩の御援助によつて育ててきた馬、未熟な、正味三年間も乗つていない一学生が、調教という大役を引き受ける事は非常に怖れ多い事ですが、どんな馬でも一人の人間がコツコツと乗れば、必らずよくなるものだ、という言葉を信んじて努力していきたいと思います。確固たる騎座も、柔い拳もなく、調教概念も薄弱な僕ですので、諸先輩、諸氏の御忠告、御鞭撻を請う次第で御座居ます。

サロン

自己紹介

北凛号

はじめまして、O・Bの皆様、私は今度北大馬術部に籍をおくことになりました名馬北凛と申します。

昭和三九年に吉田牧場において、父クリノハチ（サラ）、母タカクイン（サラ）の間に生まれた玉のような男の子だつた。そもそも私が北大馬術部に籍を置くことになつた経緯をお話しいたしましょう。昨年夏札幌中央競場開催中のころ、当時小川厩舎（馬主岡崎修氏）で私は蹄骨骨折でもう競馬には出られませんでした。その私を池内氏は北大馬術部に紹介してくださいました。ちょうど新馬購入をもくろんでいた馬術部では喜々として私の入厩を決めました。昭和四二年九月十七日のことでした。私は旧名ネルソンと申しておりましたが、部員総会でいろいろもめて、やつと北凛号という名前をいただいたわけです。

蹄骨骨折は右前肢で昨年の春にやつたもので、十月北大獣医でレントゲン検査を受けたところ、「ほぼ直つているが、激しい運動又は下の堅い所で騎乗しなければよいだろう」という診断でした。調教者が私に鞍をつけはじめました。そうするうちに私は人

間に対する怒りの涙と悲しみの涙を目に浮かべなければならない事態が起りました。それは私ども馬族にとつては世にも残酷な去勢手術なのです。人の悪い部員の連中は麻酔薬のため意識朦朧として倒れている私の体をよつてたかつて抑えつけて興味しんしんとして手術を眺めていたのです。これでもつて私は　となつてしまつたわけです。

さて私の外観を皆さん方にお話しいたしましょう。毛色は色つやのよい栗毛であり、顔は小さく、頸は長く、胴は短く、足は長く全く女性が見ればほれぼれするようなスマートな姿をしておりますが、口の悪い連中は巨龍みたいだなんて失礼なことをのたもうております。最大の特長は他の馬のように短く太い、田舎つぺ丸出しの繋ではなく、いかにも洗練されたすらつとした長い繋をもつていることです。なにかにつけ部員という人種はその私のすばらしさもけなそうといたします。今度そんな連中が近づいたら、私の長い後肢でこづいてやろうと思つたりすることはありますが、いかんせん私の長所とも短所とも言える人のよさつまりボサーとしておとなしいところがあるため、それもできずじまいです。せめてもの抵抗はかつて牡としての強情さで一旦止つたら動いてやらないことです。そうするうちに部員との間に友情ともいえる感情がお互いの間に芽ばえてきました。一代目の私の調教責任者は田中倬氏でした。今年度から二代目の小栗紀彦氏のもとで調教を受けることになりました。

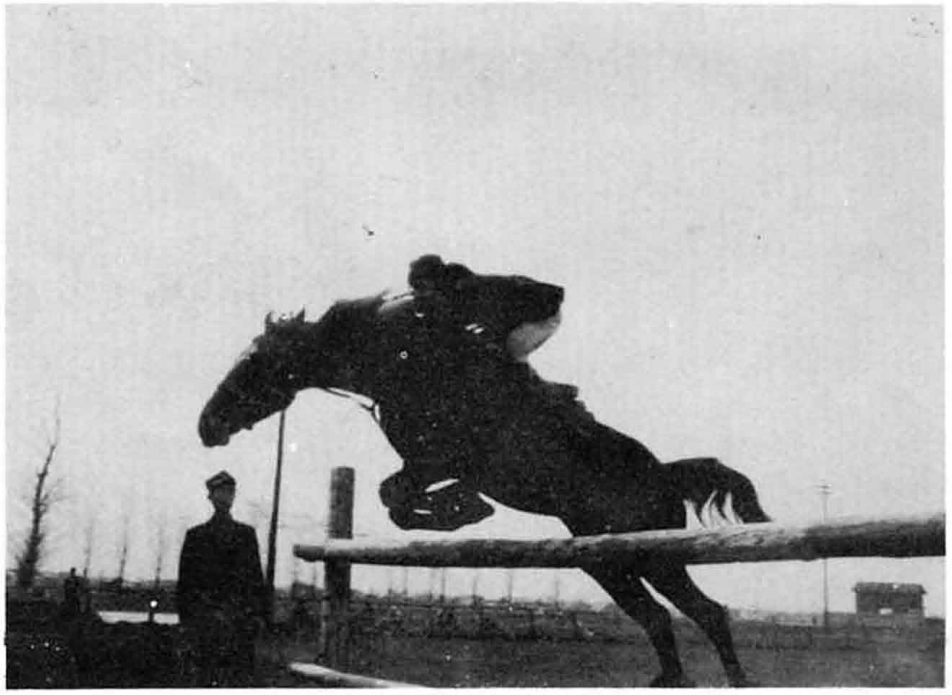
私の自己紹介もこのへんでそろそろ終りにしたいと思います。今後とも不肖私をよろしくお願い申し上げます。そしてかつ数年後の私の雄姿を御期待してくださるようお願いいたします。

庄内歯科医院

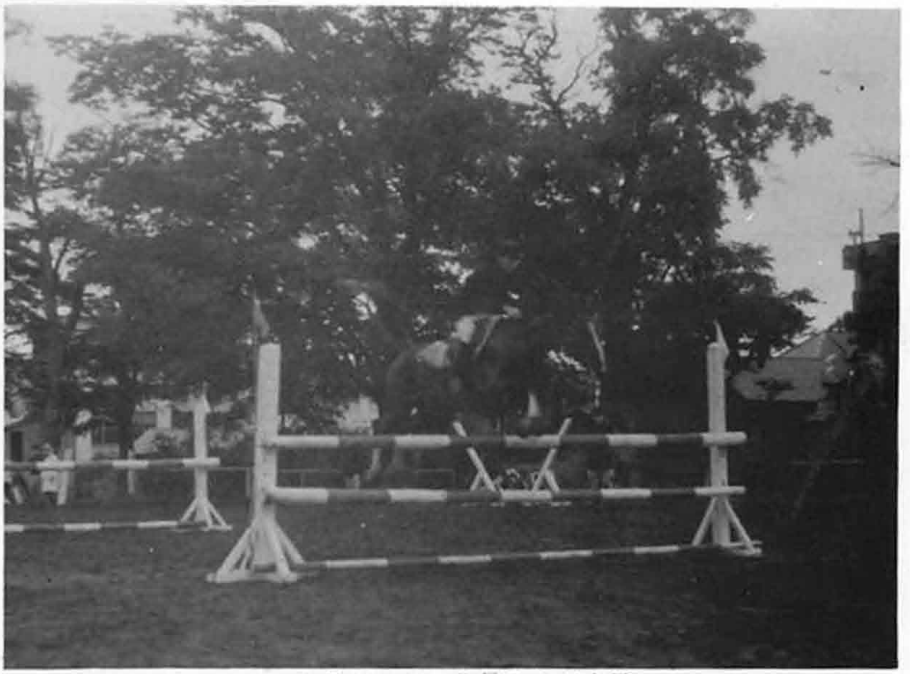
院長　庄内貞夫

札幌市白石中央通　53－3　　TEL　86－2504

北翔号と五十嵐兄



いまは亡き北飄号と池田兄



六段における北晨号と山本兄

馬術部の陰の
実力者 入江兄

愛馬北楊号に騎乗する
浜岡兄

チビと紅一点の仙波姉

北彗号と高倉兄

馬術部の自然人降旗兄

朝清号と作業王 阿部兄

卒業生のプロフィル

今年、我々馬術部は九人の多くの卒業生を四月に送り出すこととなりました。四年間、諸兄姉が馬術部にいろいろと貢献していただいたことを感謝したいと思います。諸兄姉には人間としての長所もあり短所もありましたが、部報の誌面を借りて、卒業生の御紹介したいと思います。

阿部　勝彦　昭和三十九年入部・農学部林学科卒
三年目の時作業主任として活躍。兄の温和なムードとユーモアで我等下級生をまるめこみ、なんの抵抗を感じさせず、作業にアルバイトにと働かせることに成功。結局我々に作業の楽しさと意義を教えてくれた。又兄の部報の自馬紹介の文のおもしろさは定評がある。

五十嵐　章　昭和三十九年入部・法学部法律学科卒
四十一年度主将。
道大会で優秀な成績をおさめ、国体の北海道代表選手となる。名馬北翔号を駆つて、努力に努力を重ねて、北翔の能力のすばらしさを引き出す。又部の最大の問題である赤字問題の解決に身を挺してあたり、部財政に明るい希望をあたえてくれたと思う。兄は特に麻雀がお好きで、兄の部屋は雀荘と化しているよし。

池田　統洋　昭和三十九年入部・工学部機械科卒
四十一年度副将
今は亡き北飄号に騎乗して活躍。一見童顔なので、下級生は組安しと見るが、なかなかどうして厳しいところがある。五十嵐主将を助けて赤字問題にあたり、兄の話術はクロウトばりである。又兄の子守歌は我々に北晨を思い出させるものとか。

入江　圭　昭和三十九年入部・工学部衛生工学科卒
会計として財布の口をがつちり握り、そのガメツさは歴代会計に見あたらない。これでもつて兄は陰の実力者として存在。貴族的風貌から〝殿下〟と呼ばれているよし。しかしうわさによると、腰が軽く、めつたに下宿にいたためしがなく、不良貴族ともいわれているよし。

高倉　宏輔　昭和三十九年入部・獣医学部獣医学科卒
北彗調教責任者。山村先輩の調教した北彗号を引継ぐとともに、指導を受けた御人。静かな顔にショボショボひげを生して、飼育・馬体管理に手腕を発揮。穏健な考え方から下級生の緩衝地帯として存在したよし。

降旗　正忠　昭和三十九年入部・工学部電子工学科卒
馬術にあつて特異な存在。兄の文から察するように、自然を愛するあまり、自然人として生き、落馬ノートに寒山という号で迷文を残す。その野人ぶりはコンパなど酒の入る席でいかんなく発揮されたよし。

仙波　和子　昭和三十九年入部・教育学部教育学科卒
荒しき四年目男子の中にあつて、一輪咲く花か。北翔とともに生きた姉はチビとの別れが馬との別れと思つて悩んで

いたらしい。下級生にとつて厳しく又やさしい姉御ぶりを示し、我々に安らぎを与えるとともに、女子在部員は見習うところ多し。

山本　紘明　昭和三十九年入部・経済学部経済学科卒
昭和四十一年度主務
五十嵐兄の女房役として、赤字問題など多くの困難な財政問題に当り、大いにマネージャーとしての手腕を発揮し、部財政に一応のめどを与えた。北辰に騎乗し、小栗先輩からいろいろ指導を受ける。そんな兄にもアキレスの腱があり、女性には全く弱く、時としてフエミニストぶりを示し我等下級生は当られたものである。

浜岡　秀洋　昭和四十年入部・工学部機械科卒
土佐の高知の生れ。南国の陽気さと、その内に潜む寂しさをちらちらと見せてくれた。廃馬になつた北楊号をかわいがり、一人と一頭で漫才でもコンビを組んだらおもしろかろうとのこと。兄は〝イケズ〟という一言をもつて兄の苦しさ、陽気さを表わしているよし。

☆　☆　☆　☆　☆　☆

答辞

四年目　山本　紘明

残雪が眩い程に日の光に映える。北国に遅い春の息吹がそこには感じられる。雪の下では、やがて来る若い生命を象徴するかのように、新しい植物の芽生えへの活動が開始されている。今、そうした来たるべき春の光に追われるが如く、消し去られるが如く、それは春の淡雪にも似て、巣立ちゆくかつての若者。様々な思い出を残し、過去への郷愁を秘め、新しき世界を開かんとするそんな我等に部が与えてくれた物は意外に大きい。それは余りに大きすぎて言葉にならぬ。ならぬから言わない。だが、幾多の先輩諸兄も同じ物を得、同じ物を与えられてこうして追われていつたのであろう。過去4年間の生活。不満もあり、悔恨もあつた。楽しみは数え切れず、苦しみも又、同じ数ほどあつた。それらが今は流れのうたかたの如く、かつ消えかつ結びて想い起こされる。

一年目、それでも仲間は二十余名いた。未知のものに触れる喜びと驚き。馬の小便はやはり長いわいと感心し、馬が飛ぶことを知り、かつその姿に目を瞠つた。馬の顔の長さと自分の顔の長さを見比べて又々感心したりもした。夏が来、去り、秋から冬へ。それは驚喜と愉悦のうちに目まぐるしく変化していつた。生まれて初めて北国の、北海道の本当のきびしさにふれた冬の午前練習。その時同志は約半分に減つていた。そんな中で何もかもが珍らしかつた一年間はすぎ、新入生を迎えた。初々しく新鮮な彼らに二

年生としての実感を与えられ、したり顔にさも一人前の馬乗りであるが如く新入生に相対するお互いが可笑しかつた。真面目くさればくさるほど、それはちぐはぐな可笑しな光景であつた。夏の遠征では、様々な珍無類の逸話を生み出した。去る練習試合に於て経路違反に気付かずに、同僚の〝ちがう！ちがう！〟の声を〝ガンバレ！ガンバレ！〟と聞き違え、一度ならず二度までも拒否され、挙句のはてにものの見事にトリプルを逆から飛越し終えて得意満面であつた阿部。白井分場では我々から見れば超一流に見える馬に乗せてもらい、軽速歩をとりながら落馬し、そして何を言うかと思えばケロリとして、〝この馬の反撞おかしいんじゃないか〟とのたもうた高倉。或る大学でそこの練習に参加し、必死の形相すさまじく一m余りの単一を飛越する、というより馬にしがみつき終せたといつた方が適当であつた井上は、そのすぐ後に高校生が同じ障碍を速歩で楽々と通過するのを眼のあたりにし、そのショックがこうじてかどうか、その後部を去つた。全ゆる予定を終了し、一日の自由を満喫しに東京の歓楽の巷へと流れ出た悪人共は、かねてからの希望であつた或る見世物を見物することにした。しかし唯一人入江はこれに同行することを拒み、ついにそれが終る四時間前後の時間をガンコーナーで過すという珍記録を樹立した。いかに好きであろうとも辛かつたに違いないと同情を禁じ得ない。そしてこの遠征の圧巻であり、ハイライトは山本であつたことは確かである。さきほど述べた〝ガンバレ！ガンバレ！〟事件のあつた同じ時での出来事である。慎重なスタートを切り、第一を難なく通過、第二をもと思いきや、案に相違して馬は明後日の方向めざして一目散。何を思つてか乗り手はその時、行くべき方向を見失い、あらぬ方向を眺めた。その視線の先に何があつたかは知る由もないが、ともかくその時彼は完全に馬が走つていることを忘れ、更に馬場の狭きことに迄思いが到らなかつたのであろう。事の結果は物理的自然法則により歴然としている。すなわち拉致前での急停止、上に乗つかつて尚も運動しようとしている物体は当然馬をはなれ、慣性の法則にしたがつて前方へ、そして引力法則に従つて落下。地上に到る前に拉致なる卑劣きわまる棒状の物質があり、運動を阻害されるという事態に立ち至つた。悠々と地上にねそべつた彼は盛んに足をバタバタさせ、口をパクパクさせる。遂に血迷つたかと思えば、彼はこう言つていたのである。〝俺の下半身は動いているか？〟と。この時の彼の心情や察して余りある。彼は多分こう思つたのである。下半身不随は彼にとつて、否男性全てにとつて死以上の宣告である。と……。その後の様子を見るにこの事件は彼にとつて、むしろ刺激とさえなつたふしも見られ、以前以上の活躍を見せたことは喜ばしい限りである。かくして三年目へと成長していつた彼らはすでに八名と減つていた。そしてこの八名の肩には否も応もなく従前の部に対する決算的な意味と、今後の部の行くべき方向を決するという意味に於ての、まさにきびしい環境条件が重くのしかかつた。そしてその故に忘れられぬ、我々と二年有余苦楽を分かち合つた愛馬四頭の大量放出を経験するに至つた。

空つとぼけた風ぼうを持ちながら、部の主的存在として、或る時はこの上なく愛らしくある時は恐怖をすら感じさせ、又ある時は憎悪の対象ともなつた、常に我々の師であつた朝滑号は、更にあの偉大な一物をもつて全ゆる男性部員に少なからぬコンプレッ

クスを抱かせ、又そうでない者にとつては憧れともなつたであろう。やさしく、うれいを含んだようなそれでいて常に澄みきつた愛らしい瞳をもつた北涼、決して美人型ではないが、彼女は男心を惹きつけずにはおかなかつた。興が至れば突つ走り、とどまるところを知らぬ情熱は、遂に新参の年下の若者との恋にそれを忘れ、一死を設けることとはなつた。彼女がいなくなつた後忘れ形見は今又部に還り、かつての彼女を彷彿とさせるべく日々活動している。まるで彼女はこのことあるを予期していたが如くに……。日高に生まれ〝テケテケばあさん〟の名で親しまれた北楊は、すなおな決してきつく叱ることのできない馬であつた。憎さより哀れさが先に立つ、何か暗い影を背負つた薄幸の美人を想起させた。楽しいという言葉を日高の原野に置き去り、あらゆることが苦しみとなつて彼女にふりかかつているような気を起させた。そんな彼女が手稲の牧場に預託されるということを聞いた時やつと彼女に明るさがよみがえると思つたのは、そのせいかも知れない。交際は短かかつたが、入厩時大いに期待され、遂には幻の名馬となつてしまつた北駒号。サラブレッドの片鱗を見せたのは束の間であつた。その大半を療養生活に過ごし、再起を待たずに別れることとなつた彼は余りに高貴すぎたのかも知れない。

我々が部を去る前に別れねばならなかつた四頭の愛馬達。できうるならば今、他の仲間の馬達と同様こうして別れたかつた。しかし彼ら、彼女らの去つたあと、ひとくせもふたくせもある若者達が、愈々活躍せんと歩き、走り、そして飛んでいる。北翔、北瓔、北晟、北彗、北秀、北顕、北漠、　、そして自分達も又これらに期待をかけ、望みをつないで今去つて行く。四年目は試合の連続であつた。それらがすべて決して満足のできなかつたものであることは周知の如くである。試合がすべて終つた時、彼らは一人ずつ馬場から寂しくその姿を消していつた。まだなすべきことがあることを自覚しながら……。或る者は卒業の単位を揃えることに必死となり、或る者は抑圧していた欲望を発散すべく狂奔した。そこには本質的に弱者である人間の姿が見られるのみで、あのかつての強くたくましい若者の姿はなかつた。北飄号の突然の死という驚天動地の大事件が持ち上つたのはそんな時であつた。黒い旋風、我々の英雄、北大の持つ代表的名馬であつた彼女は、白い牡丹雪の降る中でまるで忽然と死んで行つた。それは我々との別離を前にしての決定的な悲劇的な別れであつた。彼女に対する言葉は今では只空しいものとなるだけである。かくして様々な事件を経験し、とにもかくにも四年間を無事に（？）務め終せ、別離の場に臨んだ八名の士。一見きびしく、高潔そうに見えながら、中身は麻雀と漫画のことしか考えていない五十嵐。オイヒの坊やですつて、その風ぼうからは決して理解のできぬ声を放ち、卒業後は只々おぼろにすごす池田。酒と女にめつぽう弱く、そのくせもてたためしもなく、一時はオバケのQ太郎と伊賀忍影丸に凝り、クラーク会館のガラス戸を通り抜けようと試みて頭をぶつけた山本。悟つているようで悟つていず、わかつているようでわかつていない。就職試験がすべて終つてから就職要項をもらい、手続きをしようとして去る所の人事係の人をあわてふためかせた高倉。学問上の理由で山に入るのはいいが、必ずうるしにやられ、そして事もあろうに何を血迷つたか、そのことがあたかもそのことが学問的情熱であると手前勝手に解釈し、ほくそえんでいた幸

わせな奴、阿部。東京の空は汚ないと智恵子の如き言葉を残し、札幌のスモッグに犯されてさじを投げ、夜な夜な遊び歩いては不良貴族の名を残した入江。パリに魅せられ、まだ見たこともないフランス女にうつつをぬかし、日本の女に恋することを忘れて四年間、只パリを恋しつづけた哀れな降旗。雑草の中の百合が一際目立つように、男ばかりの中にあつてはきわだつて美しく、物やわらかであつた。がしかし実験精神は凄まじく、木の枝と自分のオデコの固さを比較すべく馬上で試み、やはり自分が　弱いことを発見するに到つた仙波嬢。龍馬＝英雄、龍馬＝土佐人、自分＝土佐人、だから代入すれば自分＝英雄となるとまるで目茶苦茶な論理をそれでも数学的に見事に説明してくれた浜岡は、驚くなかれ工学部学生であつた。

以上愉快な仲間、八名の士は互に救け合い、支え合いながら、四年間にわたる生活を卒え、O・Bとしてその片隅に加えられることによつて社会に、或いは更に学究の道へとはばたかんとしている。ここに於て思うは只我々をここまで育て、築き上げ、そして導いて下さつた先輩諸兄、常に我々を下から支え、批判もし、我々以上に馬術部を或るべき方向へ向けようと力を発揮してくれた後輩諸君。更には未熟な学生である我々に常に社会的な感覚を植えつけながら、我々を指導し、教授することを怠ることのなかつた周囲の社会人馬術家諸氏。又同じ目的、同じ理想を持ちながら互に励み合つた多くの学生馬術家諸君。最後に我々の手には負えぬ仕事を、積極的に協力し、力を借して下さつた半沢先生等に対し、只々言葉に尽せぬ感謝の意を表明するだけである。皆様本当にこの四年間の長い間どうもありがとうございました。又いつかあい見える日を楽しみに、ここに答辞として別れを告げさせて頂きます。

完

昭和四十三年三月二十五日

部報に寄せて

四年目　仙波和子

部報の為に書くのは、これが最初で最後となりましょう。ようやくの思いで提出を済ませた卒論ですが、それはただ、事務的に何単位かを得たというだけの事。ちつとも自分の持つ問題を解決したとは言えないのです。そんなに簡単に、うまく行くものかとも思います。そしてともすれば、おもしろくない思いにひたつて楽しんでいるような自分に驚き呆れて、もつとシャンとせねばとも思います。数ある苦労の中でも、その源が自身の中にあるのなら、いかなる理想郷と言えども、その軽減は疑わしい事となりましょう。正に我が難渋の源が私自身なのは、部員の皆にはお解りでしょうし、懐しい先輩・同輩の皆様のニヤニヤなさるお顔が目の前に浮かびます。

「北楊に乗馬、はじめて、直行進出来ず、速歩と共に余裕を失い、隅角をキチンと曲れず馬場中央へノコノコと、醜態を演じてしまつた。」これは入部して最初の五月の事でした。

「昼休み北楡に水を飲ませていたらひつばられ、戻つて来れなくなつてしまつた。馬と引つばりつこしても負けるし、アップは恐いし、「飼付け出来たんだけど」と皮肉な当番の小栗さんが見付けてくれたのは、三十分もあと。横へ横へと引つばるべー。」

函館のアツブはどうしているのでしよう。

「北飄手入れ。人参ばつかり食べて何にも静かにならない。鞍を着けたら、とたんに落着いちやつた。」

「北凉少し変な様子（すぐ恐るし、不気嫌）」心配になつた加藤さんはやがて獣医を訪い、グレースは六月にデコを産みました。

数少ない女子部員であつた為、試合には早くから出してもらう事ができましたし、多くの点で恵まれた部生活でした。千葉先輩、東京OB会の皆様をはじめ、諸兄のお力によつてかなえていただいた、馬事公苑での印南先生のもとでの練習は、忘れることのできない思い出の一つです。にもかかわらず、愛すべき後輩を迎えたのにも拘わらず、やがて私は退部だ、休部だと騒ぎ立て、周囲に迷惑をかけ、今に至るのです。

大好きなチビ、大好きなチビに乗れるアテがなく、また実力を示して乗せてもらうようにすることも、未熟な私には、所詮はかなき夢であつた時、馬術部賭けるに足らずと考えました。

この反動も含まれていた事は否めませんが、それからの一年余りの日々を十分に生きることのできた所為か、これも一つの道、それも一つの道、そうとしか考えられません。ただ、三年間も在部しながら、イザと言う時になつて担わなかつた責任、この事を考えれば、私は自らを恥じます。不満に囚われて、思つただけで優しい気持になる馬達のこと、楽しくも難しくもある馬達のこと、ひき立ち、ひき立て、背景となる自然の様々のことを忘れもした事を悔います。

時はかまわず進み、卒業真近、主将も新たに春田さんとなり、部は前進します。部の永遠の栄えを祈り、か弱き同性の身を案じ、声援を送ります。

我、馬ヨリ自然ヲ愛ス

四年目　降旗正忠

原始林・原野・湿原地帯……こんな言葉を聞くと、居ても立つてもいられなかつた少年時代。季歌のあの美しい旋律と、北海道の大自然の心ゆく迄の情景の描写。桜花の頃、秋澄空の頃、吹雪の頃、ふと頭をかすめ、口ずさむ〝都ぞ彌生〟。四年間の青春の想出を美化しだすと、そろそろヤバくなつた時なのである。馬術部に籍を落とした（置くのではない）のも、四年間になるのだから。その間に、種々の人間群と遊び、議論した。一・二年の頃は喫茶店に入れば必ず馬の事を話すのに私は辟易していた。もつと異つた事を話題にのせたかつた。それ故、私と同輩との距離は喫茶店に居る時から離れていつた。

十月頃から、友人の中に居るのにも、何故だか知らないさびしさを感じた。こんな時に限つて私は馬には乗らず自然を求めた。原野を一人彷徨した。私は相談する相手もいず、皆からとり残された観念にとり付かれ、部に居る事が重荷となつた。加藤からはよく云われた。〝君を見ると寂しくなる〟と。この時の気持程みじめなものはなかつた。

しかしまだ私には楽しかつた夏休み前の事が忘れられず、部を続ける事にした。退部してゆく人が一年間で十数名をこした。そんな中で、私はまだ未練があつたから、部をやめる気はなかつた。二年目になると、一年目が入ると云うので、一生懸命乗つた気がする。五月は、北飄の馬匹となつていたから、二十回位乗つた様

な気がする。四年間で一番長つた月となつた。それから、馬術部より自然の美しさの方に興味を抱き始めたので、乗るのはやめて、もつぱら原野や原始林の散歩に費やした方が、他人から文句云われず勝手気ままに思索できるから好きだつた。さびしさの度合も周期的になると、ますます馬術と云う事から離れ、ただ単なるさびしさの型変りと自己逃避として作業当番を行なつていつた。二年目の十二月頃、退部問題が持ち出され、種々の事を議論して、結局今のままで進める事にした。

こんな調子が一年続いて、四年目になるともう馬術部の人間を見ても親しみがわかなくなつて来たのを、私はこわくなつた。先輩や同輩はいざ知らず、後の人間は、いく人かをのぞいて、もう私の視野の外に位置していた。

こんな事を書くと、私があまり四年間楽しまず過して来たと錯覚してはこまる。むしろ、同輩に様々な事をおしつけ、私の思うままに自説を通してしまつたのも、四年目の人達のおかげだと思い感謝している。むしろ、四年間私は馬術部を運動部だとは思わず、サークルだと思つて行動して来たのをみると、良くまあ、除籍もされず、退部もしなかつたのを考えてみると、やはり馬術部全体に感謝せずにはいられない。先輩の印象があまりにも強烈すぎたからかも知れない……。

冬のニセコアンヌプリの、あのどこまでもどこまでも青い空。そして雪原の連なりと樹氷群、大草原の別海村、オホーツクの鈍い青、どこまでも続く原野のカラマツ並木、みんなすばらしい象徴だ。

諸君、大志を持て！　北海道の大自然の美に蕩けろ。

日本中央競馬会

札幌競馬場

北14条西19丁目

TEL (72) 0461～5

場長 松山義朗

フランスだより

昭和三四年卒　千葉幹夫

拝啓　部報への原稿依頼のお便り本日回送されてフランスで入手致しました。いつも御無沙汰ばかりして先輩としてはなはだ申し訳なく感じて居ますので、何かお詫のしるしともすべく締切りの期日が二・三日前に過ぎたのを気にしながら大急ぎでペンを走らせます。

御承知の如く、一九六六年六月日本馬術連盟がフランスへ依頼派遣の実現したキャプテン・デニランが日本での講習を終えるにあたり、日本の馬術界の貧しさを解決するには表面的な指導しかする事の出来ない短期講習ではどうしようもないと考え、日本での本格的馬術の指導者を養成する事を目的として馬連に進言し、フランスソーミュールの騎兵学校への日本人騎手の留学が実現する事になつたのです。私が光栄にもその第一番目に選ばれる事に決し、全然フランス語の理解出来ない状態でフランスへ渡つたのが一九六六年十月末、今から考えるとにかくこれ以上の絶好の機会はないのだから、とにかく飛び込んで行こうと考えた神風的行為のあらわれと冷汗三斗の思いです。それから一〇ケ月、毎日五頭の馬とフランス語の講義に頭をかかえ、尻をさすり（なにしろ鞍傷の為最初の一ケ月は食堂で立つて食べた程ですから）無我夢中で過しました。

一九六七年七月末に卒業試験があり合格者五名中二名の中に入る事が出来、なんとか面目を保ちました。

ソーミュール騎兵学校は今でもヨーロッパの馬術のメッカとして馬乗りの聖地です。かの有名な、コロネル・ダンルー、ロネルル・ケージュを始め名前を上げればきりがない程、数多くの名騎手の生まれた所です。この騎兵学校の教官達はすべて金色の拍車に金色の鞭を持ち、黒一色の制服を着用し、カドル・ノワールと呼ばれています。騎乗技術の研究と伝統の維持を目的に毎日馬に乗つている人々です。この学校にこのカドル・ノワールの後継者を作り馬術の指導者を養成する事を目的として毎年少数精鋭を錬えるC・P・Eと呼ばれるコースがあつて私もこのコースに入る事を許されたのです。

このコースに入つて来る者はすべて一応完成された騎手ばかり、すべて馬に関することは何でもやる事になつています。さぞかし高級な事ばかりやるのかと考えるでしょうが、さにあらず、毎日あぶみあげと不整地での小障害、即ち高級な事をやろうとするなら尚一層基本的な事をしつかり固定しなければならないという考えが非常に強いのです。勿論いわゆる高級な事もやりましたが、一番練習の主眼となる事はあらゆる場合、あらゆる環境に於てどんな馬の動きにも決して努力せずに体が勝手について行ける迄に馬と一体になる反射運動を自らのものにする事です。そうすれば馬に何かさせようとする時は、あとはただ扶助という意志疎通の手段によつて馬に要求しさえすれば馬はすぐ思い通りの事をやつてくれる。馬が動くのに邪魔をしながら馬に何かをやつてくれと要求する事はどだい無理な事と云つているのであつて馬がその要求に従える筈がない。馬に乗つてやろうとするからには先ず馬上

に安定する事を完全にしなければならないという事です。やはり問題は数多くの馬に数多くの機会乗るという事です。

実に多くの事を学びました。実に今迄の考え方に大きなあやまりのある事を知らされました。とてもこの紙面で説明する事は出来ません。いくらか参考になればと今迄考えていた事とかなり違う考え方を二・三紹介します。馬に色んな運動（障碍を含めて）を要求する為にそれが出来る様な馬の体を作る事が調教上の大きな比重をしめるという事です。障碍上での正しい弾道を描かしめる為にはそういう運動が可能である様な筋肉を柔軟運動で作り、そういう運動が一番経済的な楽な動きなのだという事を馬に知らしめ、練習によつてそれを習慣とする様にさせるという事です。

馬の体は常にいつでも弾性を錬える為に精一杯伸びるという事と精一杯縮むという事をやらなければならないという事もそうです。推進力という事は常に前へ行くという事であり、調教の初期から手綱が軽い馬、御し易い馬にしてはいけない事であり、馬はハミを求めてどんどん前へ出て来なければならず、それを脚によつて推進し後躯の屈撓が得られた時に初めて、挙に対して馬が軽快になつて来るという事です。この様に調教された馬は全身の筋肉を使つて雄大な歩様を示し、日本でよく見られる様に調教が進むに従つて歩調が短節になるという事はありません。外国の馬は良く歩くと云われますが、この点を考えると外国の馬は良く歩かされていると云い、換える必要があるのではないかと考えます。私は日本の馬でも決して馬の質はおとつているとは考えません。ハンターやそれに代る様な馬のいる国々では高いサラブレットを使う必要がないので、それで間に合わせていますが、やはり優秀な良い馬の多くはサラブレットです。日本のサラブレットの水準を考えた時決して日本産の馬で対抗出来ない筈はないと考えます。ヨーロッパに於ては生産されたサラブレットが全部競走馬になるという事はないので、かなり優秀なサラブレットが若い中から乗用馬として調教されているのを見るのはうらやましい限りです。中には最初から乗用として購入される馬でダービー馬の異兄弟とかハイペリオンの子供だとかが居るのですから競走で能力喪失となつた馬が乗馬になる日本とくらべて日本の馬が悪いと決めてかかるのは納得出来かねます。

目下はあまりに数多くの事を一度に学んだので順次整理し、ヨーロッパで過した貴重な時間を無駄にしない為に自分が出来る事、なさねばならぬ事は何かと一生懸命考えている所です。

いずれお目にかかつてゆつくりお話しする機会を待ちたいものと考えていますが、今回はとりあえず原稿を遅らせては申し訳ありませんので書き流しになりましたが、この辺でペンを置く事にします。

若しメキシコオリンピック参加が決定しますれば此地より直接、馬と共に行く事になると思いますので、日本へ帰れるのは十一月になると存じます。

私の馬術部にお世話になつていた時期は一番恵まれた時でしたので近年の繋養馬の状態を聞くにつけ部員諸君の御苦労が案じられます。何とぞ貴重な青春時代を北海道の大自然の中で馬と共にある幸せをかみしめて頑張つて下さる様、遙かにお祈りしております。

時折は下記宛お便り下されば幸せです。

一九六八年二月五日　フランスにて

Mikio CHiBA
c/o Centre National
Les Sports Eguestres
Fontainebleau
Fronce

お手紙

昭和十五年卒　西村雅吉

水産学部の学生、男子四名、女子二名が馬に乗りたいとの申出があり、函館乗馬クラブ、競馬場の御好意で、土、日に熱心に乗つています。その中には札幌時代に馬術部で練習して来たものもいますし、今に優秀選手も出ることと思つています。もう少し様子をみて、水産学部としてのクラブ、本家の北大馬術部との関連などを考えたいと思つています。そのようなわけで張りあいがあるので、日曜日には私も乗るようにしています。

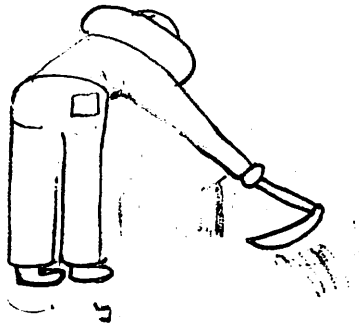
42・12・15

昭和三十八年卒　実吉峯郎

後援会報はじめ、試合の連絡など、大変まめにしてくれるので、部の現状がよくわかるようになりました。戦績はふるわないようですが、必ずしも勝つことだけが部の使命ではないので、今年度の再起を焦ることなく期待しています。

朝清、北楊、北凉の廃馬は惜しまれます。三頭とも桜上でのなじみも深く、特に北凉（グレース）は小生が命名者なので残念で

す。まあ時代ですし、仕方がないでしよう。ただ、北飆の事故は、いささか不注意のそしりをうけましよう。恩田の調教中たのみこんで乗せてもらつた事が悲しみの中で想い出されます。これで、現有馬中乗つたことのあるのは北翔だけとなりました。しかしながら、北凛と云う部はじまつて以来のサラが入つたことはうらやましいです。何とぞ満点馬に仕立てて下さい。



一言

随想

同好会幹事　佐合義弘

私が北大生協を去つてすでに一年、光陰如矢。同時にこの一年馬にも一度も乗れなかつた。部員も新しい人が入つてだんだん知らない顔が増えて来る。

実は正月二日に、一年ぶりで北翔に乗つけていただいた。一年も乗らないとこんなにもだめになるかと我乍ら驚いたし、チビもずいぶん重い感じがした。

さて、私はこの正月休みに、ひまにまかせて本棚をひつくりかえした。「馬術部三十年史」の背文字が目にとびこんだ。火の気のない部屋である事も忘れて巻頭から最後まで読んでしまつた。発刊当時とは違つた感激がこみあげて来た、実に旧友に再会した様様な何んともいえないなつかしさがわいてくるのを禁じ得ない。

巻頭の太秦先生の言葉、大変だつた戦時中の馬術部が目に浮ぶ、自馬を持つたよろこび何にもたとえようのない、馬を知るもの、馬と生活が出来るものだけが感じ得るよろこびが文を通して身にしみる。

各諸兄が書き綴つた記録、又感想など、全く汗と苦労で構築された三十年と云う気をあらたにする記事で一ぱい。玉沢君の筆による自馬紹介などは、一頭もいなくなつた現在、その一頭一頭の特徴が目に浮び、馬のしぐさが目の前に再現される想いで読んだ、実にユーモラスな、そし　いて一頭々々の特徴を適確にとらえた

表現は何んともいえない。

私の愛馬北榆号（ミス・アツプテール）はまだ函館に健在ときくが一昨年の一月以来再会のチャンスにめぐまれないでいる。北榆号の紹介をよみ乍ら、当時の事など昨日の事の様に想い出す。

私も一昨年高倉新一郎先生の「アイヌ研究」と云う本を作るお手伝いをしたが、この「三十年史」を作つた三浦清一郎君等の苦労が改めてしのばれたし、「三十年史」の価値が年と共に上つて来ている事を感じた。

馬と共に築つた部の歴史を部員諸氏が改めて読みなおし、輝ける歴史の一頁をこの一年間に如何に築くかを考えて見る事も有意義だと思う。

馬を中心に構築した大学生活は、友情、師弟以外の何ものかをプラスしており、社会生活のさまざまな部面でこの経験が生かされて来る。

札幌陸運局認証工場

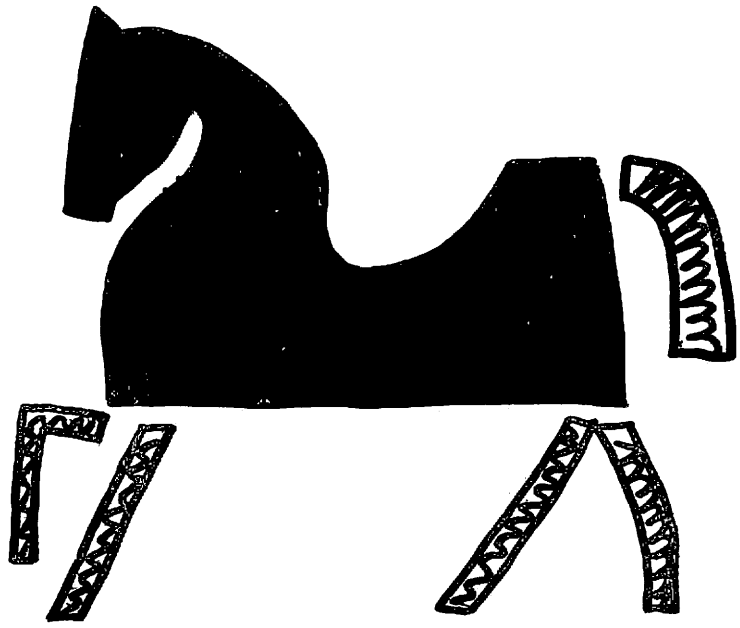
北大モータース

小野　忠

札幌市北18条西5丁目

TEL (71) 2076

憩　の　園



孫の弁

三年目　本田　徹

伝統というものが馬術部にはあるのだそうだ。それが一体どういうものであつて、どういう仕方で僕たち自身にかかわつてくるものなのか以前は勿論のこと、今もつて僕にはよく分つていない。

あれはおばけのようなもの――或は言霊と言つてもいいが――だと思つていた時期もある。

この言葉はそこらに転がつている石くれかなんぞのように気軽に部員たちの口の端に登つてくるというのに、いまだそれが誰かを暫ずかせおでこに傷をこさえさせたという話を聞いたことがない。つまり誰にもこれが伝統だと言つてつまんでみせることはできないのである。そんな質実感のないまぼろしのようなものをどうして御大層に言挙げしなければならないのだろう。要するに僕は伝統という言葉に対してあまりよい印象を抱いていなかつたのである。

実際、伝統というのはしばしばやりきれないほど退屈なものであるし、「伝統的にこういう乗り方、考え方をしてきたのだから、これからも……」という場合の伝統はただの陋習でしかないのだ。

使い方一つでいか様にもとれる、なんとも始末に追えない言葉だと僕はよく思つたものだ。今でもこういう考え方とまだきれいにさようならを告げてしまつたのではない。多少の未練は残つている。

けれど僕等もいずれは伝統というおばけと真剣に対時しなければならないめぐりあわせになつている。いつまでも伝統というのはOBという名前を持つたがりがり亡者たちの口になる泣き言、嘘の百万陀羅なのだと冗談めかしく極めつけているわけにもいかないのだ。

ところで一体伝統というものがあるべき姿で存在している例はないのだろうか。いや、まじり気のないまつとうな伝統精神などというものはどこ探したつてありはしない。たいていは、よいものわるいものが混濁していて何が何やら判然としない。明日になればその悪い面とやらがすぐれた働きをするのかもしれないのだし……。

けれどあつた、あつた。一応すぐれた伝統精神と呼んでよいようなものが。それについて僕は話そう……。

日本の場合はいざ知らず、西洋とりわけスコットランドの杜氏たちはきつと楽でなかつたに違いない。特にじいさんたちは苦労したろう。まずは朽ちにくい、香りの馥郁とした木を選んで樽を作つておく。それから酒を作る。酒をどうやつて作るかは知らないけれど、大麦を発酵させたり、蒸溜したりはたまた大麦そのものの選定にも心を砕かなければならぬ。泥炭の煙なども混ぜるのだろう。こんなのはみな秘法であつて、僕等ごときがいずくんぞ知らん、である。さていよいよ酒を樽の中につめる。やれやれだ。きつと樽は涼しい風通しのよい酒蔵にでも安置されたことだろう。

しかし、ここまでやり遂げたところでじいさんたちにはいまはの時が訪れてしまう。寂しいと言えば寂しい話だ。何故と言つて

これだけの労を費してもなお、彼等の事業はやつとこさ軌道に乗つたばかりなのであるから。息子は、俺の息子は樽の中で眠つている美しい液体をこの先五十年大切に見守り続けてくれるだろうか。そればかりではない。俺の丹精こめて作つた酒は五十年後人の口に含まれ、舌をしめらし鼻粘膜を震わせた後でどんな評判を受けるだろう。人々を喜ばせるに足るだけの酒となつているだろうか。が、もとよりそんな事は俺の知り及ぶところでもない。もう死ななければならないのだから。

やはり彼等は何かしら思い残すことなしにはあの世にゆけなかつたろう。

林業にたずさわるじいさんたちの苦労もなみなみのものではあるまい。苗木を植えて毎日毎日、日が照らないといつては、雨が降らないといつては心配を重ねてゆく。やがてじいさんは死んで苦労も終わるだろう。けれど息子が後を継いでその先何十年か太々の世話をするだろう。その息子もいずれ死んで、今度は孫がなんとかすることだろう。孫の年が五十の坂に届くころには、じいさんの植えた木がようやく立派な大木に生長している。その木を伐つて売つた時、やつと三代がかりの事業が完成する。いまや年老いた孫もこの時ばかりはかせいだ金で酒を傾ける。そして自分の親父のこと、じいさんのこと、「自分たちが」やつてのけた事業のことあれこれしのびやるだろう。

僕はここに律儀な男たちが一つのたぐいまれな生き方を示してくれたのを知る。そのたとしえようもない美しさは、四の五の言わせないような重量のある力で僕等の胸に迫つてくる。

ああ、これこそが伝統というやつの正体なんだなとも思う。今度は石ころを握つた時に劣らない現実感覚がこの伝統に宿つている。

して僕等は？　うん僕等にしたところでとどのつまり杜氏や杣人と同じなのだ。天性の職人なのだ。よい意味での職人らしさに徹底しなければいけないのだ。

或る見方からすれば悲しくもあるだろうが、結局「学生馬術」という僕等の事業も一代限りでは完結しない。じいさんが作つた馬を、息子が必死で乗つて良くし、孫やひ孫の代に試合で勝つ。それぞれがそれぞれの役割にいそしみ全体で一つの事業が成立したことになる。勿論たいていの人は同時に孫でもありじいさんでもあらねばならないだろう。けれどこの一大事業は皆が何世代もの間連綿としてメドレーリレーで仕上げていくべきものであるという基本的な事実に変りはない。僕等はこういう伝統をこそ守り育てていかなければならない。僕等の努力が先輩の努力を発展させたところにあり、それは更に後輩たちの苦しみや喜びにまでつらなつてゆくのだと考えるのはどんなに楽しいことだろう。その楽しみを楽しみとするためにも、じいさんはじいさんなりに、息子はまたあるべきように、孫は孫なりの仕方で一生懸命愛馬たちや部の仲間のために尽さなければならないだろう。

戒

一年目　中寺清久

雨の降りしきる中を一台の車がボリ公を気にしながら走つている（無免許運転らしい）。そのホロをかけた荷台の中でN君は昼間の事を思つていた……。

その日は市民大会が行なわれた。彼は馬にシヤブられた指がまだ完全に治つていなかつた。しかし彼は一年目であるので試合に出してもらえる機会はほとんどない。それで出場したのであつた。

乗馬はなんと彼の指をシヤブツた本人いや本馬のS号である。彼の名が呼ばれいよいよスタートである。彼はこの競技で二つの誤算をやつた。その第一は、第一障碍通過の時である。それは関門で畜柵を平行に並べたものである。S号はそれを嫌う様子もなく真直ぐ進む「これならいける。」と思つたその瞬間、彼の体は上方に跳ね上げられていた。S号はそれを飛んでしまつたのである。必死で彼は彼女の首を抱いた（その肌の柔さよ！）。

その後である第二の誤算をやつたのは。その時彼は脱げた鐙をはかなければならなかつた。しかし彼は、「ここでもたもたしていると反抗にとられるし、時間のロスだ。この程度なら大丈夫だ。」と思い鐙をはかずにそのまま第二に向つていつた。ところがその結果、馬が障碍を越える度に空中遊泳をやらかした。どうやらこうやらゴールしたが二度切られてしまつた。それを見ていた先輩達の間では彼が落ちるか落ちないか賭が持ち上つていたようだ。

失意のうちに閉会式に臨んだ。次々に入賞者が表彰されていく、その時、彼はどこかで聞いたことのある名を耳にした。なんと彼の名が呼ばれたのである。しかも一位で……。

ガタンと車が大きく揺れた。我に帰つた彼は湧き上つてくるある考え（あんなことで勝てるのか、馬術なんてチヨロイものだ。）を押えながら彼はこう思つた。「いくらヨタ競技とはいえあれで賞をもらうなんておかしい。これは屹度現在の自分に贈られたものではなく、努力によつて練磨された将来の自分に贈られたのだ。よし！明日からは――！」

夕闇の中をシルエットになつたポプラ並木と平行に車は走り去つた。

無題

一年目　村田節子

私が選手になつた事を知らされたのが、試合の二日前。全然予期していなかつた事なので、まず最初にビツクリし、次に嬉しくなり、次にドキドキして、最後には全く不安になり、やたらに慌て始めました。それから大急ぎで練習をし、大急ぎで仕度をし、大急ぎで汽車に乗るという本当に忙しい出発でした。おやきを食べる暇もなかつた程です。せつかく盛大に見送ろうと待ち構えていた方達、さぞガツカリしたことでしよう。

福島競馬場は、中にゴルフ場もあつて、なかなかきれいでした。

こんな所のアルバイトならきつと楽しいでしように……。
第一日目の団体戦第一試合の相手校は福島大学でした。福島大学は地元であり、去年は二位になつています。試合経験皆無の私には、まるで難攻不落の砦のように思え、只々監督のクジ運の悪さにブツブツ言うばかりでした。私が乗つた宮雲号は黒鹿毛で反抗の可能性ありという馬でした。結果は第三の白壁で一度きられ、第四のレンガで二度きられて失権。後で田中さんから、全部左にきられていたと言われ、あつそうかと思いました。普段の練習なら、とつくに気が付いている事です。自分では落ち着いているつもりでも、やはりあがつてしまつたようです。二日目の個人戦は選手が自分でクジを引いて馬を決めましたが、どうしたはずみか我々三人同じ馬に当たつてしまいました。今度は監督がブツブツ言う番です。でも波忠号という満点馬なので一応安心したのですが、結果は散々でした。またもや第四障害の前で失権。試合前に最後の一m十cmの三段横木を飛べるかしらと心配したり、経路違反は絶対にやるまいと思つたりした事が全て無駄骨だつたような気がして残念でした。でも今度の試合に参加して、いろいろな意味で本当に良かつたと思います。面白く楽しかつた事、驚いた事、くやしかつた事等々、試合経験が豊富であるという事が、いかに有利であるかを痛感し、同時に一年目でデビューできた事を幸せに思いました。

馬

二年目　加藤公敏

部報小委員会の委員として人に原稿を出せのやいのといつていたが、いざ自分で書くとなるとおつくうなもので、無理に書いてもらつた人達の気持がわかる気がする。しかし書かないと部員諸兄姉から非難の声が起ることは必須である。ここで筆を執ることにする。

「天国はコーランと美人の胸と馬の背とにあり」

これはイスラム教典の中にある言葉であるが、当時アラビアでは馬が生活の一部として、いかに重要視されていたことを示すものである。さてこれを現実にあてはめてみよう。コーランまあこれは仏教国日本、いや無宗教的私にとつては甚だ理解しがたいものであるが、見方を変えるとコーランはアラビアでは生活・考え方等の基盤をなしており、それに近付くことが最大の目的となつているのではなかろうか。独善的かもしれないが、私はコーランをよりよい生活と訳したいと思う。生活がよくなれば幸福であろうし、夢が実現したことになる。美人の胸、これは全ての男子たるものは否定しまい。胸にほほを寄せて、自分の幼かりしころの母の胸を思い出すものもあろうし、心臓の鼓動を耳に感じ、鉄道線路に耳を当てて、汽車の近づく光景を想像したりもする。又、彼女と築こうとする幸福な生活・未来を考えて行くであろう。そして母の胸から母なる大地に結び付けるのである。自然はすべてを生み出す源であり、人間にとつてやさしくもあり、又おそろしく厳しいものである。自然（大地）は人間に教育を施し、鍛え、

絶望すると母のようなやさしさを見せて、人間に生きる喜びを教えてくれる。どうも飛躍しすぎてしまつたようだが、もう一度言うが、美人の胸は天国である。さて最後の馬の背であるが、これは実際に経験しなければわからない。私が入部して二年目になろうとするとき、いろいろの苦しさ、悩み、部に対する嫌悪感などが浮び上つては消えた。そんな時、部とを結びつけてくれたのは馬である。馬は生き物であるから、私の意志通りには動いてくれないが、騎乗した時の喜びは口では言い表わせないものがある。アラビアでは馬は不可欠なものとして存在し、現在の空気のようにあたりまえにあるものと思われていたにちがいないが、馬の背が天国であると言いきつているところに、空気とは違う何かがアラビア人の頭の中に横切つたのであろう。その何かが私の感じているある種の幸福感と同じものであると断言することには疑問を感じるが、共通点はあるかもしれない。条件を考えて見よう。始めに、馬の背はにいることは数段高いところにいることになり、他人を見下げることによつて優越感を満足させるのであろうか。そして視野が広くなつて気分的に自分が広い考えを持つたと思うからであろうか。又常歩の反撞から母が揺らす揺籠へ無意識的に感じて安心感に浸るからであろうか。私が特に強く感じることは例えば部班を行つて終つた時、自分はある行動を行つて終えたという征服欲を満たしてくれたという感じを馬という生き物を通して感じるからであろう。いろいろ書き出すとますますわからなくなつて行くが、馬の背が天国といえるのは本当のことと思う。いままで天国について書いてきたが、このようにこの言葉は現実にもあてはまると私は思う。人が何と言おうとも。

馬の死

戦争には馬が出てくる。騎兵にしろ、輜重にしろ馬は重要な働きをしてきた。馬は消耗品であるから、多くの馬が傷つき、そして死んでいつた。レマルクの〝西部戦異状なし〟にも火野葦平の〝麦と兵隊〟の中にも、傷ついた馬が出てくる。必ず出てくる馬は傷ついて倒れ悲鳴を上げて、荒々しい、恐るべき苦痛に呻いているのである。主人公に著者は次のように言わせているのである。

「それは人間の叫び声ではなかつた。人間ではあんな気味の悪い叫び声はできやしない。」

「僕はいまだかつて、馬が悲鳴を挙げるのを聞いたこともないし、また馬の悲鳴なんてものを考えることもできなかつた。それを聞いていると、世界の歎きという気がする。」

そして兵士は蒼い顔となつて馬を殺そうとやつきになるのである。それは兵士たちに死という現実に起りえることを、又死に対して不感症になつている心を馬という異質の生物を通して呼び起こされて、死に対する恐怖を現実に引き出すのである。兵士は恐怖心を断とうと努力するのである。私は読みが浅いかもしれないが、もつと本質的なもの（私にはわからない）に触れるのだろう。ここで思うのが北想号の死である。彼女は本当に静かに永久の眠りについたようである。それは部員にとつてもせめてもの安らぎであつただろう。もし小説中にあるような断末魔の叫び声をあげられたら、私なら憐む気持を通り越して憎さと情無さとで殺してしまつただろうし、馬に対する嫌悪感も起るだろう。これはあまりに人間くさい考え方であろうか。

青よ安らかに眠らむことを！

一人でしんみり
二人で仲良く
みんなでゆかいに

昭和の春　直営

三　　鈴

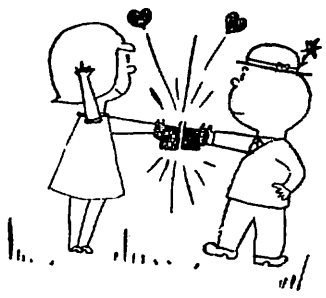
南 5 西 4

営業時間 AM 8：50～PM11：00

⊙モーニング　サービス

AM 8：50～AM11：00

コーヒー……50円
トースト付コーヒー……80円
⊙ カレーライス……120円
おにぎり（1個）……40円
みそ汁……30円
ホットドッグ……80円



喫茶　ゆうき

北大正門前　73—0840

北飄号特集

今は亡き北飄号の

墓前の花とならむ

弔　　辞

今はなき北飄号へ追悼の意をこめて

あなたは私達に馬のかわいさを教えてくれました。

あなたは私達に馬のこわさをおしえてくれました。

私達が入部当初堂々と手入れをできたのもあなたでした。2年目になつて速歩、駈歩の反動を覚えたのもあなたのおかげでした。

あなたは全ての模範だつたのです。部班の先頭はあなたでなければできなかつたのです。

あなたの豪快な飛越は私達に幾度もファイトを湧かしてくれたものです。

パドックの馬栓棒をはずし、引綱をほどき、いつもあの草原へ散歩にゆくあの姿をだれがわすれることができましようか。

あのやさしい眼つき、あの信頼しきつた目つきを誰が忘れることができましようか。

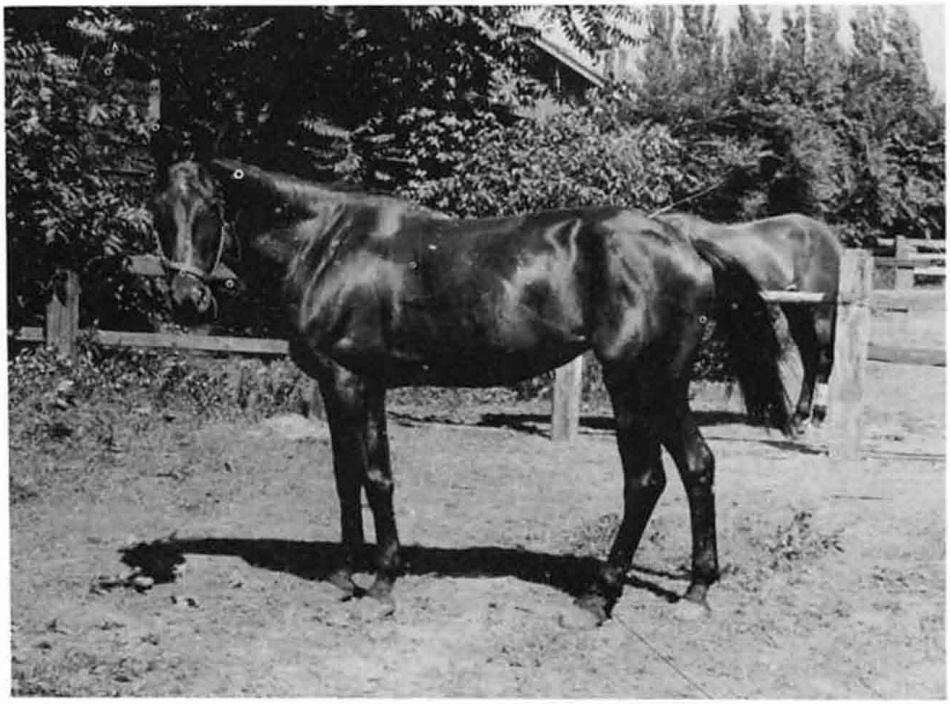
大きな耳をピンと立て、尾を風にたびかせて走つていたあの一歩一歩が北大馬術部の進歩だつたのです。北大馬術部の自馬調教の模範的土台という大役をあなたはりつぱに果してくれたのです。あなたはとうとう最後まで私達の先生だつた。

あなたの死は私達の未熟さを身をもつて示してくれた、あまりにもあからさまに

二度と再びこのような事故をおこさないことを誓うと同時になお一層努力してりつぱな北大馬術部を築いてゆくことをあなたの霊前に誓います。

北飄よどうもすみません。

11月16日



体中に力というものを感じる北飄号

青い馬

松永　由可里

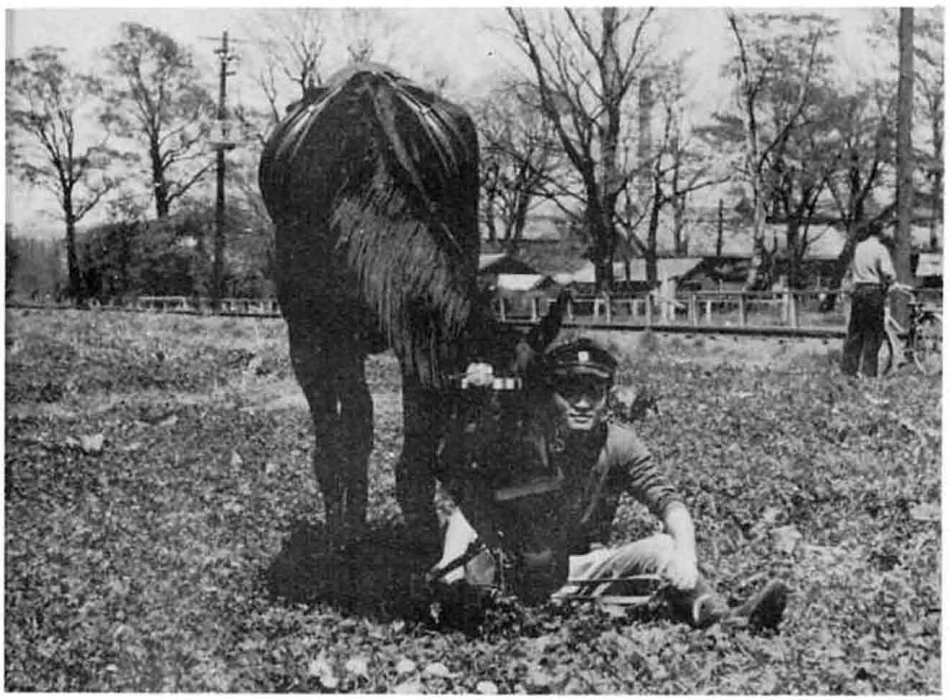
ぐんじよう色の夜色で
星が泣いていました。
月が母さんのように
やさしく光をそそいでいました。
馬は、まぶたをひらいて
なぜこんなに悲しいのだろうと
思いました。

ぐんじよう色の夜空から
雪がふつてきました。
そしてもう
夜更けでした。
馬はそつとため息をついて
頬をつたう熱いものは何だろうと
思いました。

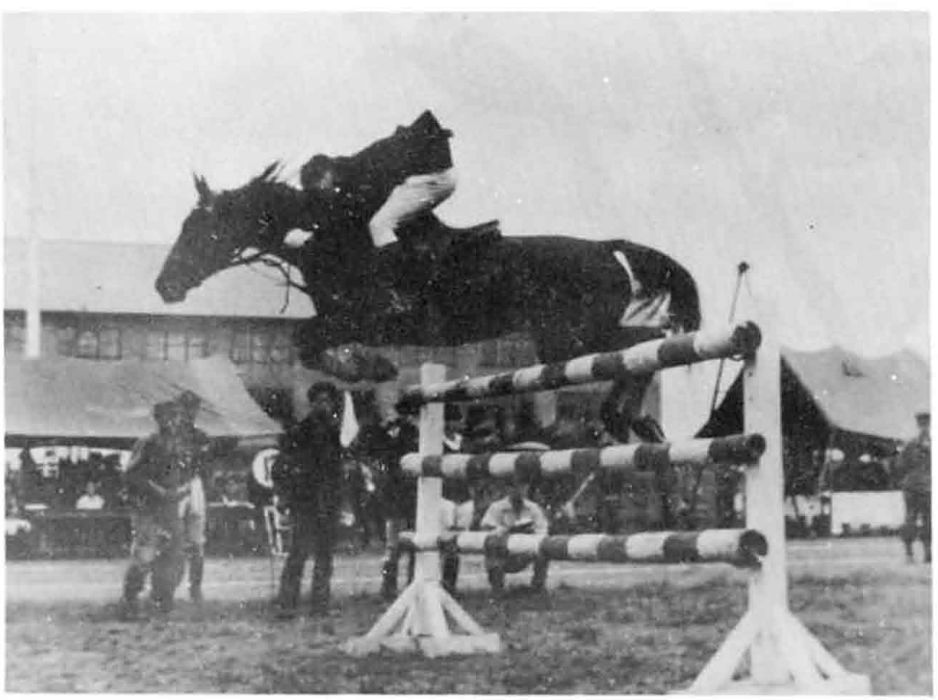
北飄のいこいの時

いつのまにか
雪がやんでいました。
馬はぶるつと身ぶるいすると
静かに目をとじてしまいました。

その夜
愛する者達は
ぐんじよう色の夜空を
高く高く舞いあがつてゆく
青い馬を見たのです。



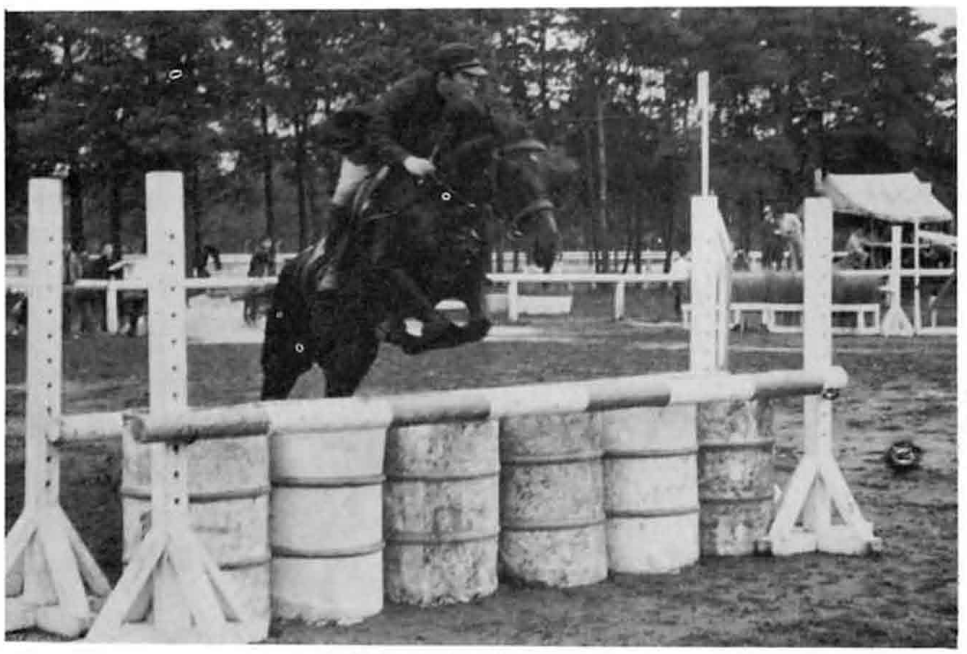
北飄号と最初の調教者
恩田先輩



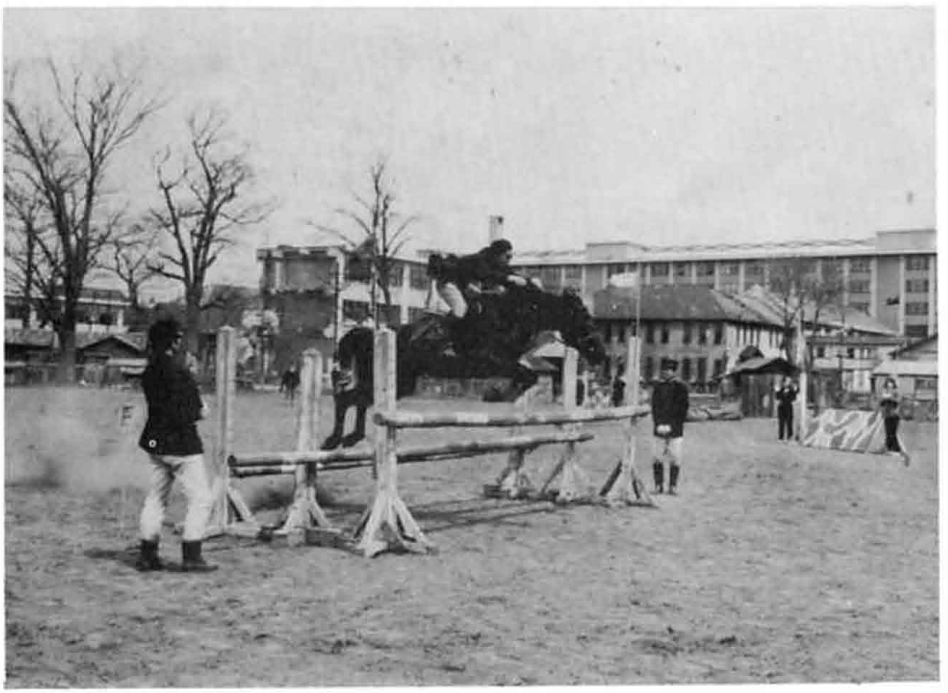
北飄号と野田先輩

野外騎乗における北飄と高野先輩

馬場を踏む北飄と近藤先輩



北飄号と田中兄

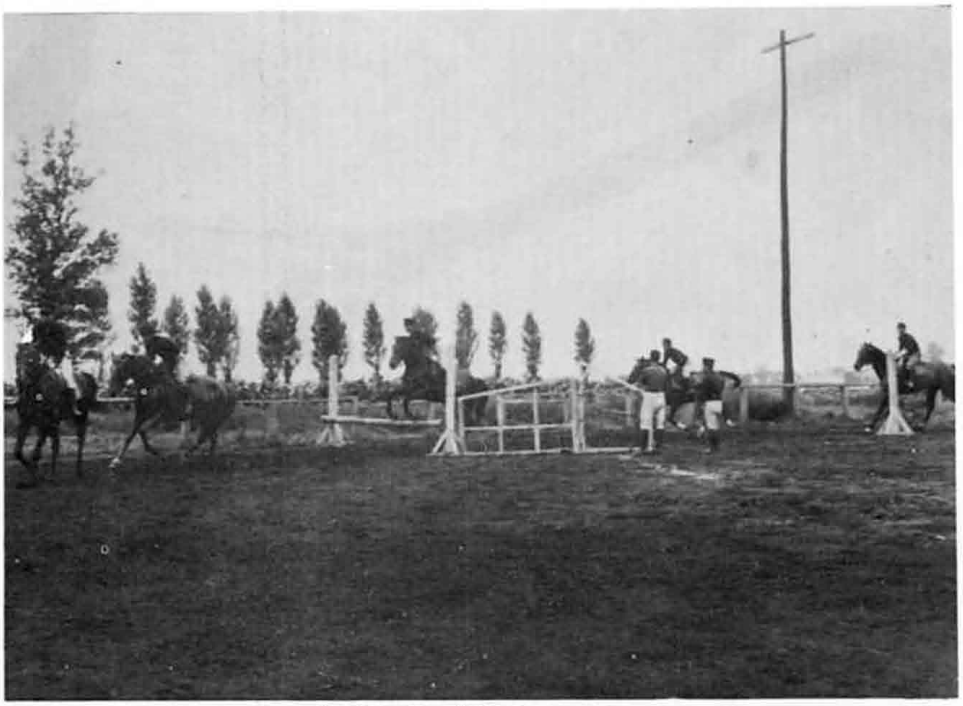


北飄号と池田兄

「ドンキー」と田中（カ）兄

道大会の複合で優勝した北飄号と鎌田先輩

ポプラ並木と北飄



一年目の夏の合宿中
部班で先頭を行く北飄号

北飄号（旧名　ウキヤマ・コーセー）

生年月日　　昭和３０年５月６日

産　　地　　静内郡静内町

父　サラ　キングライト　┌父　サラ　ダイオライト
　　└母　サラ　銀　　勝

母　中半　前　　山　┌父　重半　凱　　歌
　　└母　中半　初　　慶

昭和３６年１１月１４日		北大馬術部厩舎へ入厩す	
３８年１１月　９・１０日		第６回全日本学生自馬大会	１２位
３９年　４月１８・１９日		国体予選	
		一般自馬複合競技	２位
		〃　中障碍飛越競技	２位
		六段　飛越競技	４位
	６月　７～１０日	国　体	
		一般自馬中障碍飛越競技	６位
	１１月２２・２３日	全日本学生自馬競技大会	
４０年　８月２８・２９日		国体予選	
		一般自馬複合競技	４位
	１１月　６～　９日	全日本学生自馬競技大会	
４１年　６月１０・１１日		東日本馬術大会	
	９月１０・１１日	国体予選	
		六段飛越競技	１位
	１０月２３～２７日	国　体	
	１１月　８・　９日	自馬王決	
	１１月１２～１４日	学生自馬馬術大会	
４２年　６月１１・１２日		東日本馬術大会	
	８月　５～　８日	北日本馬術大会	
		六段飛越競技	３位
	９月　９・１０日	国体予選	
		一般自馬複合競技	１位
		〃　中障飛越競技	２位
		六段　〃	１位
	１１月１３日	左後肢脛骨複雑骨折のため薬殺される。	
		（やすらかに眠らんことを）	

北飄とのこと
調教日誌を読みかえしながら

昭和三十九年卒　恩田正臣

昭和三十六年十一月十四日、札幌競馬場より北大馬術部厩舎へ入る。部員の誰もが、自分達でアルバイトをして買つたのだと云う誇りと満足の気持を有し、ポケットにしのばせた人参やら燕麦やらを与えて可愛がつているので、人を見たら食糧をもらえると思つて首をのばしてくる。いかなる癖ももたず、人に対する警戒心もない。

この馬の調教責任者に指名されたいと、わずかのひまものがさずこの馬のそばにいて、部員の誰よりもこの馬と親しく密な関係であるように印象づけようとしたものだつた。調教を始めた頃は、常歩は直進せず、速歩は頭を高く上げる、駆歩はひつかける……など夫調教というか、悪癖というかがあつた。

十二月一日、昨日に劣らず寒い。霜で真白。草はうなだれ、地面はしばれている。指・足先が痛くなる程つめたい。右巻乗をくりかえす。上手に円周をえがけない。この運動を何度も行なつたが、目標の成果得られず、しまいには調教者のほうで根負けし泣きたい程だつた。

十二月十八日、新馬名決定す。部員総会で部員全員が応募した三〇近いものの中から、調教者である自分が提案した「北飄」が過半数を占め選ばれた。新馬であり、調教中であるからということで、一般部員の騎乗をゆるさなかつたが、練習のための頭数が不足がちだつたこともあり、調教責任者の監督下で下級生を乗せることもあつた。ある時一年生を乗せたところ、馬場外に疾走し鉄道を走り出し、馬場の北側にあつた鉄橋を渡り出し、人馬にケガをさせてしまい胸のひきしまる思いをした。

毎日、一進一退しながらも続けて乗つていると、大分良くなるものだ。そして調教はささやかな進歩にも満足して愛撫を与え、更に高度な進歩を目指すよう心がけるべきだ。

三十七年二月に入つて、大勒の銜受の調教を始めた。

速歩ではこの馬は頭を上げがちだが、大勒を強く控えてそれを抑えようとすると却つて顎を硬くして反抗する。そんな時には一度銜をはずしてします。すると支点がなくなるものだから、首を下げて銜をかもうとする。それを静かに控えて軽くあててやると軽い銜受で屈撓する。……調教者が未熟であるから、こういう方法を最初から知つていて馬に適用するのでなく、逆に練習中に馬に教えられるのである。

北飄は我々の手厚い管理にもかかわらず、注意力不足か、無茶なのか、よくケガをする馬であつた。他馬とのけりあい（たいていは負けるのだが）溝にはまる。鉄条網をひつかける。追突、交突……。いつも生傷が絶えず、獣医学部の家畜病院通いが多かつた。

歩行困難。右後肢を地面につけず、時々傷の部分をじつとみつめる。いじらしい……。

獣医の先生ときたら、まるで相手が生き物であるのを忘れているかのように扱うので、馬に同情し、心配している我々は黙つて見ていることは不可能だ……。

馬場の雪がとけ、新入部員が入つてくるころ、北飄を部班運動の先頭に位置づけた。しかし、調教馬と練習馬の兼ねあいに苦労したのもこの頃である。

一回の練習でも、自分が乗らないで幾人かがそれぞれの乗り方で乗ると、馬が全く変つてしまうということを知つた……こんなにも微妙なものだとは思わなかつた。それだけ調教の重要な段階にあるということなのだろう……。

八月に学馬連のスケジュールに従つて、川口宏一氏がコーチに来た。この時は、徹底的にキャバレッティを続け、強化練習や合宿で衝受がこわれ、障碍に対して突進癖を示すようになつていたのを矯正してくれた。入厩一年を経過しようとするころ、調教は中期に入り、人も馬も意気が合うようになつた。馬場も、障碍も野外騎乗も……総合馬を目指し目標は大きかつた。

物おじしない馬ではあるが、川へ入るのにがけからでも飛び込んで行く。…そして騎手がうつかりしていると、人を乗せたままでも川の中に寝てしまうことがある。水の好きな馬だ。

三十八年冬、雪が少なく、砂馬場のように調子よい。新しいことを要求せず、今まで教えたことを復習させ完全に覚えさせるように乗る。

この頃、志水君と二人、馬術理論をたたかわせながら、彼の北翔号といつしよに馬場馬術の調教を行なつた。北飄にとつて二年目の春がきて夏がきた。調教ははかどつた。この頃が一番幸せな時だつた。それでも北飄は時々けがをして調教を中断しなければならないことがあつた。そんな時は一日に三回も、四回も北飄とデートした。うまそうな草のあるところへつれて行き、綱を放してやつて自分は草の上に寝ころんで彼女をながめていた。たんぽぽが咲き乱れ、蝶が舞い、暖かい太陽が二人を祝福していた。北飄が恋人に思えていたので、人間の女に失恋したとしても、そちらのほうがにせの恋愛だつたように考えることさえできた。

北飄の調教責任者として卒業後も常に余頭をはなれずにあつたことは、北飄の調教が進み、優秀な競技場として、各種の競技会で栄冠をかちとつてほしいということであつた。それなのに今度北飄の訃報に接してからは、彼女のことを思い出そうとするといつも、牧草畑を連れだつて歩いたり、原始林（今は総合グランドになつてしまつた）の中を彼女の背に寝そべつて、歩くがままにまかせてうたたねをしようとした時の、木もれ陽のまぶしさなどのことばかりが浮んでくるのである。

札幌から北飄がなくなつたことを電話で知らせてきた夜、北飄の写真を眺めながら、一人でしめつぽく酒を飲んだ。その晩、半睡状態の中で北飄が昇天して行くのを見た。白い雲が下へ下へ流れ、北飄は高くいななきながらたくましく昇つて行つた。いつのまにか北飄には翼があつた。白い雲の感じの天国に、黒い天馬はおかしいなと思つたら、北飄はこちらを向いてニヤリと笑つた。そして次にはもう姿が見えなかつた。青色の北飄も天馬となつて芦毛になつたのかしら。

北飄号調教記録

昭和四十三年卒　野　田　行　文

北飄号は昭和三十年五月の生れですので今年の春で、ちようど満十歳になります。部員の理解と好意により、新馬として大切に取扱われて来ましたが、三十六年秋に入厩して以来、すでに三年半近くを経過しました。

次々新しい馬が購入される一方では、北榆、北嶺、北斗など、古き良き師の去り行く昨今、もはや新馬としての特権に、いつまでも固執することは許されぬ時期に来た感があります。

下級生の練習に供する一方、対外試合では、優秀な成績を納めなければならないのが学生馬術の宿命ですが、ともあれ馬に乗る一人々々が、馬術に対する知識を深め馬に対する理解と愛情があれば、このような問題を解決できるのではないかと期待しています。

さて、北飄号の調教は、当時三年目の恩田さんの手により始められました。初期の調教に関しては、正確な記憶はありませんが、二年目の頃から私も騎乗するようになりました。反動が大きく、脚には鈍感で、おまけに時々ひつかけられるなど、当時の私にとつてはあまり魅力のある馬ではありませんでした。

三十八年夏、札幌における道大会に注目を集めながらデビューし、恩田さんが騎乗して、馬場においては、一年半の調教の成果を披露しましたが、障害の方では多くの反省すべき問題点を残しました。

この試合後、恩田さんは、札幌に居られる岩坪氏の指導により伊方式で調教することを決心したようです。このことは、北飄の調教のみならず、その後の馬術部内部に大きな波紋を投げかけ、岩坪氏の来札は、まさに黒船の感がありました。

当時、北飄は馬術の方では速歩の横歩を行い、できれば踏歩変換までやるつもりのようでしたから、障碍における伊方式と、馬場の収縮との調整でいささか混乱状態でした。

しかしその後の学生自馬大会では、予期以上の成績をあげ、大器（？）の片鱗を見せ、将来に期待がもたれました。

三十九年恩田さんの卒業後は、そのまま私が調教を継続することになりました。結局伊式の理論をそのまま北飄に適応することは出来ませんでしたが、自然馬術の、いわゆる「無理、困難、束縛の排除」は、その後の飛越調教の指針となりました。

四月に入つてからは、まず国体の北海道地区予選が、北大の馬場で行なわれました。最初の複合の調教審査では、人馬共に入り込んで実力を十分発揮できず振いませんでしたが、障碍との合計で結局、北瓔に次いで二位となりました。六段は昨年と同様、お家芸としている畜大に完敗しました。次の中障害では北瓔、ブラントモア、碧雲、鳥華が満点で通過したので、この四頭でバラージュを行いました。その結果再び北瓔、鳥華が優勝し、北飄は、再度二位の憂目をみることになりました。

北海道地区からは五頭が派遣されるので、各種目の優勝馬は無条件に選ばれましたが、大障害には該当馬がなかつたので、代りに二種目に二位となつた北飄が選ばれ、結局北瓔、北飄、クモキ

り、鳥華、洋孝の五頭が、国体に送られることになりました。

ご承知のように北飄は狂奔癖を持つた馬で、不練れな人が乗るとよくひつかけられますが、これは入厩前の競馬の調教、騎乗に対する不信、調教の欠陥による飛越に対する恐怖感など、色々原因が考えられますが、やはり馬の生来の性質によるものではないかと思います。

馬の沈静を求めることが、終始北飄の調教及び試合時の大きな課題でした。

ひつかける馬も、その時の体勢から大別して、頭を上げて空を向くものと、首に巻き込んで突つ走るものの二種類有ると思いますが、いずれにしても、このような状態では、馬は騎手の手の内にないのに変りありません。北飄の場合は前者に属しますが、銜をはずすのを防ぎ、又障害飛越における高い頭頸を防止する為にも、弊害の最も少いマルタンガールドシャスを、三月からつけました。

一般に障害のレベルが高くなるにつれて、多くの馬は興奮して来ますが、北飄の場合も、しだいに歩度が伸びて銜に重り障害に向つて突進します。このように興奮した時、無造作に銜を控える事は、ますます馬の興奮を煽る結果となり、馬は渾身の力で騎手の拳に対抗してきます。前にも触れた北飄の前歴がこのような結果を招く一因となつたのは問違いありません。馬の心理は全く不可解で、口角にうける刺激に一種の快感を感じているのではないかという錯覚さえ感じます。

北飄を調教するに際し、当時は先ず馬との個人的親和を計り、何よりも馬の信頼を得たいと思つていましたので、このような場合も馬との葛藤を避け、馬が引つ張るだけ拳を許し、時には銜をはずして軽く頸に手を触れ、あるいは声を掛けながら沈静を待ちました。

五月からは国体を目指して本格的調教に入りましたが、そんな或る日、練習中に麻痺性筋色素尿症という病気を突発して、いささか胆を冷しました。これは文字通り筋肉の麻痺と痙攣を併い、筋色素を血中に遊離する為、筋肉の変性を起す病気で、栄養の良い為、特に炭水化物を豊含する飼料を多食する馬が、休息後労役に服する時、よく起す病気だそうです。蓄積されたグリコーゲンが運動により多量の乳酸に変化し、その為の乳酸中毒だろうと考えられていますが、明確な原因はわかつていません。この時は一週間の練習休止ですみましたが、十二月の学生自馬の時は、試合直前に発病し痛手を蒙むりました。

国体は六月七日から四日間、新潟で行われました。第一日は先ず総合の予選から始まりました。これは八十頭の出場馬を中障程度の障害で上位三十頭を選び翌日決勝を行うわけです。北飄は馬場が広い為、かなり早いスピードで走りましたが、安定した踏み切りをみせて無過失で通過し決勝に進みました。午後からの中障は、高さと経路は多少変りましたが午前とほとんど同じ障害物を使用したので、不安は有りませんでしたが、馬の方は逆に入り込んで来て、歩度の調節に手古摺り、結局第五障害のダブルで一落下し、減点四で六位に終りました。

場所が競馬場である為、昔を思い出したが、新潟に着いて以来日増しに入り込んで来て、特に競馬場の走路に出ると興奮の為、ほとんど扶助を判断できないような有様でした。この様な状態で

すから、総合の調教審査の結果は推して知るべしです。二日目午後のスチープルチエイスは、初めの方に発走した、優勝候補と目される川口氏、荒木氏などが次々に第五障害で失権してしまいました。この障害は、高さ約二米の所から水濠の中に飛び込むもので、ほとんどの馬はここ迄来ますが、その半数はこれを通過できず失権しました。単一の障害としては面白いものですが、コース全体の難度があまりに片寄り過ぎ、又主催県の策意が少々露骨に表われており、感心できませんでした。北飄もこれを通過できませんでした。　三日目の六段では、突進する馬を抑えきれず、三段目、四段目としだいに体が伸びて踏み切りが近づき過ぎ、遂に最後の六段目を落下してしまいました。

この試合を全般的に振り返つてみると、多くの失敗は、馬の沈静が欠けていたことに原因したと思われます。この点は三ケ月後の九月に旭川で開かれた道大会において著しい進歩をみせました。

障害に向つて突進する所は相変らずですが、しかし以前のように馬のペースで走るのではなく、この試合では、完全に騎手の手の内に入つた運動が出来たと思つています。この為に却つて馬の運動を抑制し過ぎてか、少し落下が目立ち、六段で三位になつた程度で戦績の方は振いませんでしたが、鎌田先輩や岩坪氏の指導を得るなど、十分に収獲が有りました。

さてここで、最後の試合である学生自馬について報告します。この試合は毎年、国体、全日本と同時に行われていますが、今年はオリンピックの後、馬事公苑で行われました。

北飄はこの時、前にも触れたように後駆の麻痺を起し、歩行不能となつて道の真中で立往生するなど、一時は出場を諦めましたが、その後馬事公苑の千田先輩に治療していただくなどして、しだいに回服し、試合当日にはほとんど異常が見られなくなりました。　最初の調教審査は、昨年と同じ新国際規定で行われ、得点は七四・五だつたと思います。落ち着いた、かなり正確な馬場を踏みましたが、最後の停止点や駈歩の手前を間違えるなど、つまらないミスをしました。　野外騎乗は、全長五Km、分速五百米の駈歩が要求され、制限タイム十分に一分までの増点二十五が認められました。コースは既設の固定障害の外に新設のものを含め三十六個を配置したものですが、狭い所で五Kmも走るのですから、経路は迷宮にでも入るがごとく、複雑を極め、馬の能力テストの前に先ず騎手の知能テストをされるようなものでした。畜大などは三頭中二頭まで経路違反をするなど、迷宮に踏み迷つて失権する馬が相当数いました。北飄は回服したとはいえ、まだ十分の駈歩に耐え得るかどうか少し心配でしたが、十四障害までは全く不安のない飛越を続け、内心ニヤリとしていたところ、十五障害に至つて突然夢破られ、三度拒止をされて、遂にこれを通過することが出来ませんでした。この障害は深さ一米、幅一・五米の乾濠の上に、電柱を高さ一・二米程度の高さに三段山形に築いた固定障害で、飛越に失敗すれば只では済みそうにないもので、馬も多分ギョッとしたことでしよう。試合の数日後再びこの障害に向けてみましたが、四回目にやつと飛越することができました。結局これは国体の時と同様、固定障害に対する馴致不足が、一番大きな敗北の原因だつたと思います。今後の責任者はこの点について努力されることを期待しています。

（昭和三九年度部報より転載）

ずいそう

昭和四二年卒　近藤　喜十郎

十二月の寒い朝だつたと思う。新聞を見ているとふと目に入つてきた馬の写真があつた。「どうもあの顔は北翔に似ているな？」と思つて記事を読んでみるとやはり北翔だつた。なんでも馬術部が映画のエキストラの為に旭川・層雲峡まで出張したとか。寒中での遠路はるばるの資金カセぎは大変だなと同情し、これ程までに馬を酷使して運営している現役諸兄の奮闘に頭が下がる思いがした。

現在の俺の生活は全く馬とは無縁で、強いて求めるならば洋酒のホワイト・ホースぐらいだろう。時折、市内の大学に顔を出し、今迄会つたこともない馬達に非常な愛着をもつて人参をやつて「乗りたい、乗りたい」と内心思つている。在学時代には馬に乗る事を普通の事と考え、卒業したらすぐ馬でも買つてメキシコでも狙うか……と安直に考えていた。しかし世間はホットケーキの密の様に甘くはなく、自馬を持つには相当の覚悟が必要な事を知らされた。耐え難きを耐え、忍び難きを忍んでも、我が二世が買う馬と同年令ぐらいになつた時でも、自分の食事を犠牲にしてやつと実現するぐらいだろう。

しかし馬と北大の事は一日たりとて忘れた事はないといつても過言ではない。馬のシーズン中は毎日の新聞から北大の二字を捜し出そうと努力した。残念乍ら、昨シーズンは見つける事が出来なかつたが、来シーズンは北飄を先頭に花々しく載る事だろうと楽しみにしていた。

そんな矢先に北飄号の死を知らされた事は大きな衝撃だつた。相手は生き物だから、いつかは別れなければならない日がやつてくると覚悟はしていたが、こんなに早く、しかも突然に来るとは夢にも思わなかつた。

北飄という馬はその天性の理想的というべき馬格と、人なつこい性格から、あらゆる人に愛され、かわいがられていたが、俺も彼女の魅力のとりこになつた一人だつた。学生時代の思い出の中で一番多く共にあるのが彼女であつた。俺にとつて馬術の快感を教えてくれ、無二の醍醐味を教えてくれたのも彼女であつた。今こうして北飄と俺との関係を振り返つて分析してみると、先ず浮んでくるのが恩田さんの騎乗姿であり、それを憧れのまなざしで見ている新入部員の俺である。そしてもう一つは北国の端とは云え、炎熱の畜産大馬場での高野君の百六十への挑戦の姿である。そして、最後の学年となつた昨年の思い出の数々。

凡ゆる冬の音を降りしきる粉雪が消してしまう北都の朝焼の中を、只、北飄号の大きな蹄から出す音が大学構内に響き渡り、俺の息と北飄の息が共に、ある時は激しく、ある時は穏やかにあたかも対話する様に重なり合つて白く流れる時、俺は幸福感と充実感で自分の体が満ち満ちている事を知つた。

愛馬をなくする事は悲しい事だ。在学時代に北嶺、北楡、北駒と自分の青春を賭けた馬とすべて別れなければならなかつた俺にとつては北飄の死は最後の絆も切れた気がする。しかし何の絆だろうか。過去に対する絆だろうか。馬術に対する絆だろうか。俺

の青春の絆だろうか。
俺は北飄の死を過去への郷愁の絆を切つた斧としよう。俺も馬術部の部員諸君も昨日に生きているのではない。明日に生きているのだ。部員諸君は現在の馬を北飄以上な馬にしてくれたまえ。俺は自分の仕事に精を出し、馬に乗れる様な生活が出来る様がんばる。
今度再会する時は互に全力を出して励んでいる心で会いましょう。部員諸兄の健闘を祈ります。

K・I・へ

医学部四年目　田中　倬

S42・11・14
ショック、北　号の死
練習中左後肢を他の馬に蹴られ骨折、全治不可能なため（人間の役に立たないため）13日午後10時28分、薬殺
場所、堆肥置場、事もあろうにうず高く積まれた堆肥の上で何故死んだか話せば複雑になるからやめるが、とに角堆肥の上で北飄は死んだ。
夕方、空には明るい月が出ていたのに、いつの間にか空は暗黒となり、脈が止まるや否や真白い雪がフワリフワリと膝黒の北飄の上に舞い落ちた。ろうそく、線香が立てられた。花が置かれた何人かの部員が泣いた。僕には涙は湧かなかつた。
昨晩はお通夜、部員に代る代る見つめられながら毛布にくるまり夜を過した。北飄は動かず話さず静かに横わつていた。時折、雪が散らついた。
死とはあつけなく静かなもの、その回りで人間共が右往左往する。バカめ……
厩舎へ行く、北飄のいない厩舎は寂しい。
S42・11・16
月曜の晩から今日まで三日三晩部員に見守られ、本日北飄号埋葬、これで完全にいなくなつてしまつた。
今晩は飲むことにしよう、思いつきり北飄を懐しもう。酔いつぶれ、そして北飄とはおさらばだ。
偉大な北飄、愛すべき北飄、かわいそうなやつ。
誰かがこんな詩を作つていた、詩だか何だか知らないが
許せ、アオ
ペガサスとなり羽ばたつていつた。
眠れ心静かに、
この次、生れ来るならば海のクジラになつて来い。
・・・・・・・・・・・・
クジラが何故いいのだとそいつに聞いたら、クジラは誰にも干渉されず自分が思うように、思うところに生きられるからだと言う。
このやりきれない気持ち、今晩は飲むゾー！
追・北飄を育てられた諸先輩方々にお詫び致します。

四年間

四年目　池田統洋

私が彼女（北飆号）に会つたのは入学した年、三九年の春でした。とても素直に感じ何か彼女一人が別の次元のものに感じたものでした。

その上、一年生の時は夏の合宿に於ても騎乗させてもらえず、ただ、おさわりつまり手入れのみでした。チビに関しても、最初この小馬かわいいですねと言つた時、それは一人前の馬だよなどといわれたりしたものです。一年生の時はこの二頭がお気に入りでしたが、それぞれ彼女らに対するお気に入りの要素は違つていました。

小樽から通学しているものでも入部が許可になつたのは三九年度からでしたので、その点とても幸福だつたと思います。入部の動機たるものはスポーツのあこがれと西部劇の影響でした。馬術部に決める際、亡き姉がすすめてくれたのも決心するに十分なる要素となつたのです。

我々三九年度生は一年生の時、本当にコンパが好きで一ケ月に一度ぐらいの割合でやつていて、当時の三年目に非常に迷惑をかけたものでした。通学している期間よく札幌に泊まり、それも三年目の人が螢光燈のあかりのもとで勉学にはげんでいるなかを、こちらはいい気持でグースカピーで朝は朝で逆に遅く起き、一緒に練習に出たものでした。

部にしだいになれるうちに自分がスポーツクラブに対していだいていたイメージと異なることに気がつきはじめ、それは本質たるものは変らねど表面に出てくる部員の言動、つながりが予期していたものと違つていたのです。それがとてもこころよい感じとして残つています。夏の合宿（一年目の時）のさいのスケジュールにしてもとくにきついと思わず、当然の如くとうけとつていましたが、打上コンパの時、休憩時間を設けるのを忘れていたと述べられた時はじめて知りましたが、別段気になる程でもありませんでした。

冬休みに入つてから十二月二八日に対東北戦がありセニア戦とジュニア戦の編　の時ジュニア戦に人間が足りず一年目の小生が参加させてもらうことになり旅費は姉に都合つけてもらい、全員で津軽海峡を渡り、船中で作戦を聞き試合に参加しましたが、結果は両戦とも北大の負けであつたが、小生はそれよりもいままで二個以上連続に飛越したことがなかつたのにもかかわらず、試合の時一落でゴールしたからうれしいなんてものではなかつた程の気持でした。

また北飆にはよく当時四年目の野田さんが騎乗するさいに乗せて下さいと言つて一生懸命手入れをして、馬場の中に路をつくつて輪乗りで〇・八～一メートルの高さの単一をよく通過させてもらつたものです。又部に初めてスキー大会を我々の手でつくり冬の一日を楽しく過ごしたこともありました。（その後続いて行なわれている）話は前後するが、一年目の夏の道大会のさい一年目が全員旭川に行きましたが、それまで試合を見たことがなかつたし、また大会に出る馬は、当然満点馬ばかりだと思つていたのが

完全に残酷にも期待をうらぎられ、ひどいものだナアーと思つたりしたこともある。

一年目の冬の強化練習のときは恵迪寮に泊まり、毎朝部室まで大きな声で歌（当時ウナセラデイ東京がはやつていた）をうたいながら参加したが、毎日吹雪でヤツケも着ず寒さにうちふるえながら練習しました。二年目の時は何となく部の色々な物事にすつかりなじみ何かしらすんなりとすごしてきた感じがする。当時は馬がよくケガをしたりして満足に頭数がそろわず、毎日毎日障碍姿勢のみで通過することもほとんどなく、北　、北翔、北　、北晨、北彗等には無に近いほど騎乗したことはなく、今はいない朝清、北楊にばかり騎乗したものです。帯広での道大会で初めて六キロメートルの野外騎乗というものを見た時は、やはりびつくりしたものです。その時北　は体中傷だらけになり、悲しそうな容姿にさえ感じました。やはり総合に於てはふだんより野外騎乗の要点を十分に考慮しながら、特にスタミナと走行速度、順致等に重点を置くことが望ましいと思う。

この大会でのハイライトは小栗兄の騎乗する北晨号の出来具合である。大方の予想以上（おそらく本人もそうだつたと思うが）によい結果をもたらし、当時のイタリー方式の正当性を持ち得たに違いないと思う。しかし方式の採用がこの結果をもたらしめた要素として、第一にあげられるべきかもしれぬが、同時に小栗兄の調教方向及び技術によるところの要素も見のがせないものであると思う。

また夏休み中は　例の遠征に出かけたが、その際感じたことは馬術理論の未熟さであり、理論はいくら知つていても過ぎることはないと思つた。ただ理論のみで、先走りしないことが寛容であると思う。またこの年に先輩諸氏がつくつた全日本招待女子戦が学馬連主催の大会となり、八木姉が大いに健闘したことが残つている。またスキー大会は八木兄の友の牧場にて行なつたがその牧場は合宿や野外騎乗に利用するに適した点をもつていると思われるので、今後、機会をつくつて利用させてもらうのも一つの手だと思う。

春休みは毎日毎日雪割作業があり昨年や今年と違つてブル等の機械力を使用しなかつたので、ある意味での体力づくりになつたと思う。

三年目の時はまず四月五十嵐、高倉と三人で学馬連の講習会に参加したことであり、その間他の学校の連中と交わることが出来その学校の方向・指導方法等を知り得ることが出来たこと、またいわゆる名の知れている人達の騎乗ぶり等を見学出来たことが、参加して良かつた点である。それらをその後どう生かしたかは具体的にはあらわれていないかもしれないが。講習会中新入部員の人数を知らされましたが、とにかく驚いたのは女子が多く入部したことで、三人顔を見合せて思わず笑つてしまいましたが、何故に笑つたかは別に意味はなくただ笑つてしまつたというのが本音です。同時にこれからの指導方法等に頭を悩ましたものです（その後も続くが）。やはり三年目ともなると、己れの立場等を考えねばならぬ時であり、部に於ける考え方もかためていかねばならぬ時である。この時期は学生部移管、赤字解消等の問題が多く山積みされ部活動の大きな負担となつたことは否定できない。また部の方針、傾向を統一しなければならない時でもあつた。前述の

点が役員を引き継いだ時の問題点であり、ある点は役目期間中先輩や関係諸兄の援助、努力にて解決されたものもある。しかし問題点にひそんでいる要素は短期間で解決できぬことが多くあり、それ故役員引継ぎのさい継層を生じぬ様に行い、それぞれの要素を引き継いだ者も十分認識して行動していかなければならないと思う。現在、部は自馬導入後の一つの過渡期にあり、部の運営、方向等を確立させていかなければならぬ時期であるが故に、部の歴史、流れを適格につかみ、部の成り立つている要素を考慮しつつ言動せねばならぬと考える。

三年目の時は一応サブとして位置づけられてはいたが、本格的騎乗は十二月からであり、騎乗して慣れるという時間が少々不足であつたと思う。特に北飆に関してはその点問題であつたと思う。また北飆に於ては結果的にみて馬場運動は大勒、障碍は水勒という使いわけをした方がよかつたと思われるし、内方脚、外方脚、半減脚、ハミ受け具合等に留意した運動を多く取り入れるべきだつたと思われる。大勒も目的に応じて十分注意しつつ使用されるべきである。また拍車も馬の状態によつて、種々の拍車を使用することも考慮した方が良いと思う。鞭の使用も十分に留意したければならぬと思う。人間は運動中脳の働きがにぶるが、特に試合のさいは冷静さ、思考力、集中性というものが要求される故、普段から練習中にこれらのことに留意しつつ考えつつ騎乗すべきと思う。

北飆に於る練習の要点を

一、右左巻乗（常歩・速歩・駈歩）

二、三歩毎の停止・発進（後退も含む）

三、内方姿勢（斜横歩・横歩・肩を内へ）

四、旋回（前肢・後肢）

五、歩度の変換

六、障碍（順致）

七、肺心運動

のごとくかかげ、一・二・三に関しては左を特に注意して同時に額の譲りにも留意する。五に関しては脚とハミのつながり、六に関しては飛越回数を二十位にし、当面は輪乗りで飛越後、必ず停止、七に関しては外にて坂道を歩くというようにやつていくこととしたが、果してどこまでやれたかは疑問である。

また東日本大会では左後肢が不手際で腫らし、試合は痛み止めを注射してのぞみ、またその際、試合にのぞむ体勢、もつていき方、今までの練習について考えさせられまた反省するところが多かつた。その後六月三十日人馬転により、左肩にヘマトームを生じせしめ、一ケ月以上馬休の状態となり、他の部員に迷惑をかけてしまい、本当に申し訳けないことと思つています。

自分の望みは北飆にて総合をやることでしたが、結局出来ずじまい、自分自身としても一番残念です。秋には不慮の事故により北飆を失つたことは存部生に対しても、またこれまで北飆に乗られた諸先輩また後援会の方々に対しても、ただただ頭を下げるのみです。北飆についての性格等は述べるまでもなく、御存じのことと思います。また北飆の力量を十分に発揮させ得なかつたことも、一時期、責任者としてあつた自分がなさけなく、また諸先輩在部生に対して申し訳なく思つています。これから部に必要なる馬は北飆のような馬であると思われる。

馬は北飄のような馬であると思われる。
北飄との責任者としての間の一喜一憂はこれからも、きつと何かにつけ想い起されると思う。また北飄の墓が馬場の横にあることで毎月の命日には線香等をいままで同様、これからもあげて冥福を祈りたい。これから部室へ顔を出したさい、北飄が居ないことは寂しさを誘引するに十分でありすぎる。
今後二度とこの様な事が起らぬよう、普段からの馬体管理と注意を望みたい。

後半になつて前後が一致せず、まとまりのない文章となりましたが、最後に現在の過渡を在部生もとより、後援会の方々と一丸となつて乗りきらんことを！

北　飄　号

三年目　田　中　　力

まず、北海道大学の看板馬を練習中の不注意から死に追いやつてしまつたことを、心からお詫び致します。
北飄は十一月十一日土曜日の朝の練習中、他馬に左右後肢を蹴られ、殊に左後肢は着地不能。馬場から厩舎までトラックで運んだ始末。あいにく獣医には外科教授、助教授とも不在。夕刻加藤先輩と、小池助教授を迎えに行つたが、先生の話では心配なさそうだとのこと。月曜日の診察を待つことにする。患部を消毒、二十四時間ごとにペニシリン注射をする。その間ひたすら、アオが骨折でなければ良いと思い続けていた。治療にはどんなに永くかかつてもいいから、骨折だけはしてくれるな……と。骨折でないと決つたら、おしることを部員におどろう……。
日曜日夕方、彼女の右後肢はひどい立ち張れ。わらでこすつたが効果はほとんどない。月曜日朝、立ち張れいよいよひどい。わらでこするが全く無駄だ。馬房の中に枠馬をつくることを考える。十時頃、小池先生往診。一見してから「骨折ではないようだ」と言われたので、文字通り飛び上がらんばかりだつたが、先生は、もう一度ていねいに見て、「骨折、しかも完全に骨がずれている。」という診断をくだした。昼頃、レントゲンで確診のため、家畜病院へ連れて行くべくトラックに積むとき、転倒。もう彼女はどんなに励ましにも、おどしにも、立ち上がる気力さえなくなつていた。考えてみれば、五十時間も三本足で立つていたのだ。むしろ、よく我慢をしたとほめてやるべきだつた。
午後四時、更に小池先生来診。半沢部長、学内の先輩がたの立ち会いで、骨折、再起不能と断定。抱水クロラール静脈注射。飄は全身麻酔に入る。午後十時頃、先輩、部員の見守る中で、彼女は静かに息をひきとつた。ちようどそのとき、雪が降り出し、部員の持ちよつた花も線香もローソクも、ちつとも大袈裟なものとは見えず、むしろ、彼女はいなくなつたのではなく、どこか空高くへ、出発したのではないかとさえ思えた。
北飄は十月十六日昼近く、馬場のすぐ北側に手厚く葬られました。その間、瞬時も欠かさず、部員が交代で遺体を守りつづけ、東京遠征に行つた部員が帰札するのを待つた。その日は三浦先輩

の弔辞にある如く、「秋晴れがお前の死にはふさわしい。」であつた。墓には南無馬頭観世音為北飄号供養塔（愛称アオ）と記されたソトウバが立てられた。先代の北慓号が事故のため死んだのが十一月十五日だつたそうな。

私が北飄にほれたのはいつごろだつたかわからないが、入部して最初に印象に残つたのは北飄だつた。毛の生え換りのころ、彼女の尻に「北びよう」と抜毛のサインがあつた。裸馬に乗つたのも最初。散歩に連れ出し、小さなみぞに春田と二人で板をわたして橋をわたしてやつたら、彼女はその橋を飛び越して、板には全然さわらないで、我々をがつかりさせるやら驚かすやらだつた。今思えば笑い話である。

一年目の終りに早くも彼女に魅せられ、二年目の夏には彼女について小栗さんと話をして、良い点、悪い点について注意を受けている。そして小生の騎乗日誌にも、「前々から乗りたい乗りたいと思つていた馬に乗れた…。」という文がいくつも見つかつている。二月四日に北飄について、三年目四月に池田兄のサブとなつた。五月、対酪農戦で池田兄ゴール。私は小障に出てひつかけられ途中で棄権。六月の東日本大会は振わず、そのときのフレグモーネ性の炎症がたたつて、六月いつぱい使えず、七月には練習中に障碍を転倒し、ヘマトーム（血腫）をつくり、手術をして、このため一カ月近くを費やした。八月の北日本大会には、六段に出場。三位となり賞金千円也を獲得したが、帰りの貨車積みのときの事故で八月末まで使えなかつた。八月末、鎌田牧場へ行き、来たるべき道大のため鎌田先輩の調教を仰ぐこととなり、田中倬さんが同行。私も八月末におつかけ鎌田牧場へ。騎乗日誌から、九月一日、鎌田牧場から馬場まで速歩・駈歩を入れて三〇分以上かかる。鎌田氏、北飄に騎乗。大勒使用。半巻から肩を内へ、腰を内へ、横歩を左右二回づつ。常歩・速歩・駈歩で区別をつける。更に伸暢速歩をやるか、脚を使うと頭を上げる。うまくいつたとき、すばらしい伸暢速歩をする。完全な飛節の屈撓をしているように思えた。障碍、大勒のまま速歩で八〇cmぐらいのを二〇個ぐらい。あいかわらずだが、かなり口が軟らかくなつたようだ。とにかく、九月九日・十日の道大では、鎌田先輩の乗る北飄は、複合、六段で優勝をなしとげ、国体行きは当然だつたが、氏の都合でとりやめになつてしまつた。

その後、小生が乗り、九月二十三日チーフとなり、九月二十四日札幌市民大会を迎えた。今にして思えば、彼女の最後の競技会であつた。小障碍回数飛越（五・六個の小障の経路を時間内で過失の出るまで飛ぶ競技）に、私と橋口君が出場。私が一位、競場場の馬が二・三位、橋口君が四位でした。余勢を駈つて、バルクール・ド・シヤスに出たが、失権。それでもかなりの成果があつた。というのは、終始馬が落ちついていたからだつた。またその時の反省に「とにかく推進。それ以外に解決する道はない。」となつている。

十月十一日、競内記録会。結果はかんばしくなかつたが、来年の六月には、ものに出来ると思つていたやさき、十一月十一日の事故となつた次第です。先輩、部員には、ただただ申し訳なく、殊に、鎌田さん、恩田さん、野田さん、近藤さん、高野さんには、殊の外失望されたと思います。恩田さん、野田さん、高野さんには、この面を借りて謝罪の意を表します。我々については、当時

よりしばらくは失望の念が強く、「もし北飄がいてくれたら。」とよく言われ、言いもしましたが、年が明けて新しいスタッフで力いっぱい邁進し、勝利の栄光のしるしを北飄の霊前に供えたいと思つています。

永遠の名馬北飄号に送る歌

三年目　田中　力

寒空にいとしき青は翼生え
ペガサスとなり軽やかにとび去りにけり
我等のもとを
なきがらはたとえ消え去り亡ぶとも
君がやさしきその瞳
我等が胸に消えやらぬ
永遠の記憶に残らんや
君がわかれのその時に
おりしも降りし白雪は
短かき命の恨みをば悲しむ天の涙かと
思いし我等が心には只々辛き別れなり
青よ、あなたはあまりにも
偉大さに我等には、分に過ぎたる馬だつた
青よこの次世に出しは太洋の鯨になつて来い
思うがままに君が身の
偉大なるをばためされん
我等は誓う、霊前に
きつと供えん、君がため
勝利に輝く栄光を
青よ、眠れ安らかに
青よ、眠れ心静かに

馬

そよ風と競争したんだつて？
ポプラが笑つていたよ。
大きな耳をピンとたて
白い雲をみつめてた。
タンポポをむしやむしやたべちやうなんて、
せつかく首かざりにしてあげたのに。
ほつぺたをすりよせたら
やさしく、ほほずりしてくれた。
そんなお前が
夜のお星様になつたなんて
誰がさびしくないもんか。

消防，警察，鉄道，遞信製帽・釦・階級章
優勝カップ・楯・バッチ・バックル各種
ネームプレート・ペナント・各種優勝旗
腕章・花及モール・徽章・服装品類一式

株式会社
札幌メダル商会

本社　札幌市南4条西3丁目（ススキノ十字街）
電　話　大代表　(0122) 22—8141番
営業所　札幌市南8条西4丁目
電　話　(0122)・51—0984番

太田蹄鉄店

札幌市菊水北十二
TEL（八一）一〇八五一

N17・W5
(73)6497

珈琲の店 アロア

馬具・鞄
製造販売修理

中野馬具店

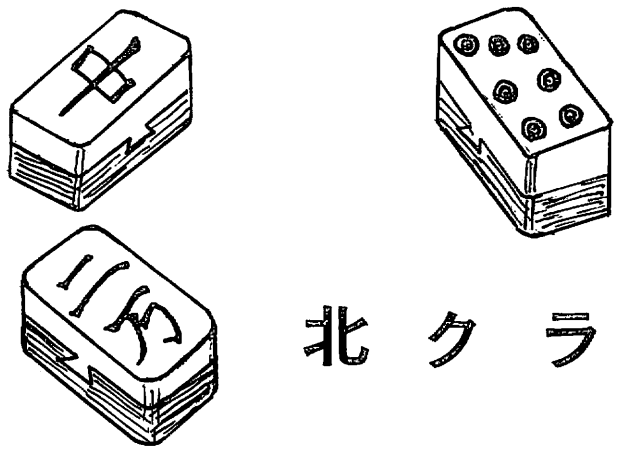
札幌市北13条東1丁目　石狩通
TEL (3)—7876

医薬品卸業

ホシ伊藤(株)

本社　札幌市南八条西十四丁目
TEL　大代表 ⑤⑥—六一一一
支店　帯広・釧路・北見・函館
旭川・滝川

みんなで行こう



北クラブ

北海道大学馬術部名簿

歴代部長

氏名		住所	電話	勤務先
永井　一夫	初代部長	札幌市南２条西１２丁目	21－2435	北大名誉教授
高松　正信	第二代部長	（東京ＯＢ）		
黒沢　亮助	第三代部長	札幌市北１条西２２丁目	61－1057	江別市西野幌酪農学園大学教授北大名誉教授
太秦　康光	第四代部長	函館市湯川町２の８		函館高専校長
松本　久善	第五代部長	物　故		
半沢　道郎	現部長	札幌市北６条西１２丁目	22－2268	北大農学部教授

特別後援会員

氏名	住所	電話	勤務先	電話
野間口英喜	東京都杉並区水福町３３５	321－7617	日航ホテル社長 川崎日航ホテル社長	571－4911 川崎4－5941
染谷　五郎	札幌市豊平３条４丁目	81－8456	染谷商会社長	81－0623
滝沢　政雄	旭川市パルプ町国策パルプ第一クラブ内		日本造材社長	
原島　つる	札幌市北２条西２７丁目	62－1451	原島洋装院々長	
庄内　貞夫	〃　白石中央５３の３	86－2504	歯科医	
武田　忠幸	〃　南６条西２０丁目	56－3286	北都ハイヤー北都バス社長 道会議員	71－7214 73－4321
山本　智	〃　北１０条東６丁目国鉄アパート213の401	72－5094	札鉄公安室機動隊公安主任	71－1111 内 629
小野　忠	〃　北１８条西５丁目	72－1526	北大モータース社長	
鎌田　鉄穂	〃　北２１条西２丁目	71－1871		
今井　正			東京都千代田区神田鍛冶町3の5の1管工事支店	
布浦　敏一	〃　新琴似町４４６の６	73－4692	札鉄　札幌用品庫	71－1034
富樫　英治	〃　北３条西１６丁目	62－3840		
阿部　広道	〃　麻生町８０１	71－9347	平岸炭礦ＫＫ保安部長	71－4211
佐合　義弘			札幌市北７条西１８丁目せいきょうマーケット（同好会幹事）	62－3191
稲垣　新一	〃　南５条西２６丁目	56－1781	札幌乗馬クラブ	

高橋留次郎	札幌市北１４条西１９丁目札幌競馬場内	3－5860	札幌競馬場	
加藤　和男	東京都大田区南馬込６丁目２９－１			
田中　昭志	札幌市北８条西９丁目	23－5860	札鉄	
岡部　尹大	〃　琴似町宮の森７７３橋場方		北大理学部大学院	71－2111 内 2775

後援会員（卒業生）

氏　名	卒業年度	住　所	電　話	勤　務　先	電　話
中野友二郎	昭４　農農	（東京ＯＢ会）			
平山　常介	４　工機	（　〃　）			
中谷　勝紀	５　工機	（　〃　）			
間　克市	６　農畜	（　〃　）			
岩垣　駛夫	６　農農	（　〃　）			
河崎　秋三	６　農畜	（　〃　）			
藤居金太郎	７　農化	ブラジル・サンパウロ在住		漁業	
永松　四郎	７　農畜	（東京ＯＢ会）			
半沢　道郎	８　理化	札幌市北６条西１２丁目	22－2268	北大農学部教授（現部長）	71－2111 内 2512
武田　朝男	８　農畜	（東京ＯＢ会）			
東條　基文	９　農農	（　〃　）			
（７主）田畑　武夫	１０　医	札幌市南５条西２丁目		田畑産婦人科病院長	
久葉　昇	１０　農畜	兵庫県多紀郡城篠山町郡家８７５の１		神戸大学農学部教授	
植村　勘一	１０　農畜	（東京ＯＢ会）			
（８主）本田　桓康	１０　工機	（　〃　）			
加藤　英夫	１１　医	札幌市平岸２条３丁目１６６	82－0266	朝日生命札幌支社	24－9231
高杉　直幹	１１　理化	〃　北７条西１３丁目	24－3720	北星大教授	
（９主）脇田代子郎	１１　農化	（東京ＯＢ会）			
（１０主）大迫　明徳	１１　理化	（　〃　）			
吉見　一郎	１１　農経	（　〃　）			
渋谷　周平	１１　農畜	（　〃　）			

森山　武雄	12	医	青森県南津軽郡浪岡町		国立岩木療養所所長	
滋賀　秀明	12	医	（東京ＯＢ会）			
（11主）						
前野　正久	12	農畜	（　〃　）			
小村　達夫	13	農生	岡山県吉備郡足守町上足守８６１		岡山大学助教授（理学部長）	
高井　久芳	13	農畜	札幌市北１条西１７丁目		道庁農務部改良課	
前川　静彌	13	理化	室蘭市新富町１の６番１４号社宅番外１４号		日本製鋼室蘭製作所研究所副所長	室蘭2−9211 内 305
山下　正亮	13	農畜	札幌市白石町本通８１８の１３５		酪農学園大教授	
（12主）						
石井　昌長	13	農化	千葉県松戸市稔台７００−２１	(0473) 62−9785	アルコール海運倉庫ＫＫ	
小笠原義顕	13	工電	（東京ＯＢ会）			
桶本　勝登	13	農経	（　〃　）			
松平　悌	13	農農	（　〃　）			
黒沢　良雄	13	農経	（　〃　）			
小田　昇	14	農畜	（　〃　）			
池内　武夫	14	農畜	（　〃　）			
（13主）						
中屋　敦司	15	工鉱	（　〃　）			
西村　雅吉	15	理化	函館市港町		北大水産学部教授	2−0311
（14主）						
木谷清喜貞	15	農実	金沢市古寺町１２		瓦土建（自営）	
石井　和彦	16	農畜	鳥取市湯所町１の３０７		鳥取大農学部助教授	
（15主）						
河原　清作	16	工土	小樽市忍路郡塩谷村		自営	
熊沢　洸		農実	十勝国河東郡士幌町士幌		士幌農協	
関　義人		医	秋田県湯沢市字西松沢３９２		関内科小児科医院	3200 3377
高木　史郎		工鉱	茨城県東茨城町駒渡１０８３駒		県立水戸工業高校	
中曾根　賢		農実	室蘭市胆振支庁		胆振支庁産業課長	
林　健爾		農実	札幌市琴似町２４軒９５	22−2286	北海道生産農業協同組合連合会生産部次長	
半沢　宏		工機	〃　北６条西１２丁目	22−2286	北大工学部教授	
伊関　悦郎		工鉱	函館市宮前町２１３		函館水産高校	
門池　正夫		農実	名古屋市千種区丸山町３−２４		旭化学工業ＫＫ社長	
秋吉　照忠		農林	札幌市真駒内曙町１−１−１	58−0415	北海道合板工業組合	24−5845

福光　幸彦	17	医	札幌市南7条西4丁目	23−1843	福光延寺堂院小児科	
岡田　光夫		工木	〃　南7条西22丁目	23−3750	札幌市役所土木部長	(代) 25−3211
(16主) 石川　愼		農畜	〃　北18条西8丁目		北大獣医学部教授	(代) 71−2111
白取　善三	17	農実	弘前市大字薬師堂熊本19の2		大成軽ブロックKK社長	
小林　五郎		工電	神奈川県大磯町東町2の64		沖電気工業特殊機器開発部次長	452−4111
山根　乙彦		農畜	鳥取市湯所町2の422		鳥取大農学部教授	
前田　正義	18	農実	神奈川県藤沢市鵠沼海岸7の21の25		雪印乳業工場長	
大戸　進		農林	名古屋市千種区大島町2の46		三井木材KK	
小池　栄一		工土	札幌市南14条西9丁目		北海道電力	
平井　宏和		工電	(東京OB会)			
安部　孝	19	工電	鈴鹿市白子町　電々公社鈴鹿電気通信学園			
坂井　弘		農化	福山市東深津町290		農林省中国農業試験場	
田口　暢茂		医	札幌市北22条東18丁目		道立千歳病院	
稲葉　恵一		農化	大阪府高槻市天神町2の16の15	5−2759	日本油脂KK	
福岡　邦泰		農農	札幌市琴似町宮の森19		道庁総合開発企画部	
大手　英夫	19	理化	(東京OB会)			
富塚　治郎	20	農畜	東京都青梅市新町都立種畜場内		東京都立種畜場	
岸田幸三郎		農化	不明			
羽鳥　栄治		工土	兵庫県西宮市松山町国鉄甲子園アパート1の306		国鉄大阪工事局	
小林　正英		農畜	(東京OB会)			
木全　幹雄	21	農化	東京都杉並区荻窪1の6の8		自衛隊陸上幕僚監部	
山崎　治夫	21	工冶	布施市西堤623狩勝工業			
宇津見千之助		農畜	栃木県小山市横町2206			
上野　新次	22	農農	新潟県加茂市西加茂3丁目		県立加茂高校	
和田　晴		農畜	札幌市琴似町新川841		道庁酪農草地課	
宮崎　利昭		工機	在ペルー		第一物産KK	
武田　祐幸		理地	(東京OB会)			
田之上家久	26	農水	東京都三鷹市牟礼公団住宅　三鷹台団地 10の104		日本放射線同位元素協会	

後藤　義英		農獣	札幌市円山西町２の９７		札幌東保健所	
斉藤　善一		農畜	弘前市若党町７９		弘前大学農学部助教授	
鈴木　敏夫		農畜	空知郡江部乙町江部乙高校公宅		江部乙高校	
渡植貞一郎		農畜	前橋市岩神町郡馬大学医学部内分泌研究所		郡馬大学	
鳶野　保			北海道標津郡中標津町		北海道農業試験場根室支場	
永井　重翁		農獣	岩手県水沢市新小路２　雪印乳業ＫＫ内		雪印乳業ＫＫ水沢工場	
梶谷　晴男		農水産	大阪市生野区新今里町５の１７		大阪化学合板ＫＫ	481−4433
吉本　正		農畜	仙台市荒巻中才１３の７		宮城県農業試験場	
古谷　昌司		農畜	（東京ＯＢ会）			
(28 27主)下飯坂　隆		農畜	（　〃　）			
佐藤　厳		農畜	（　〃　）			
福島　務	２９	医	札幌市琴似町２２５（在アメリカ）		北大産婦人科教室	
阿部晃一郎	３０	工鉱	新居浜市角根山根西		住友金属鉱山	
鎌田　正人		農畜獣	浦河郡浦河町西穂別	浦河3−284	ＫＫ鎌田牧場	
(28 29主)田中　浩		工治	神戸市葺合区　神戸製鋼ＫＫ		神戸製鋼ＫＫ	
正富　宏之		理動	釧路市鶴ヵ岱３番地		釧路市立郷土博物館長	
斉藤　成俊	３１	農経	札幌市北１条西２０丁目共同住宅３号		北海道信用農協連	
佐伯　和夫		獣	白老郡白老町萩野第三石山		昭和工業ＫＫ	
(旧石塚)大久保利彦		獣	天塩郡豊富町公営住宅２１の３		雪印乳業ＫＫ幌延工場	
加藤昌太郎		理物	（東京ＯＢ会）			
加藤　元		獣	（　〃　）			
千田　哲生		獣	（　〃　）			
岡本　洸		農生	（　〃　）			
荒川　滑	３２	経	札幌市界川町４９５	22−4652	札幌トヨタ自動車ＫＫ	21−8191
榎本　幸人		理植	淡路島淡路町岩屋 神戸大学理学部岩屋臨海実験所			
岡部　満雄		農畜	札幌市豊平５の１０道営住宅８の８２		道庁酪農草地課	
斉藤　実		経	富山市高原本町９６		不二越鋼材工業ＫＫ	
宮沢　寛		農林産	（東京ＯＢ会）			
（３１主）						

伊藤　亮	33	獣	岡山県阿哲郡神郷町下神代１００２ 新見営林署神代宿舎内			
松田　瓔		医薬				
乾　直道		理動	（東京ＯＢ会）			
栗原　康		工鉱	（　〃　）			
渡辺　俊弘		工応	（　〃　）			
柴田　久男	34	工電	北海道江別市対雁１　北電アパート		北海道電力ＫＫ	
今田　哲		農化	西宮市甲東園２－８５　武田薬品研究所		武田薬品ＫＫ	
生田　勝一		経	札幌市苗穂町４３		読売新聞ＫＫ	
菅原　照雄（22生）		文哲	〃　北４条西６丁目北４条アパート９０３		毎日新聞ＫＫ	
土井　敦		農畜	〃　手稲町字前田		ホクレン	24－3211
山本　智		水	樺戸郡浦臼町字浦臼内１４区		浦臼高校	
栗津健太郎		水	札幌市南１条西１７丁目		銀座屋パンＫＫ	
村山　哲		経	西宮市門戸荘１０９　小百合荘		本田技研工業ＫＫ	
樋口　正明		法	（東京ＯＢ会）			
千葉　幹夫		獣	（　〃　）			
中村　美幸		経	（　〃　）			
佐伯　雄二	35	農畜	徳島県名西郡石井町城内教員住宅１６号			
本橋　幹久		農畜	在サンパウロ			
奥野　静子（旧片山）		文英	札幌市北２条西２３丁目片山方	61－8414		
小長谷善高	35	水	東京都太田区山王２の３４の２４ NHK大森寮		ＮＨＫ・ＴＶ	
田中　紀介		農林産	（東京ＯＢ会）			
長谷川邦夫		法法	（　〃　）			
門奈　駿		医	（　〃　）			
森本　悌次		農林産	（　〃　）			
稲垣　修一（34生）	36	理化	名古屋市熱田区花表町１の２大同製鋼花表寮		大同製鋼	
佐藤　典子（旧佐藤）		医				
高林　鴻子（旧高隠）		医	（東京ＯＢ会）			
河原　紀夫		理地	（　〃　）			

湯浅　正之		農畜	（　〃　）			
吉田　亨		工衛	（　〃　）			
千葉　祐記	37	農畜	北九州市小倉区金鵄町２の５６の４　天風荘		雪印乳業ＫＫ	
広岡　暢夫（36主）		農畜	（東京ＯＢ会）			
森　弘聿		工精	名古屋市北区辻町１　大隈鉄工所第一寮		大隈鉄工所	
四柳　智久		医薬	（東京ＯＢ会）			
木塚　信次		農畜	（　〃　）			
伊藤　公一		医	札幌市南２５条西１２丁目		北大医学部	
大場　善明		文史	（東京ＯＢ会）			
鶴見　好博（35主）		理化	（　〃　）			
小島　杏介		水	（　〃　）			
小山　毅		教	（　〃　）			
市川　瑞彦	38	理物	札幌市北３２条東６丁目　井上武志方	72－3921	北大理学部大学院	
小出　秀達（37主）		医	〃　北１６条東４丁目　巴荘４号		北大医学部	
宮崎　健		文露			産経新聞大阪本社	
玉沢　一晴		医薬	（東京ＯＢ会）			
岡田　征至		法	（　〃　）			
志水　一允		農林産	（　〃　）			
清水　洋		農畜	（　〃　）			
原　重一		農農	（　〃　）			
堀川　芳男		農畜	（　〃　）			
実吉　峯郎		医薬	（　〃　）			
新原　輝久		理地	（　〃　）			
田中セツ子		農工	（　〃　）			
恩田　正臣	39	農畜	兵庫県岡崎市細川町山の神１２岡崎種畜牧場内		農林省兵庫種畜牧場	
入江喜美子		薬	東京都渋谷区西原２－１３－１４　鈴木方			
小林　則子（旧寺江）		農畜	札幌市北１１条東７丁目　すみれ荘	72－0525	天使女子大	

高木　佑太		農畜	沼津市牛臥３００４－６		台糖フアイザー沼津出張所	
小島　　武		医薬	神戸市兵庫区吉田町1の32鐘化研究所和風寮		鐘ケ淵化学ＫＫ	
荒木　伸也		水遠	帰省先　熊本県下益城郡南町隈庄 在スペイン	城南局４９		
三浦清一郎		教	札幌市北２９条西８丁目　福井方		北大大学院	
田村　雅英		工合	（東京ＯＢ会）			
野田　行文	４０	獣	（　〃　）			
大木　誠示		理数	（　〃　）			
吉田　賢一		工治	（　〃　）			
(旧御坊田) 守屋　　正		工精	（　〃　）			
八木　正己		理生	札幌市琴似八軒５条東１丁目		札幌光星学園高校	７１－７１６１
(３８主) 萩原　雅典		経	札幌市石山五区　前川正一方		定山渓鉄道	
滝沢南海雄		理植	〃　北２４条西３丁目　丸一荘		北大大学院	
(３９主) 松永　武彦		工電子	千葉県茂原市早野３５５０　誠和寮		日立製作所ＫＫ	
水野　佑彦	４０	理化	札幌市北２４条西４丁目朝日荘		北大大学院（理学部化学科生物化学）	
横田　　肇		農化	瀬棚郡今金町栄町２３４　まるびしアパート		明治乳業今金工場	今金９・３３９
菅野　　弘		農畜	室蘭市幸町１１９　胆振支庁農務課畜産係		胆振支庁	(代)２－９１３１
牧　　竜子		薬	札幌市南１条西１９丁目		札幌医大中央検査室	
滝沢　迪子	４２	文独	〃　北１１条西５丁目		北大文学部	
松尾　英彦	４１	水漁	在カナリー諸島（スペイン領）		日魯漁業	
八木多賀子		文哲	札幌市琴似町８軒５条東１丁目			
(旧八木) 大堀　慈子		法	〃　北１０条東８丁目		北大法学部	
黒沢　道雄		工機	福山市木之庄町３０４　ＮＫＫ木之庄寮		日本鋼管福山製鉄所	
高野　文彰		農農	（東京ＯＢ会）			
小栗　紀彦	４２	農畜	札幌市北１３条西１８丁目　中村吉雄方		北大大学院	内　２５４４
(４０主) 近藤喜十郎	４２	文史	名古屋市中区古渡町５丁目１６		自営	
高橋　昭夫		獣	野付郡別海村		別海村農業共済組合	
八木沢守正		理生	（東京ＯＢ会）			
山村　　勝		農林	札幌市北７条西１２丁目　米沢寮	２５－３５８６	北大大学院	７１－２１１１ 内　２５２９

加藤　正昭		工衛	札幌市北１１条東１丁目		北大大学院	
根岸　正充 (41主)		理地	〃　南１７条西１０丁目大崎方	51−9920	北海道開発局土木試験所	83−4161 内 56
阿部　勝彦	43	農林			大昭和製紙	
五十嵐　章		法	横浜市神奈川区高島台第一ビル モービル石油高島宿舎		モービル石油	
池田　統洋		工機	札幌市北２７条西１０丁目		北大大学院	
入江　圭		工衛	東京都世田谷区成城町８３		都庁	
高倉　宏輔		獣医			別海村農業共済組合	
降旗　正忠		工電			三菱電機	
仙波　和子		教	札幌市北１１条西３丁目　渡辺方	71−1734 枚方	北大大学院	
山本　紘明		経	大阪府枚方市朝日丘町１０番４９号 田宮三洋寮１号館５０３号室	41−9612	三洋電機	
浜岡　秀洋		工機	大阪府寝尾川市東大利６の５　浜明男方	21−2509	三洋電機	

東京ＯＢ会

氏　名	卒業年度		住　所	電　話	勤　務　先	電　話
高松　正信	第二代部長		世田谷区松原６丁目３６−８	(322) 6752	北大名誉教授・玉川大教授	
中野友二郎	昭４	農農	南多摩郡多摩町桜ケ丘３丁目３３−４		科学教育研修センター	
平山　常介	〃	工機	三鷹市井の頭５丁目５−１７		日本海事ＫＫ	
野間口英喜			杉並区永福町３３５	(321) 7617	日航ホテル社長	(571) 4911
中谷　勝紀	5	工機	杉並区桃井１−１５−２３			
間　克市	6	農畜	千葉県葛飾郡鎌ケ谷町発豊５２２		地方競馬全国協会参与	
岩垣　駿夫	〃	〃農	新宿区百人町4−420新宿住宅ＲＡ−15	(368) 3530	東京農工大教授	(0423)61−3311
河崎　秋三	〃	〃畜	千葉県印幡郡印西町			(04262) 6797
永松　四郎	7	〃〃	大田区千束町１−５８−９	(717) 3484	永松商事	(717) 3484
武田　朝男	8	〃〃	目黒区中目黒５−１８−２	(714) 7015	日本製酪協同組合	(433) 5754
東園　基文	9	〃農	目黒区五本木３−３０−１	(711) 8877	宮内庁待従職参事	(400) 0451
植村　勘一	10	〃畜	目黒区鷹番町４５	(712) 0390		
本田　桓康	〃	工機	千代田区紀尾井町４−１１	(262) 5524	プレス工業ＫＫ常務取締役	(044)26−2581
大迫　明徳	11	理化	世田谷区宮坂１丁目１４−９	(428) 4817	ＫＫバイエルン・ジャパン	(432) 4251

吉見　一郎	11	農経	北多摩郡加江町小足立６２０	(489)　0491	雪印乳業ＫＫ取締役	(353)　3111
渋谷　周平	〃	〃畜	渋谷区代々木１－２２		（社）日本アイスクリーム協会	
脇田代子郎	〃	〃化	神奈川県藤沢市辻堂西海岸			(212)　6411
滋賀　秀明	12	医医	港区芝白金三光町３６４	(441)　7844	大同製鋼ＫＫ東京診療所長	(901)　4169
前野　正久	〃	農畜	目黒区中目黒１－８５２		森永乳業中央研究所長	
小笠原義顕	13	工電	川崎市宿河原２２２３	(044) 82–3609	日本電気ＫＫ放送機事業部長代理	
桶本　勝登	〃	農経	杉並区上荻窪１－１９７	(391)　5383	人事院関東事務局長	(581)　1731
松平　悌	〃	〃農	渋谷区恵比寿４－１９－２４	(473)　3920	日本農産加工ＫＫ白岡工場長	
黒沢　良雄	〃	〃経	茅ケ崎市小和田４３３２	(046) 70–8676	日本長期信用銀行	
池内　武夫	14	〃畜	世田谷区若林４－２２－５	(414)　0361	日本中央競馬会理事	(591)5251～8
小田　昇	〃	〃〃	伊東市宇佐美２７８７　ホテルカスガ		自営	
中尾　敦司	15	工鉱	杉並区本天沼３－４－１４		住友ビル大日本鉱業ＫＫ	(211)　2671
小林　五郎	17	工電	神奈川県大磯町東町２－６４		沖電気工業ＫＫ特殊機器開発部次長	(452)　4111
前田　正義	18	農実	神奈川県藤沢市鵠沼海岸７－２１－２５		雪印乳業	
平井　宏和	〃	〃電	町田市玉川学園８－１８－９	(0427)32–8689	日本電気ＫＫ衛星通信開発室	(044) 41–1111
大手　英夫	19	理化	新宿区西大久保２－２１９	(365)　4523	東邦シートフレームＫＫ	(272)　2811
小林　正英	20	農畜	杉並区阿佐ケ谷北３－２６－１０	(339)　0869	東京都農業試験場	(0425)24–3491
富塚　治郎	〃	〃〃	青梅市新町都立種畜場内		東京都立種畜場	
木全　幹雄	21	〃化	杉並区清水１－６－８		自衛隊陸上幕僚監部第四部研究班	
武田　裕幸	22	理地	武蔵野境南４－２０－１１		国際航業ＫＫ地質部長	(265)　3661
古谷　昌司	28	農畜	浦和市別所３－３８－１０	(0488)22–5073	古谷製菓ＫＫ技術部	(0488)31–5873
下飯坂　隆	〃	〃〃	中野区白鷺２－１７－３	（和田方）(385)　3269	日本軽種馬登録協会	(429)　5684
佐藤　巌	〃	〃〃	川崎市岡上５１０－２８		雪印乳業ＫＫ技術部	
加藤昌太郎	31	理物	国分寺市西町４丁目けやき台３２－１０３	(0425)22–0596	防衛庁陸上幕僚監部	(268)　3111 内 558
加藤　元	〃	獣	杉並区善福寺３－１５－１３	(399)　4610	ダクタリ動物愛護病院	(334)　3536
千田　哲生	〃	〃	世田谷区弦巻町１５－２９		中央競馬会競走馬保健研究所	
岡本　洸	〃	農生	草加市草加松原団地Ｄ５８－２０４	(0489)　3–9407	十条製紙ＫＫ東京事業所	
宮沢　寛	32	農林産	逗子市山ノ根３－１２－１０	(0468)71–2487	日本揮発油建設部	(045)731–1261

乾　直道	33　理動	藤沢市辻堂北町２５５７	(0466)36-7162	癌研究所病理部	(918)　0111 内 472
栗原　康	〃　工鉱	板橋区下赤塚７６下赤塚公務員住宅１２		中小企業庁技術部	
渡辺　俊弘	〃　工応化	上尾市大字上字堤下３５９上尾シラコバト公団アパート１７－４０１		北炭化成工業ＫＫ	(0484) 41-2880～3
樋口　正明	34　法法	世田谷区上馬５－２３－８		東京都人事委員会任用部試験課	(212)　5111 内 4081
千葉　幹夫	〃　獣	世田谷区弦巻町５－２９		中央競馬会馬事公苑	
中村　美幸	〃　経経	中野区鷺宮６－１９－１９	(999)　2443		(0480)　2-0131
田中　紀介	35農林産	清水市横砂町１６－７　美幸荘		富士台板ＫＫ研究所	清水 34-1271
森本　悌次	〃〃〃〃	葛飾区高砂７－１－１４　好美荘		松下木材ＫＫ営業部	
長谷川邦夫	〃　法法	立川市砂川町６９２江の島東団地２５０		岩崎通信機ＫＫ経理課	
門奈　駿	〃　医医	茅ケ崎市旭ガ丘１３－４	(0467)82-5746	国際興業航空サービス部	
河原　紀夫	36　理地	府中市白金台６－２－２８		アジア航測ＫＫ	
湯浅　正之	〃　農畜	武蔵野市西窪４１１　伊藤忠三鷹寮	(0425)　5095	伊藤忠商事ＫＫ畜産課	(661)　2171
吉田　亨	〃　工衛	八王子市子安町５６６　子安アパート		高砂熱学工業ＫＫ技術部	(251)　7121
高林　嬉子	38　医医	横浜市磯子区岡村町２３８	(751)　4431		(583)　6871
大場　善明	37　文史	足立区栗原町１５５５栗原団地１４－１０４		読売新聞広告部	(561)　1111 内 607
鶴見　好博	〃　理化	大田区大森北３－１１－７	(764)　3970	三菱江戸川化学ＫＫ研究所	(251)　0191
小島　杏介	〃　水	横浜市神奈川区菅田町２８７２		淀橋保健所	(368)　0186
四柳　智久	〃　医薬	目黒区大岡山２－５－２３　若竹荘		東大薬学部製剤学教室	(812)　2111 内 7271
木塚　信次	〃　農畜	杉並区久我山２－６１３－７	(392)　3825	湘南食品ＫＫ	(045)871-1921
広岡　暢夫	〃　〃〃	茨城県西茨城郡岩間町　全販連内			
小山　毅	〃　教	世田谷区赤堤３－６－１２　戸沢方	(328)　6372	専修大学文学部	
玉沢　一晴	38　医薬	浦和市大谷場１－９－６　倉橋方	(0488)82-3436	山之内製薬ＫＫ中央研究所	(960)　2171
岡田　征至	〃　法法	川崎市木月大町９８　拓銀寮	(0447)　2-6249	北海道拓殖銀行築地支店	(543)　1011
志水　一允	〃　農林産	江東区深川三好町２－１６	(641)　8048	農林省林業試験場	(711)　5171 内 306
清水　洋	〃　農畜	横浜市南区日野町大多良住宅１０－１０４		畜産局食肉鶏卵課	(501)　3776
原　重一	〃　〃農	横浜市港北区日吉本町２０９６日吉第三コーポ４２	(0446)　1-8226	交通公社調査部	(211)　3211 内 3575
堀川　芳男	〃　〃畜	中野区上高田２－１６	(385)　8685	アメリカーナ・コーポレーション日本支社	
実吉　峯郎	〃　医薬	渋谷区長谷戸４６	(461)　5550	国立ガンセンター研究所	(542)　2511

新原　輝久	38　理地	北多摩郡狛江町泉１２８４		アジア航測ＫＫ	
田中セツ子	〃　農工	世田谷区玉川奥沢３－１２１	(702)　1365	高千穂交易ＫＫ	(294)　1951
田村　雅英	39 工合化	八王子市大和田町１４００小西六大和田寮	(0426)42-5014	小西六写真工業ＫＫ日野工場	(0425)82-1521
入江喜美子	〃　医薬	渋谷区西原２－１３－１４　鈴木方			
野田　行文	40　獣	東村山市萩山町3－94中外製薬久米川第2寮	(0423)92-4394	中外製薬ＫＫ総合研究所	(987)　7111
大木　誠示	〃　理数	与野市大戸４３９　芝崎アパート		雪印乳業ＫＫ	(357)　3111
吉田　賢一	〃　工冶	横浜市南区大久保町５５９－２第二北斗寮		日本揮発油ＫＫ	
守屋　正	〃　〃精	大田区田園調布２－４０　第一桜ケ丘寮		三菱重工ＫＫ東京製作所	
高野　文彰	41　農農	杉並区西田町１－５２１　清雲荘		日本技術開発ＫＫ	(202)　5111 内 79
八木沢守正	42　理生	目黒区八雲２－１９－２	(717)　5930	東大	(812)　2111 内 6659

現役部員

氏　名	学年学部学科	現　住　所	帰　省　先
遠藤　裕子	4　理　化	札幌市北１１西３　渡辺方（71）1734	旭川市春光町５区４条３６　(5)　5979
斉藤　勝雄	4　農　工	〃　澄川１２　(83)　6281	同　左
田中　力	4　獣　医	〃　北１８西６　静山荘	東京都三鷹市井の頭３－７－１０
寺崎　弘恭	2　教　理	〃　北１７西８　恵迪寮（71）3413	鹿児島県肝付郡山町前田
春田　恭彦	4　農　畜	〃　北２４西３　加藤方	東京都葛飾区東金町２－５－１２　(608)　1380
村井　弘一	4　農　畜	〃　北７東４	三笠市多賀町１８
山本　進	4　水　化	亀田郡亀田町字中字　北晨寮	北海道河東郡音更町東士狩
今井　雅子	3　農　化	札幌市北３西１５　(63)　1621	同　左
小野　政則	3　農林学	〃　北１７東１　札幌ボーニハウス	岡山県倉敷市平和町４８６
加藤　公敏	3　理　化	〃　北２５東１　鎌田方	東京都大田区南馬込６－２９－１
黄川田　梓	4　土　木	〃　北７西１３　進修寮（25）2091	東京都世田谷区岡本町１２９７
佐々木好子	3　農農学	〃　北２７西３　佐藤正方（72）6707	青森県八戸市鮫町字古馬屋２３
佐藤　潤子	3　理　化	〃　南４西８　(51)　0047	同　左
篠崎　正樹	1　医	〃　北１２東１　窪田方（72）0058	千葉県山武郡土気町土気１６３２
高橋　霞	3　理　植	〃　北１９西４　鈴木方	夕張市若葉８背地

橋口　廚	1	医	札幌市北２３西７　土田方	福岡市三宅堂
千場　信子	3	水　殖		
本田　徹	1	医	〃　北１９西２　佐藤方（７１）１８９１	東京都豊島区高田１－１－１９
八木　禧徳	2	医	〃　琴似八軒５条東１丁目	長万部町中山４１１
山下　邦康	1	医	〃　北１９東１３　春名方	高知県土佐清水市窪津
吉田　順子	3	薬	〃　北９西４　（７２）０６６８	同　左
井出　秀三	2	教　理	〃　北１７西８　恵迪寮２２号	長野県松本市女鳥羽３－６－８
太田　清澄	2	教　理	〃　北１４西１２　酒井方（７３）８８６５	長野県松本市宮淵東７０６－１
加藤　進二	2	教　文	〃　北１９西４　村山方（７１）６５８１	大阪市南区塩町通４－３３
神田　憲二	2	教　理	〃　北２１西５　錦荘	神奈川県鎌倉市大船２７５　（６）３８２０
佐々木　元	2	教　理	〃　北２２西１８　（７２）６０８１	同　左
庄子　仁	2	教　理	〃　西岡３２３	同　左
堤　秀世	2	教　理	〃　北２７西１１	同　左
中寺　清久	2	教　理	〃　北１１西２　前田方	福岡県田川市本町８－４
長谷川　仁	2	教　理	〃　北２１西５　錦荘	名古屋市千種区若水町３－２３　（７５１）１３６９
藤沼　光雄	2	教　理	〃　北１４東９　若林方	東京都大田区池上徳持町１０３
茂澄　孝	2	教　理	〃　北１６東１０　田中方	静岡県田方郡天城湯ケ島町湯ケ島８９２の２
松井　亮	2	医　進	〃　北４西１１　若木泰秀方（２３）６４６５	石川県金沢市小立野４－４－７１
松永由可里	2	教　理	〃　北１５東４　佐藤方（７３）０８４８	札幌市手稲町山口　市営住宅１の３２号
村田　節子	2	教　理	〃　北１９西５　青野方	東京都品川区旗の台５－８－１３
安川　玲子	2	教　理	〃　北２西２７　小部方（６１）２７５８	岩内郡共和村字発足

パン の 店

銀 座 屋 GIN ZAYA

BAKERY

Sapporo さっぽろ 南1西17 TEL ⑥2 0701

お酒飲みたし おチョコなし
ビール飲みたし グラスなし
カクテルしたし 器具はなし

酒類の御相談は

沢 田 商 店

北大正門前 TEL 71－0828

ほまれ特製

鍋料理

成吉思汗鍋

やき鳥

御会合御会食に

御利用下さい

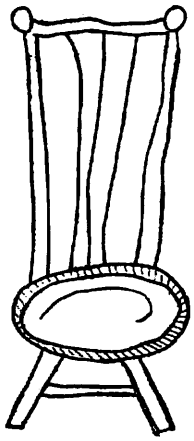
銀鳳北の誉直営

第五ほまれ

狸小路七丁目

TEL(22)一六四八

Music & Coffee



銀座

トリコロール

さっぽろ　北8西4（北大正門前）

TEL (71)9219

乗馬用ズボン専門店
松田屋

田辺洋服店

札幌市豊平四条六丁目平岸通り
TEL (81)7341

おふくろのあじ

まことや

札幌市北14条西4丁目
TEL (71)7494

亭　北　軒

モ　ツ　ラ

札幌市北１６条西４丁目

ＴＥＬ　(71)６４５０

落着いて飲めるところ

ＮＩＫＫＡ　ＢＡＲ

ＭＡＢＯ̄

北１３西４

室内のおしゃれは

掛　軸
額　装
　襖
壁　装　　札幌市南三条西六丁目

星　野　表　具　店

T　(22)5860
　　(26)7068

札　幌
今　井
電話代表25・1151

今井デパート

馬　術　部

札専・札信販加盟店

㊤ナカタ

本　店　北14・東1
TEL　㉒1331

支　店　グランドホテル
TEL㉖3311 内線 263

暮しの中の小休止

コーヒーのある生活

画廊
喫茶　タマキ

北18西4　73－4890

編集後記

◇追コンを目標として部報小委員会は発足したが、原稿の集まりの悪さ、委員会の怠慢からやつと五月の声を聞こうとする時に発行の運びとなつたことは委員会としても残念なことであり、関係各位に大変に御迷惑をかけたことをお詫びいたすしだいです。

◇本号の特色は現役部員の不注意により他界させてしまつた北飄号の特集と思います。北飄号の事故を顧みて、二度とこのようなことの起さないことを新たに誓うものです。

◇原稿の依頼を受けていましたが、公私共多忙であつたため遅れてしまいました。締切日が過ぎていることを承知していますが、今日やつと書いたので送ります。編集の都合上間に合わなければ、ボツにしてしまつてもかまいません。編集委員に迷惑をおかけしましたことをおわびいたします。

これはある先輩からの手紙の文です。原稿を約束日が過ぎても大きな顔をして出さない部員に対して鬼のようになつている編集委員はめつぽう涙もろくなつており、この種の手紙には涙を流して喜ぶものです。

◇部報を編集する上でいろいろ考えさせること、難しさ等人生の機微に触れることが出来たのは委員として、大きな経験とうれしく思つております。

◇最後に御多忙なおりに寄稿して下さいました、O・B諸兄姉はじめ多くの方々ならびに、広告取りに奔走して下さいました部員

諸兄姉に深く感謝するしだいであります。

（加藤）

部報小委員会

加藤公敏　八木禧徳

今井雅子　井出秀三

村田節子

部報第十三号

昭和四十三年四月発行

発行者　北海道大学体育会馬術部
（札幌市北十七条西六丁目北大体育会内）

編集者　部報小委会

印刷所　北大生協プリント部
札幌市北八条西八丁目

制服制帽のスマートな乗務員

乗心地よい北都ハイヤーをあなたのおともに
快適な道内観光の旅は
北都バスのエアーサスパノラマ展望車で

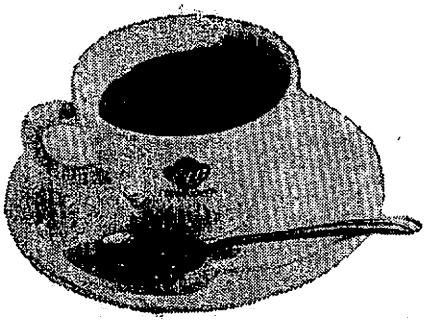
北都交通株式会社

取締役社長　武田忠幸

本　社　　札幌市北30条東１丁目
TEL (71)—７２１４

ハイヤー部(71)—４１８１　バス部 (77)—２８２１

世界のコーヒを味わえる店



和洋菓子と珈琲の店
ご会合、ご宴会、クラス会に
サービスの行き届いた当店をご利用下さい。

洋菓子とコーヒー　階上レストラン
パーラー 石田屋
北3西3道庁前T㉘3005㉒1872